

# DAILY<sup>®</sup> PROGRAM

## 高校2年——国語（見本）

# 1

### 4月号の内容

今月の現代文は、詩と論理的文章について学習します。古文では「更級日記」と「枕草子」、それに「万葉集」を読みます。文法は助動詞、漢文は基本的な事がらに関する学習です。

#### 現代文

第1日	詩／詩を理解し、味わう……………4
第2日	論理的文章／語句の意味をつかむ……………14
第3日	論理的文章／指示する語句の内容をつかむ……………23
第4日	論理的文章／文や語句の接続関係をつかむ……………31
第5日	論理的文章／係り受けをつかむ……………40
第6日	論理的文章／〈総合〉読解の過程をふんで……………48
第7日	確認テスト……………56

#### 古典

第8日	更級日記／東路の道の果てよりも……………62
第9日	更級日記／かくのみ思ひくじたるを……………69
第10日	枕草子／春はあけぼの……………77
第11日	万葉集／玉だすき……………85
第12日	文法／助動詞「ず・る・らる」……………95
第13日	文法／助動詞「き・けり」……………107
第14日	漢文の基礎／漢文の読み方……………116
第15日	確認テスト……………123

# TRAINING PAPER®

## 高2国語 効果的な使い方

### 〈1号の構成〉

第1日	第2日	○○○○	第5日	第6日	第7日	第8日	第9日	○○○○	第13日	第14日	第15日
現代文学習日						古文学習日			漢文学習日	テスト	

#### 現代文の学習

#### 古典の学習

- 1号は15日で構成され、前半の7日分が現代文、後半の8日分が古典の学習になっています。それぞれの最終日（第7日・第15日）は確認テストです。

### 〈1日の構成〉

#### 現代文

例題	・その日の学習項目を、例題を解きながら、具体的に考えていきます。
説明	・例題を踏まえた、解き方や考え方の易しい解説です。
トレーニング	・入試問題を効果的に利用して、ステップを踏みながら十分な読解練習をします。
漢字・語句のトレーニング	・最後の1ページでは、入試によく出る漢字の読み書きや語句の練習を行います。

#### 古典

古語の意味を覚えよう トレーニング	・その日のテキストに現れる基本古語を、例文を口語訳しながら覚えていきます。
作品や作者などの解説	・文学史的な内容やテキストの背景などを押さえます。
きょうのテキスト 語 釈	・テキストのすぐあとには、きわめてくわしい語句の解釈がついています。
トレーニング 通 釈	・語釈を参考にしながら、ステップを踏んで読解練習をしていきます。

解 答 （現代文・古典とも巻末にあります。ていねいな〈解説〉がついています。）

### 〈効果的な使い方〉

#### ❖ 現代文、古典のバランスを考えながら学習していこう

学習日は、現代文、古典の順になっていますが、必ずしも現代文、古典の順に進める必要はありません。現代文と古典を交互に学習するなど、バランスよく進めましょう。

#### ❖ 2日にトレーニングペーパー1日分の割合で、計画的に学習していこう

この割合で学習していけば1か月で1号分を終えられます。万が一消化しきれないようでしたら、何日かに絞って学習し、次号から新たな気持ちで取り組んでください。

#### ❖ 1日分の学習は、順を追い、指示に従いながら進めよう

順を追い、指示どおりにトレーニングしていくのが基本です。ただし、慣れてきたら、自分なりに使い方をくふうしてかまいません。自分の力に応じて有効に利用していきましょう。

#### ❖ 忘れずに、1問1問しっかりと答え合わせをしよう

まちがえていたら、考えながら実際に書き込んで直しておくことが大切です。なお、よく考えても問いが解けないときは、こだわりなく解答を見て確かめ、次に進みましょう。

# えと (干支) って何？

「かかるほどに、宵うち過ぎて、子の時ばかりに……」

「竹取物語」の、かぐや姫昇天の夜の記述である。「そうこうしているうちに、宵も過ぎて、子の時のところに」大空から天人たちが降りてくるのであるが、では、「子の時」とはいったい何時ごろなのだろうか。

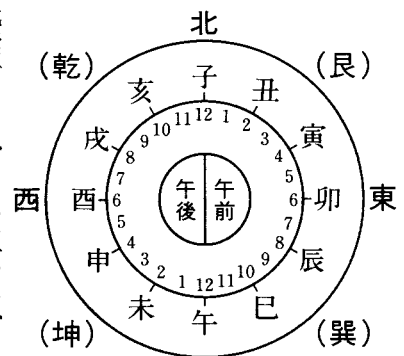
古代の時間は、多分に感覚的なもので、宮廷では漏刻という水時計を用いて計時をしていたが、一般にはだいたいの時間ですませていたのである。そして、一日をおおまかに十二分して、それぞれに十二支の名称をあてていた。すなわち、次のとおりである。

子	ね	0時
丑	うし	2時
寅	とら	4時
卯	う	6時
辰	たう	8時
巳	み	10時
午	うま	12時
未	ひじ	14時
申	さる	16時
酉	とり	18時
戌	いぬ	20時
亥	ゐ	22時

ただ、「子の時」といった場合、ほぼ真夜中ということで、午後11時から午前1時ぐらいの時間帯をさすのであって、決して午前0時をさすのではないことは頭に入れておくこと。そして、日の出を卯の時、日の入りを酉の時として、昼は太陽の高さあたりを目安にして時を判断したということもおさえておこう。

また、十二支は方角をさす場合にも用いられた。子が北にあたり、卯が東、午が南で酉が西になるのである。ただ、この場合、北東は丑と寅の間にあたるので「うしとら」とよび、「艮」という字をあてる。同様

に、南東は「巽」、南西は「坤」、北西は「乾」である。  
 へ十二支と時刻・方位



さて、十二支は、時刻・方位を表すだけでなく、年にもつけられていることは知っているだろう。干支のはじめはねずみの年、つまり子年で、甲子の年などという。「亥」は十二支であるが、「癸」のほうは、十干とよばれるものである。

中国の五行説によると、この世界を構成するのは「木・火・土・金・水」の五元素であり、この五つを、日本でさらに「兄・弟」の二つに分け、中国の数詞である十干にあてたのである。

この十干と十二支を組み合わせたものが干支である。中国では紀元前数千年の昔から用いられていたというから、たいへん長い歴史をもっているものである。

干支は十と十二の組み合わせであるから、全部で六十とおりである。古代には、年だけでなく、毎日にもこの干支があてられていた。現代でも初午、お酉さま、土用の丑の日などが残っていてそれと知られる。

例えば、癸亥の年卯月(四月)一日己未などという言い方をしている。きょうは何の日か調べてみるのも一興だろう。

水	金	土	火	木	五行
壬	庚	戊	丙	甲	兄
癸	辛	己	丁	乙	弟

〈十干〉

# 現代文

---

## 詩を理解し、味わう

きょうは、二年生になって最初の学習日ですね。

今年も、一步一步着実に、国語の力を身につけていきましょう。

まず第1日は、詩の学習をします。

今日わたしたちがいう意味での「詩」は、西洋から取り入れられたものであり、一般的に明治十五年の「新体詩抄」がその最初とされています。「新体詩」とは、漢詩(それまで「詩」といえば「漢詩」のことでした)・短歌・俳句などの「旧体詩」に対して用いられたことばです。この「新体詩抄」は三人の教授の共著で、西洋の詩を模範として創作した詩が五篇と、翻訳したものが十四篇収められていました。

その後、すぐれた翻訳詩集の刊行や新進の詩人たちの登場によって詩はしだいに盛んとなり、近代詩から現代詩へと展開されていくのですが、そのような文学史的なことがらについては、9月号で学習します。

きょうは、詩についての基本的な知識を身につけながら、有名な詩をいくつか読んでみましょう。



## ● 詩の種類

## (1) 用語のうえからの分類

日本の詩を用語の面からみると、文語詩と口語詩に分けられます。これはあなたもよく知っていますね。次に内容からみると、左の三種が、西洋での古くからの分類です。

## (2) 内容のうえからの分類

**叙事詩(エピック)**——民族・国家などの歴史的な事件や英雄の行をうたった詩。ホメロスの「イリアス」「オデュッセイア」、ダントの「神曲」、ミルトンの「失樂園」などは有名。日本では、「平家物語」が最も叙事詩に近いといえます。

**叙情詩(リリック)**——個人的な感情や想いをうたった詩。叙事詩が今日ほとんど姿を隠したのに対し、盛んに作られており、今の日本の詩はほとんどこれです。なお、**叙景詩**(自然の景色や風物をうたった詩)も広い意味では叙情詩に入ります。

**劇詩(ドラマ)**——詩的形式で書かれた戯曲のこと。十九世紀初めまでの戯曲は詩の一種で、せりふがすべて(もしくは、せりふの重要な部分)が韻文で書かれるのがふつうでした。シェークスピア、ラシーヌ、ゲーテなどみなそうであり、今でも西洋では戯曲の一分野として、その伝統は残っています。日本では、北村透谷きたむらとうごくの「蓬萊曲」ほうらいきょくなどがあげられる程度です。

(3) 形式のうえからの分類

定型詩——ある一定の基準にのっとり、整然とした形式とリズムをもった詩。基準の要素としては、行数・句数・音節数・音節のアクセント・押韻のしかたなどがあります。西洋にはさまざまな種類の定型詩がありますが、ソネット(十四行詩)は特に有名です。また中国には、絶句や律詩がありますね。これらは、さまざまな要素についてかなり厳密な基準がありますが、日本の定型詩にはそれほどものではなく、音節数による音数律が基調となっています。

たとえば次の詩(どちらも島崎藤村の詩で、上は「千曲川旅情の歌」の冒頭の部分、下は「初恋」の冒頭の部分です。)を、指折り各行の音数を数えながら、大きな声で読んでみましょう。

小諸なる古城のほとり 雲白く遊子悲しむ 緑なす繁藎は萌えず 若草も藉くによしなし	まだあげ初めし前髪の 林檎のもとに見えしとき 前にさしたる花櫛の 花ある君と思ひけり
---	---

上は各行が五音・七音で統一された五七調の定型詩、下は各行が七音・五音で統一された七五調の定型詩です。五七調の重厚なリズム、七五調の軽快かつ優美なリズムを味わってください。

なお、定型詩の多くは文語詩であり、五七調や七五調のほかに、五五調、八六調などがあります。

自由詩——形式に縛られないで、自由に作られた詩。日本では明治末から作られるようになり、今日の詩のほとんどがこれにあたり

ます。

散文詩——散文の形で書かれた詩。形式としてはまったくの散文ですが、詩的な内容をもっているものをいいます。

では最初のトレーニングです。まず、文語詩を読んでみましょう。

トレーニング

解答は巻末にあります

1 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。(関西大・京都女子大)

小景異情 その二

室生犀星

ふるさとと遠きにありて思ふもの  
 そして悲しくうたふもの  
 よしや  
 うらぶれて異土の乞食<sup>かたあ</sup>となるとも  
 帰るところにあるまじや  
 ひとり都のゆふぐれに  
 ふるさとおもひ涙ぐむ  
 そのころもて  
 遠きみやこにかへらばや  
 遠きみやこにかへらばや

● 語句注

ふるさと——作者の室生犀星の故郷は金沢であった。

よしやたとえ。かりに。

うらぶれる（落ちぶれたり、不運なめにあって）情けないありさまになる。みすばらしい姿になる。

異土 異郷。異国の地。

乞食 「かたる（かたい）」は本来「傍居」と書き、こじきを意味する。

なるともなつたとしても。

帰るところにあるまじや帰る所では（けつして）ないだろうよ。

都 東京を指す。なお、9・10行めでは「みやこ」とひらがなで書かれてはいるが、意味内容は同じである。

そのころもその心をもって。その心を胸に抱いて。

かへらばや帰りたいものだ。「ばや」は自己の願望を表す助詞。

「小景異情」は「その一」から「その六」までありますが、この「その二」は特に有名です。「小景」とは日常目にふれるささやかな情景、ここでは作者の故郷である金沢の景色・風物を指します。「異情」はそれにそぐわない自分の心。「その二」には具体的な景色・風物が出てきませんが、ほかの部分で「白魚」「橋」「すもも」「あんず」などがうたわれています。

- (1) この文語詩は、定型の型とおりではありませんが、全体をとおしであるリズムが感じられます。それはどのようなリズムでしょうか。
- 調という形で答えなさい。

この詩のリズムについては、ほかに1・2行め末の「ふもの」とか、3・5・9・10行め末の「や」といった押韻的な要素、また9・10行めでの同じ詩句の繰り返し（リフレイン）にも注意しておきましょう。

- (2) 「そのころ」（8行め）の「その」が指している部分を書き抜きなさい。

- (3) この詩を構成上四段に分けると、二、三、四の各段はどこから始まりますか。それぞれ初めの三字を書き抜いて答えなさい。

- ① 二段……………〔 〕  
② 三段……………〔 〕  
③ 四段……………〔 〕

- (4) また、その四つの段の調子はどのように変化していますか。次の中から適切なものを選びなさい。

- (ア) 高低高低 (イ) 低高高低 (ウ) 低高低高 (エ) 高低低高

- (5) この詩の中で、作者はどこにいますと考えられますか。A「ふるさと」の金沢か、B「都」とある東京かを記号で答えなさい。

では最後にこの詩の主題を考えましょう。

(6) この詩はもちろん叙情詩ですが、主題として適切なものを次の中から選びなさい。

- (ア) 東京への強いあこがれ。
- (イ) 故郷に対する強い嫌悪感と訣別の情。
- (ウ) 故郷に対する愛着と憎悪の入り乱れる思い。
- (エ) 故郷に対する淡い愛情と思慕の念。

この詩では、前半と後半で作者の気持ちが大きく変化しています。どのように変化していますか。それをつかめば、この詩の主題もはっきりしてきます。

ここで答え合わせをしましょう。答えの解説もしっかり読んでください。この詩は「抒情小曲集」という詩集に収められていますが、これは近代詩史上最も美しい叙情詩集の一つに数えられています。一度読んでみるとういでしょう。

◆作者・作品紹介／室生犀星（一八八九年～一九六二年） 詩人・小説家

一八八九（明治二十二年）年、石川県金沢市に生まれる。高等小学校を二年で中退。裁判所の給仕から新聞記者を経て、一九一〇（明治四十三年）年、詩人として立つべく上京したが、翌年生活の窮乏により帰郷。以後数年間、上京、帰郷の放浪生活が続く。やがて詩人として認められ、のちに小説も書くようになる。代表的な詩集に「愛の詩集」「抒情小曲集」などがあり、小説には「幼年時代」「性に目覚める頃」「杏つ子」など数多くの作品がある。一九六二（昭和三十七）年、肺癌で死去。

次の詩を読む前に、詩のリズムについて基本的な知識を身につけましょう。

### ●詩のリズムとは？

散文が比較的近い時代に生まれたのに対し、詩の発生は大昔にさかのぼり、もともとは舞踊とともに音楽に合わせて歌われたものでした。叙情詩がリリックと呼ばれるのも、それがリールという七弦の竖琴に合せて歌われたものだったからです。詩にリズムが深くかわる理由もそれでわかるでしょう。

さて「リズム」ということは、音楽や詩はもちろんとして、さまざまな場合に用いられますが、つまりは何か規則的に繰り返される時に生まれてくるものです。

詩の聴覚的なリズムを「韻律」といいますが、それには次のような要素があります。

#### (1) 音位律と音数律

音位律——音声の強弱・長短・高低などによってある単位を作り、それが規則的に繰り返されるようにことばを組み合わせてリズムを作ります。一般的に、西洋や中国の詩はこれです。

音数律——音節の数によってある単位を作り、それを繰り返します。日本の詩がこれで、たとえば七音・五音の単位を繰り返せば七五調のリズムが生まれます。

#### (2) 押韻

あることばを発音したときのひびきを韻といいますが、同じような韻をもつことばを規則的に繰り返すことにより、リズムが生まれます。行の頭で繰り返すのを頭韻、行末に繰り返すのを脚韻といいます。



Tyger, Tyger, burning bright  
In the forest of the night

(トラ、トラ、輝きもよめる  
闇夜の森の中。)

右の詩(W・ブレイクの「虎」の一節)では、——線部が押韻されています。

起句 ○○○●●  
江碧鳥遼白 ○○○●●  
承句 ○○○●●  
山青花欲然 ○○○●●  
転句 ○○○●●  
今春看又過 ○○○●●  
結句 ○○○●●  
何日是帰年 ○○○●●

○＝平声(なだらかな発音の文字)

●＝仄声(変化のある発音の文字)

◎＝押韻する文字

右の漢詩(杜甫の「絶句」)形式は五言絶句(五言絶句)では、「ゼン」と「ネン」が押韻されています。また、「平仄」(音位律)も整えられていますね。この定型詩が、日本のそれとは比較にならないほど、厳密な基準に従っていることに注意しましょう。

日本の詩では、正確な意味での押韻はないとされています。(さまざまに試みがなされましたが、日本語の性格上うまくいきませんでした。)しかし、先の「小景異情」の「もの」とか「や」の繰り返し返しのようなのは、それにあたると考えてよいでしょう。

定型詩ではリズムが、ある一定の基準(西洋や中国では一般的に音位律と押韻、日本では音数律)によって、整然と調えられています。またそうでなくても、詩の中にことばとか音が何らかの形で繰

り返されれば、当然聴覚的なあるリズムが生まれるわけです。このようなリズムを味わうには、音読がたいへん重要なことですね。

### (3) 内在律——内なるリズム——

右に説明したようなリズムが、外部に直接現れる外在律であるのに対し、詩の内部にある種のリズム感が感じられる場合があります。これを内在律といいます。「小景異情」では、(4)の答えの説明したように、作者の心情の高まりの繰り返し内内在律を生み出していましたね。

## トレーニング

解答は巻末にあります

### 2 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

(茨木女子短大)

鹿しか

村野四郎むらのしやう

鹿は 森のはずれの

夕日の中に じつと立っていた

彼は知っていた

小さい額が狙ねらわれているのを

けれども 彼に

どうすることが出来ただろう

彼は すんなり立って

村の方を見ていた

生きる時間が黄金のように光る

彼の棲家<sup>すみか</sup>である  
大きい森の夜を背景として

(1) この詩は次のどれに相当しますか。それぞれ適切なものを選び、  
「」に記号で答えなさい。

- ① A 口語詩      B 文語詩  
② A 叙情詩      B 叙事詩  
③ A 定型詩      B 自由詩

① 「      」      ② 「      」      ③ 「      」

(2) この詩に用いられている表現技法について、次の問いに答えなさい。  
い。

① 倒置法が用いられている部分に——線を引きなさい。

「倒置法」とは、語順を普通とは違う並べ方にして、強調や余韻の効果を  
あげる技法のことです。

② 直喩<sup>ちよく</sup>を用いて表現されている一行を書き抜きなさい。

③ 鹿のことを「彼」と呼ぶような表現技法を何といいますか。

④ この詩の次のことばは、それぞれ何かを象徴していると考えられます。それは何ですか。「」に生または死のどちらかを書き入れて答えなさい。

「森」(1行め) …………… 「ア」      「の世界」  
「村」(8行め) …………… 「イ」      「の世界」  
「大きい森の夜」(11行め) …… 「ウ」      「の世界」

(3) この詩の主題を次のようにまとめました。後から適切な語句を選んで「」に書き入れなさい。

① 「」を前にした②      「」の最後の一瞬が放つ、緊張感にあふれたこのうえない③      「」に対する④

夕日      生      死      黄金      あきらめ      むなしさ      鹿  
美しさ      悲しみ      怒り      感動      みにくさ

答え合わせをしたら、次は詩の読み方について、ちょっと考えてみましょう。

◆作者・作品紹介／村野四郎（一九〇一年～一九七五年） 詩人

一九〇一（明治三十四）年、東京に生まれる。慶応大学を卒業。初め俳句を作ったが、その後詩に移った。第二詩集「体操詩集」は種々のスポーツを素材に、ダイナミックなイメージを展開した個性的な詩集として、たいへん有名である。ほかに「抒情飛行」「実在の岸辺」「抽象の城」など多数の詩があり、また詩論に「今日の詩論」「現代の詩論」などがある。

●詩を読むときの注意点

(1) 散文との違いに注意しよう。

「詩は舞踏、散文は歩行」と言ったのは、今世紀最高のフランスの詩人・ポール・ヴァレリーです。これは散文が、目的地に着けば（つまり、ある内容を伝えれば）ことばが消えてしまってもかまわないのに対して、詩の場合はことばの一つ一つを離れてその内容を語りえず、また一行一行が、舞踏の一瞬一瞬の動きと同様に、独立した美しさをもたねばならないことをたとえたものでしょう。

もちろん、この詩は何を伝えようとしているのかと考えることは重要です。しかし、その詩がどのようなことばでどのような表現されているかを考えることも同じく重要であり、またそれを抜きにして内容を語ることはできないのです。「詩のことばは、散文と違って置き換えがきかない。」と言われるのは、そのためです。

(2) 詩の種類・形式・リズムに注意しよう。

これらのことについては、これまでの説明で十分理解できていることと思います。「この詩は、文語で書かれた叙情詩だ。定型ではないが七五調のリズムがある。」というように、すぐわかるようになるといいですね。

(3) 用いられている表現技法に注意しよう。

先の「鹿」でもわかるように、詩にはさまざまな表現技法が用いられます。うっかりすると見逃しますから、十分注意して、その内容や効果を把握しなければなりません。

(4) イメージを正しくつかもう。

詩においては、作者は一語一句のもつイメージに自分の思想や感情を託しています。論理的にはつながらないものも、詩の中ではしばしばイメージによつて関係づけられ、それが新鮮で効果的な表現を生みます。特に、現代詩の難解な表現などに対しては、理屈で説明しようと焦らず、映像化することによつて心で味わい取るという姿勢が必要でしょう。

では、最後のトレーニングです。あなたもきっと好きになるとても美しい詩です。

トレーニング

解答は巻末にあります

③ 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

〔東京医科歯科大〕

はじめてのものに

立原道造

ささやかな地異は そのかたみに  
灰を降らした この村に ひとしきり  
灰はかなしい追憶のように 音立てて  
樹木の梢に 家々の屋根に 降りしきった

その夜 月は明か<sup>あかる</sup>つたが 私はひとと  
窓に凭<sup>もた</sup>れて語りあつた (この窓からは山の姿が見えた)  
部屋の隅々<sup>すみずみ</sup>に 峡谷<sup>きやうく</sup>のように 光と  
よくひびく笑い声が溢<sup>あふ</sup>れていた

——人の心を知<sup>し</sup>ることは……人の心とは……

私は そのひとの蛾<sup>が</sup>を追う手つきを あれは蛾を  
把<sup>とら</sup>えようとするのだろうか 何かいぶかしかつた

いかな日にみねに灰の煙の立ち初<sup>はじ</sup>めたか  
火の山の物語と……また幾夜さかは 果して夢に  
その夜習つたエリーザベトの物語を織つた

● 語句注

地異 地上に起こる異変。地震・洪水・噴火など。「ささやかな地異」  
とは、ここでは浅間山の小爆発のこと。作者は浅間高原を愛し、  
山のふもとの追分村にしばしば滞在して多くの詩を書いた。

かたみ 記念として残したもの。なごり。  
峡谷のように 部屋のすみずみの様子をたとえた直喩。正確なたとえ  
はいえないかもしれぬが、山麓の高原地帯が連想されて美しい。

火の山の物語と…… 浅間山にまつわる物語。何かそのようなことが、  
その夜の話題となつたのであろうか。いずれにしても、悲しい恋  
の物語が暗示されていることは確かである。

幾夜さ 幾夜。「さ」は接尾語。

果して 作者の予感があつたことを示す。つまり、「(エリーザベト  
の物語に關した) 夢を見るだろうと思つたが、やっぱり」という  
意味。

その夜習つたエリーザベトの物語 、「エリーザベトの物語」は、ドイ  
ツの詩人・小説家シユトルムの小説「みずうみ」のこと。幼なじ  
みの少女エリーザベトと少年ラインハルトが、愛し合いながらも  
永遠に別れていくという、純粹で、はかなくも美しい短編である。  
「習つた」は、一応、その夜「少女から教わつた」と解釈するが、  
その少女との出会いを「みずうみ」の内容になぞらえているとも  
取れる。いずれにしても、「かたみ」(1行め)「かなしい追憶のよ  
うに」(3行め)といったことばや、この「エリーザベトの物語」  
には、作者の恋が実を結ばなかつたことが暗示されており、この  
詩がはかなく終つた恋を回想してうたわれたものであることが  
わかるであらう。

立原道造の使用することばは、繊細な彼の好みに従つて一つ一つ選ばれ  
みがかれたものであつて、音楽的な美しい響きをもっています。それを十分味  
わつてください。

(1) 「——人の心を知<sup>し</sup>ることは……人の心とは……」(9行め)の……  
の部分には、どんなことばが省略されていると思ひますか。それぞ  
れ次の「」に十五字以内で補いなさい。

① 人の心を知<sup>し</sup>ることは

② 人の心とは

- (2) 「いかな日にみねに灰の煙の立ち初めたか」(12行め)の「灰の煙」は、この詩の中で何かを象徴的に表していると考えられます。それは何でしょうか。十字以内で答えなさい。

この一行は、藤原定家の「拾遺愚草」の百首歌の恋の部の「けふぞ思ふいかなる月日富士のねの峰に煙の立ち始めけむ」によつた表現であるといわれています。これをヒントにして考えましょう。

- (3) この詩の形式と構成について、次の「」に適切なことばを書き入れなさい。(Aはかたかなで、Bは漢字で書きなさい。)

この詩は、四・四・三・三行という四連十四行から成り立つA「

」形式で書かれており、B「」の構成になっている。

この詩は口語自由詩ですが、西洋の定型詩になつたある形式で書かれていますね。Bは、漢詩などでもよく使用される構成を思い出しましょう。

- (4) 「はじめてものに」といふかなりばく然とした表題には、いくつかの内容が含まれていると思われまふ。次の中から、表題の内容に

含めることができるものを三つ選び、「」に記号で答えなさい。

- (ア) はじめてのひとに (イ) はじめて出会つた地異に  
 (ウ) はじめての恋に (エ) はじめての冒険に  
 (オ) はじめて感じた希望に

この詩の主題も考えながら答えましょう。  
 答え合わせをして、解説をしつかり読んでください。

◆作者・作品紹介／立原道造(一九一四年～一九三九年) 詩人

一九一四(大正三)年、東京に生まれる。東大工学部建築学科卒業。在学中から作品を発表していた。建築事務所勤務したが、病を得て退職。一九三九(昭和三年)、若くして死んだために詩の数は少ないが、その純粹で音楽的な美しい詩風は高く評価されている。きょう読んだ詩は、大学卒業を記念して自費出版された処女詩集「萱草に寄す」に収められており、その冒頭に「Sonatine No.1」として一括された五編の詩の最初に位置する。この詩でうたわれた別離の予感、この後運命的に肯定されていき、そして別離の昼の放心がうたわれ、最後にあの有名な「のちのおもいに」という一編がきて締めくくられるのである。文庫版の「立原道造詩集」でも買つて、ぜひ読んでみてほしいものである。

〈参考〉詩は楽しく読もう

きょうは詩についていろいろなことを学習しましたね。でも、あまり難しく考える必要はけつしてありません。

詩は、けつしてしかめつ面をして読むものではなく、本来楽しんで読むべきものです。

いろいろな詩人の作品を読んでみましょう。いわゆる「よい詩」といわれるものの中に、よくわからない部分があつても、あまり気にするこ

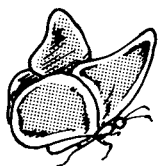
とはありません。詩は理屈で説明するものではなく、心で味わうものなのですから……。

つまり、そのときのあなたの心とびったりふれ合う詩があれば、それがあなたにとっての「よい詩」といえるのではないでしようか。

最後に、散文詩の例を一つあげておきましょう。名古屋学院大で出題されたもので、井上靖の「詩集北国」の中の「海辺」の全文です。

一読して、散文詩とはどんなものであるかを理解しておきましょう。

土地の中学生の一団と、これは避暑に来ているらしい都会の学生の一団とがすれ違った。海辺は大方の涼み客も引揚げ、暗い海面からの波の音が急に高く耳についてくるころであった。すれ違った、とただそれだけの理由で、彼らは忽ち入り乱れて決闘を開始した。驚くべきこの敵意の繊細さ。浜明りの淡い照明の中でバンドが円を描き、帽子がとび、小石が降った。三つの影が倒れたが、また起き上った。そして星屑のような何かひどく贅沢なものを一面に撒きちらし、一群の狼藉者どもは乱れた体型のまま、松林の方へ駆けぬけて行った。すべては三分とはかからなかった。青春無頼の演じた無意味にして無益なる闘争の眩しさ。やがて海辺はまたもとの静けさにかえった。私は次第に深まりゆく悲哀の念に打たれながら、その夜ほど遠い青春への嫉妬を烈しく感じたことはなかった。



## 語句の意味をつかむ

きょうから、論理的文章の内容を把握はあくする学習に入りましょう。

今年年の論理的文章の学習では、次のようなポイントを、順を追って繰り返してトレーニングしていきます。

- 語句の意味をつかむ。
- 指示する語句の内容をつかむ。
- 文や語句の接続関係をつかむ。
- 係り受けをつかむ。
- 語句の対応・対立関係をつかむ。
- 語句や文の内容をつかむ。
- 比喩ひよ内容をつかむ。
- 理由・根拠をつかむ。
- 具体的な内容をつかむ。
- 段落の要点をつかむ。
- 段落相互の関係をつかむ。
- 要旨をつかむ。
- 要旨にかかわる内容吟味。

つまり、小さな部分の理解から文章全体の内容把握へ、という方向で学習を進めていくわけです。

第一回めのきょうは、語句の意味をつかむトレーニングをしましょう。

▽ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

〔徳山大学〕

### ● 例題 ●

解答は説明のあとにあります

われはわが舌をもって味わうというのは当然であるとしても、何ゆえといふことは度外して、ただ [A] に独断的に、これはうまい、これはまずいと、強情に言い張るといっただけでは、学問や文芸評論は成り立たない。わが趣味はどこまでも正直に尊重しつつ、その判断に [B] な根拠または説明がなければならぬはずである。漱石そうせきにおいて多たとすべきは、裸の王様を裸であるというにはばからぬ他面、その「自己本位」がただ [C] なる独断に墮おすることなく、その結論が広範丹念なる読書と精細極まる考察の上にくだされていることである。

〔小泉信三「読書論」より〕

### ● 語句注

度外する 〓 考えの外に置く。問題にしない。

独断 〓 ひとり決め。

漱石 〓 夏目漱石。

裸の王様を裸であるという 〓 他人の意見や権威にとらわれず、自分の思ったとおりのことを言う。（童話「裸の王様」の内容を踏まえた表現。）

「自己本位」 〓 漱石の「私の個人主義」という講演の中に出てくることば。本を読んでその内容を判断するときに、他人（西洋人）の評価をうのみにせず、自分の感想や意見をあくまでも尊重するとい

う態度を指す。

(1) A ～ C には、(ア)主観的、(イ)客観的、のいずれかが入りま  
す。それぞれにどちらを入れるべきか、記号で答えなさい。

A ( ) B ( ) C ( )

(2) 本文中に「多とすべき」とありますが、この場合、「多とする」  
という語句はどのような意味で用いられていますか。次の中から  
最も適切なものを選びなさい。

- (ア) 多数である。
- (イ) 賞賛する。
- (ウ) 感謝する。

説明

ある語句の表す意味は一つだけとは限りません。場合によつて多くの異なる意味を表す語句がたくさんあります。たとえば、

- ① バットで石を打ったら、手がしびれた。
- ② 泣いてごまかすのは、彼のいつもの手だ。
- ③ 彼らとは、早く手を切ったほうがよい。

という各文で——線を引いた「手」は、それぞれ異なる意味を表しています。①では「身体の部分」を、②では「手段」を、③では「関係」を表しています。

ただ「手」とだけ言われたのでは、何を意味するのかわかりませんが、文中で他の語句とともに使われると、意味がはっきりわかります。つ

まり、前後の文脈が語句の意味をはっきりさせるのです。ですから、ある語句の意味を正しくつかむためには、前後の文脈をしっかりと押さえる必要があります。

また、前後の文脈をしつかり押さえれば、知らない語句が出てきたときに、その意味をある程度推量することができます。さらに、文中に空白があるような場合でも、そこにどんな意味の語句を補うべきか判断することができます。

さて、例題を考えてみましょう。

(1)のAは、「独断的」という語句と重ねて用いられており、Cも「独断」という語句を修飾していますから、この二か所には(ア)の「主観的」が適切です。一方、Bは、「独断的な態度では学問芸術が成り立たず」↓「判断にBな根拠または説明がなければならぬ」という文脈で用いられていますから、ここには「独断的」と正反対の、(イ)「客観的」を入れるべきです。

(2)の「多とする」は、何かの重要性を認めて高く評価するときの表現で、「賞賛する」または「感謝する」という意味で用いられます。ここでは、学問や文芸評論の理想的態度を漱石が守っていることを認めて、「多とすべき」といつているのですから、適切な意味は、(イ)の「賞賛する」です。

解答

- (1) A・(ア) B・(イ) C・(ウ) (2) (イ)

前後の文脈から語句の適切な意味を判断するというのは、私たちがふだん



からしばしば行っていることです。人と会話をするとき、単語の意味を辞書で調べるとき、読書中に難しいことばが出てきたときなど……。きょうは、それを意識的にトレーニングするわけです。  
では、さっそくトレーニングを始めてください。

## トレーニング

解答は巻末にあります

### 1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〔昭和女子大〕

縁という言葉は味のある言葉である。「これを「縁に」などとあいさつをするときは、チャンスとか機会とかいう以上の、人間的なあたたかい感じがする。そうして運命と自然に対してやさしかった東洋の、あるいは仏教徒の心が、その裏に流れているようにも思う。西洋の言葉には訳せない言葉かもしれない。日本の住まいがもっていた「縁」という不思議な空間も、この言葉によく似ている。

日本の住まいが「竪穴式」のものから「高床式」になり、やがて「畳」が現れると間もなく、日本人は縁を発達させた。今日でいうぬれ縁の形式である。それは自然と人間との交感の場所であり、それ以上に人と人とのつき合いの場、①縁の生まれる場所だった。縁側に腰かけての友との語らい。夏の午後のおうたの寝、日が足にあたって火事の夢。ぼんやりと庭の猫を見ている。柱にもたれて見たさえわたる秋の月。だれにも思い出があるだろう。ひとりで泣いたことも。

石積み、小さな窓、閉鎖的な空間で生活してきた西欧の人たちが、広場での集まり、パーティー、はなやかな社交会をつくらなければ社会生活が成り立たなかったのとはうらはらに、日本人は、部屋の

まわりに縁をもった周辺をぼかしたような生活空間で、社会の成立に必要な自然と人間との交感、人と人とのつき合い、集団生活のストレスの解消などを、**A**こなしてきた。

日本人の論理・感情はあいまいだとよく言われる。しかし、このあいまいな部分が**B**働きをして、世界有数の高密度の生活文化を生みだしてきたように思われる。そのあいまいさの心理と生理と感情とが、空間のデザインに定着したのが縁の空間だ。同時に②縁の生活のマナーを次代に伝える場でもあった。

すぐれた生活空間は個人の権利やプライバシーを守るだけでなく、他人への思いやり、社会への思いやりを育てるような空間だ。縁は、日本建築に特有のたたずまいを与えると同時に、こうした心を育ててきた。いまの都市生活のやりきれなさの一つは、こうした③縁の空間が、個人の住まいからも、公共の施設からも失われてしまったことだ。④縁の、新しい形での復活が望まれる。

#### ● 語句注

竪穴式 古代人の住居の形式。地面に穴を掘り、その上に草などで屋根をふいたもの。

高床式 床を地上より高くした住居の形式。弥生時代から造られるようになった。

交感 互いに感じ合うこと。  
たたずまい 物や景色のありさま。

(1) **A**・**B**を埋めるのに最も適切な語句を、各組から選びなさい。

- A (ア) 明白に (イ) すばやく (ウ) さりげなく

- (ア) すっきり  
 (イ) 抽象的  
 (イ) 潤滑剂的  
 (ウ) 空間的  
 (エ) 進歩的

(2) 本文では、「縁」という語が二とおりに使われています。「これを「縁に」の「縁」をAとし、「日本の住まいがもっていた縁」の「縁」をBとするなら、——線①④の「縁」は、それぞれどちらに属しますか。次の「」に、AまたはBの記号で答えなさい。

- ① 「」 ② 「」 ③ 「」 ④ 「」

Aはへ人と人との触れ合い、巡り合わせという意味での「縁」、Bは住居の一部分としての「縁」ですね。①④の「縁」がそれぞれどちらにあたるか、前後の文脈から判断しましょう。  
 では、ここで一度答えを合わせて、次のトレーニングに進んでください。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。  
 [関西大学]

十九世紀の偉大な細菌学者ルイ・パスツールが、フランスで広まったカイコの伝染病について、その研究を頼まれたことがあった。パスツールはこのとき四十三歳だったが、生まれてこの方、カイコという虫を見たことがなかった。初めてマユを見せられたとき、物珍しげに振って、言ったそうだ。「おや、音がする。中に何かはいつているんですか」

このとき、この研究を頼んだ恩師デュマは「それは、なおさら結構。着想にかけて、君は、君自身の観察結果からくるもの以外に、何も持たないことになるわけだ」と、その無知をかえって喜んだそうだ。

この逸話を長野敬著「生物学の旗手たち」で読んだが、物を知らないことの利点を説明して、印象に残る話だった。無知で物に接したときは、先入観のさまたげがない。[A]にインクを落としたときのように、印象が鮮明であり、新鮮である。

反対に、専門家は素人のようにたやすく驚いたり、目を輝かせたりはしない。[B]。専門家であるために、しらすしらすのうちに利害に巻き込まれていく。それに気づかずにいるために、あるいは、それに抵抗するために、客観性を失うこともある。

簡単にいえば、無知には、[A]であるためにおのずと客観性があるのに、知っている者は自分の客観性を保つ努力をしなければならぬ、ということであろうか。

● 語句注

パスツール＝フランスの化学者、細菌学者（一八二二年～一八九五年）。生物はしぜんに発生するのではなく、必ず親から生まれるものであることを、初めて科学的に実証し、細菌学の基礎を築いた。  
 長野敬＝生物学者（一九二九年～）。

(1) [A]は二か所ありますが、ここには同じ語が入ります。次の中のどれを入れるのが最も適切ですか。

- (ア) じゅうたん (イ) 吸取紙 (ウ) セロファン (エ) 白紙  
 (オ) ノート

(2) 11行めで——線を引いた「旗手」は、この場合どんな意味で用いられていますか。次の中から最も適切なものを選びなさい。

- (ア) 旗を持つ役目の人 (イ) 責任を担う人  
(ウ) 代表的な先駆者

——「生物学の——」とあること、前半に紹介された本の内容から、どんな意味であるかわかりますね。

☆☆次の問題もやってみよう！☆☆

(3) [B]を埋めるのに最も適切な文を次の中から選びなさい。

- (ア) 知らないというにはプライドが許さない  
(イ) 無知でも無知でなくとも先入観は常にある  
(ウ) 自分は知っているという偏見にわずらわされる  
(エ) 無知からくる劣等感に気づかないのだ

——これも、考え方は語句の場合と同じです。前後の文脈を押さえて、ここにも適切な意味を表す文を選びましょう。  
では、また答えを合わせて、次のトレーニングに進んでください。

3 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。〔同志社大〕

「道」というものはきわめて[A]である。それは「あづま路」という地理的なものからはじまって、人間の踏み行かねばならない「道

理」「分別」、また「秩序」、さらに「方法」を意味している。そして「芸道」「武道」のような技法的かつ[B]なものにも使われるが、それはこれらが簡単に悟得されるものではなく、常に長途の、あるいは曲折に富む、困難な過程を含んでいる故にである。すなわち、世を経る遙かな旅路とそのきびしい風雪とに比較されるからであろう。「……おのおの十余ヶ国のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たずね来たらしめたまふおんころざし、ひとへに往生極楽の道を通問ひ聞かんがためなり」(傍点筆者)と「歎異抄」のはじめにある通り、人は道のために道を歩むのである。東洋でも西欧でも、遍路と呼ばれ、巡礼と呼ばれる信仰の道行があった。多くの場合、人々はあたかもあらがい難くそれに呼ばれるかのように、何か[C]なうながしに駆られて、すべてを捨てて長途の苦難の歩みを重ねたのであった。

#### 〈中略〉

「道」はあたかも何ものかへのノスタルジイを、あるいは「遠さ」への希求をみたくするために存在するかのようである。[D]な意味であれ、人と人との間の意味であれ、「距離」がなければ、「道」は成立しない。道はどちらにせよ歩むべく呼びかけてくる。

#### ● 語句注

あづま路 京都から東国に通じる道。

悟得 原意は「悟りをひらくこと」、ここでは「完全に修得すること」の意。

世を経る 長年月にわたる。

おのおの 問ひ聞かんがためなり 皆さまがたが、関東からはるばる十数か国を越えて、命がけてこの京までたずねて来られたのは、ただただ極楽へ往生する道を私(親鸞)に問いただそうというお気持ちがあつてのことでしょう。

歎異抄 親鸞上人(一一七三年～一二六二年)の死後、上人の教えと

は異なつた説が信者の間に流布されているのを嘆いた弟子の唯円が、生前の上人のことばを集め、正しい説を示した書物。

遍路 祈願のため、弘法大師ゆかりの四国八十八か所の霊場を巡ること。また、その人。

巡礼 聖地、霊場を巡ること。また、その人。

あらがい 難く 抵抗し難く、逆らうことができません。

ノスタルジイ 遠い故郷を懐かしむ気持ち。

フェルネ ドイツ語で「遠方、遠距離」という意味。

希求 強く願ひ求めること。

(1) A 〱 D のそれぞれを埋めるのに最も適切なものを次の中から選び、「〱」に記号で答えなさい。

- (ア) 地理的 (イ) 社会的 (ウ) 多義的 (エ) 教義的  
(オ) 運命的 (カ) 印象的

A 〱 B 〱 C 〱 D 〱

選択肢(ウ)の「多義的」とは、(多くの意味をもつ)という意味、(エ)の「教義的」とは、(宗教のように)ある一定の考え方を教える(という)意味です。

(2) 地理的な意味で「道」という字を使った熟語、技法的・精神的な意味で「道」という字を使った熟語を、それぞれ二つずつ書きなさい。(本文中に使われていない熟語を書くこと。)

地理的 〱 〱 〱 〱

技法的・精神的 〱 〱 〱 〱

―― 答えを合わせたら、トレーニング 4 を始めましょう。今度のテキストは、神話に描かれたできごとを、物理学者の寺田寅彦が地球物理学的に解釈して述べた文章です。「〱」内の引用文は、いずれも「古事記」から引かれたものです。その現代語訳は、語句注のあとにまとめて示します。

4 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。 (青山学院大)

我われのように地球物理学関係の研究に従事している者が国々に神話などを読む場合に一番気をつくことは、それらの説話の中にその国々にの気候風土の特徴が濃厚に印銘されており、浸潤していることである。

〈中略〉

速須佐之男命に関する記事の中には火山現象を如実に連想させるものがはなはだ多い。たとえば、イ「その泣きたまふさまは、青山を枯山なす泣き枯らし、河海はことごとくに泣き乾しき」というのは、何より適切に噴火のために草木が枯死し河海が降灰のために埋められることを連想させる。噴火を地神の慟哭とみるのは適切な比喻であると言わなければなるまい。〈中略〉ロ「その服屋の頂を穿ちて、天の斑駒を逆はぎにはぎて落し入るる時に」というのも、火口から噴出された石塊が屋を穿って人を殺したということを暗示する。ハ「すなはち高天原皆暗く、葦原中国ことごとくに闇し」というのも、噴煙降灰による天地晦冥のさまを思わせる。ニ「ここによろずの神の声は、さ蠅なす皆わき」は A のものすごい心持ちの形容にふ

さわしい。これらの記事を日食にくらべる説もあるようであるが、日食のごとき短時間の暗黒状態としては、ここに引用した以外のいろいろな記事が調和しない。神がみが鏡や珠を作ったりしてあらゆる方策を講じるというてん末を叙した記事は、ともかくも、相当な長い時間の経過を暗示するからである。

記紀にはないが、天手力男命が、引きあげた岩戸を取って投げたのが、虚空はるかにけし飛んでそれが現在の戸隠山になったという話も、やはり[B]という現象を夢にも知らない人の国にはとうてい成立しにくい説話である。

●語句注

浸潤||染み込むこと。

速須佐之男命||迅速に荒れすさぶ男神の意。暴風の神。

如実に||ありのままに。事実どおりに。ありありと。

慟哭||激しく泣き叫ぶこと。号泣。

てん末||ものごとの始めから終わりまでの事情。いきさつ。

記紀||古事記と日本書紀。

天手力男命||力の神。

岩戸||天照らす大御神が隠れた(天の岩屋戸)の口をふさいでいた岩

を指す。日の女神天照らす大御神は、弟の速須佐之男命の乱暴な

行動に立腹して、天界の岩穴(天の岩屋戸)に隠れた。そのため

世界が暗黒となり、困ったほかの神々は、計略を用いて天照らす

大御神を(天の岩屋戸)から引き出した。

戸隠山||長野県の北部にある山(一九一一メートル)。

引用文の訳

イ「お泣きになるありさまは、青々と木の茂った山も枯山にし、海や川もすつかり泣き乾すというものであった。」

ロ「はたおり場の屋根に穴をあけ、まだらの毛の馬の皮をはいで投げ落すとすときに」

ハ「それで、天界(高天原)は真っ暗になり、下の世界(葦原中国||日本)もことごとく暗くなつてしまつた。」

ニ「そこで、多くの神々の騒ぐ声が、夏のハエのようにわき上がり」

(1) [A]・[B]のそれぞれを埋めるのに最も適切なものを次の中から選び、「」に記号で答えなさい。

- (ア) 皆既日食 (イ) 火山爆発 (ウ) 火山鳴動 (エ) 新月の夜

A「」 B「」

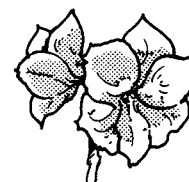
(2) ——線部の「くらべる」の意味として最も適切なものを次の中から選びなさい。

- (ア) 比較 (イ) 比擬 (ウ) 比肩 (エ) 比重 (オ) 比例

本文中での「くらべる」がどんな文脈の中で用いられているか、(ア)～(オ)のそれぞれがどんな場合に用いられるか、考え合わせて答えましょう。

(3) 3行めの「印銘」、14行めの「晦冥」は、どちらも小さな辞書には出ていない熟語です。前後の文脈からそれぞれの意味を推量して簡潔に記しなさい。

前後の文脈、漢字の意味などを総合して判断しましょう。  
きょうの読解トレーニングはこれで終わりです。



次のページの「漢字・語句のトレーニング」を忘れずにやっておきましょう。

1 次の——線の漢字の読みを示しなさい。(□にチェックしなさい。)

- (1) この件は、先例に倣<sup>なま</sup>って処理する。
- (2) 自惚<sup>おぼ</sup>が過ぎると、思わぬ失敗をするぞ。
- (3) 彼はフランスに生まれ、のちにアメリカに帰化<sup>きか</sup>した。
- (4) あんな醜<sup>みにく</sup>男<sup>おとこ</sup>が、なぜもてるのだろうか。
- (5) 醜<sup>みにく</sup>女<sup>め</sup>を主人公とする民話が残<sup>のこ</sup>っている。
- (6) 先生は、まったく世情<sup>よじょう</sup>にうとい。
- (7) もっと栄養<sup>えいよう</sup>を摂<sup>と</sup>らないと、病気になるぞ。
- (8) あの方は篤<sup>あつ</sup>実<sup>じつ</sup>な人でした。
- (9) 彼は、復讐<sup>ふくせい</sup>の鬼<sup>おに</sup>と化した。
- (10) 光秀<sup>みつひで</sup>は、ついに謀反<sup>ぼうはん</sup>を決意<sup>けつぎ</sup>した。

2 次の——線のことばを漢字で示しなさい。(□にチェックしなさい。)

- (1) そのことばは、彼の人生観<sup>じんせいかん</sup>をたんに示している。
- (2) 想像力<sup>さうざうりき</sup>のこかつした芸術家<sup>げいぎゆつか</sup>はみじめである。
- (3) 彼を天才<sup>てんさい</sup>と呼んでも、けっしてかごんではない。
- (4) 限りある地下資源<sup>ちかづげん</sup>をろうひしてはならない。
- (5) 彼らは三時間<sup>さんじかん</sup>かみんしただけで、また深夜<sup>しんや</sup>の作業場<sup>さぎやば</sup>に戻<sup>かへ</sup>った。
- (6) この商品<sup>しょうひん</sup>には重大<sup>じゅうじやう</sup>なけっかんがある。
- (7) われわれの努力<sup>どりょく</sup>は、ついにとうとうに終わった。
- (8) これらの作家<sup>さか</sup>はみな、ドストエフスキーのありゆうだ。
- (9) 芸術<sup>げいぎゆ</sup>とスポーツには、いちみやく通<sup>と</sup>ずるところがある。
- (10) やじられた講師<sup>こうし</sup>は、えんだんで立往生<sup>たてわいせい</sup>してしまった。
- (11) 姉<sup>あね</sup>は、隣<sup>となり</sup>り村<sup>むら</sup>の農家<sup>のうか</sup>にとついだ。
- (12) 板<sup>いた</sup>の表面<sup>ひょうめん</sup>をなめらかに削<sup>け</sup>る。
- (13) かんぶを氷<sup>こおり</sup>で冷<sup>ひや</sup>やしたら、痛み<sup>いたみ</sup>が軽<sup>かろ</sup>くなった。
- (14) あの画家<sup>えいがか</sup>は、深く仏法<sup>ぶつぽう</sup>にきえしている。
- (15) 材料<sup>ざいりょう</sup>をぎんみして、すばらしいごちそうを作る。
- (16) 彼は、東京<sup>とうきやう</sup>のこうがいに住<sup>す</sup>んでいる。

3 手紙の用語について、次の各説明にあてはまるものを後から選び、

それぞれの「」に書き入れなさい。

- (17) 君の説明は、しりめつれつだ。
- (18) 金銭<sup>きんせん</sup>のじゆじゆは、注意<sup>ちうい</sup>深く行<sup>おこな</sup>うこと。
- (19) 今度の作品<sup>さくひん</sup>はかなりのできばえだと、じふしています。
- (20) 探検隊<sup>たんけんたい</sup>のしようそくは、依然<sup>いぜん</sup>として不明<sup>ふめい</sup>です。
- (21) 医<sup>い</sup>はじんじゆつなり。
- (22) 選手代表<sup>せんしゆだいひょう</sup>がメインスタンドの前<sup>まへ</sup>でせんせいを行う。
- (23) 彼は、歴史<sup>れきし</sup>に偉大<sup>ゐだい</sup>なそくせきを残<sup>のこ</sup>した。
- (24) 先頭<sup>せんとう</sup>を走<sup>は</sup>っていた選手<sup>せんしゆ</sup>が、惜<sup>おぼ</sup>しくもてんとうした。
- (25) その制度<sup>せいど</sup>は、昨年<sup>さくねん</sup>はいしされました。

- (1) 略式<sup>りやくしき</sup>または急ぎの手紙<sup>てがみ</sup>で、文面<sup>ぶんめん</sup>の末尾<sup>まへび</sup>に添<sup>そ</sup>える語<sup>ご</sup>。
- (2) 団体<sup>だんたい</sup>などに対しての手紙<sup>てがみ</sup>で、あて名<sup>な</sup>の下<sup>した</sup>に添<sup>そ</sup>える語<sup>ご</sup>。
- (3) あらたまつて書いた手紙<sup>てがみ</sup>で、文面<sup>ぶんめん</sup>の末尾<sup>まへび</sup>に添<sup>そ</sup>える語<sup>ご</sup>。
- (4) 封筒<sup>ふうじゆう</sup>に記<sup>し</sup>して、名<sup>な</sup>あて人<sup>ひと</sup>自身の開封<sup>かいふう</sup>を求<sup>もと</sup>める語<sup>ご</sup>。

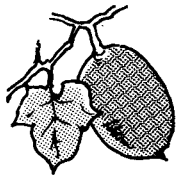
追伸 <sup>おしん</sup>	侍史 <sup>じし</sup>	御中 <sup>おんちゆう</sup>	謹言 <sup>きんげん</sup>	拝復 <sup>はいふく</sup>	啓上 <sup>けいじやう</sup>	親展 <sup>しんてん</sup>	拝啓 <sup>はいけい</sup>
不一 <sup>ふいち</sup>	冠省 <sup>かんしやう</sup>						

## 指示する語句の内容をつかむ

きょうは、指示する語句の指している内容をつかむ学習をします。

指示する語句には、「これ・そこ・あの・どれ」などのコソアドことばをはじめ、「彼・彼女」などの人を指し示すことば、「前者・後者」など文脈上の前後関係を示すことばなどがあります。

指示する語句は、それだけでははっきりした意味を表しませんので、常に「何を指しているのだろう」と具体的な内容を考えて読むことが必要です。



## ●例題●

解答は説明のあとにあります

▽ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〔中央大〕

パスカルが、かの『パンセ』のなかで人間の不幸と人間の偉大との相即の関係を主張していることが思い出される。——人間が自分を不幸であると知ることが不幸なことである。だが彼が不幸だと知ることが、とりもなおさず彼が偉大になることである。人間の偉大なのは、自分を不幸なものと知っている点で偉大なのである。——パスカルは、このように述べている。そして、——樹木は自分を不幸だとは知らない。廃屋は不幸となることがない。不幸なのはただ人間だけである。——とうそぶく。〈中略〉

考えてみると、人間は不幸であった。省察せいさつがあつたがゆえに、幸福のヴェールが剥はぎとられて、われわれの前にわれらの不幸が暴露せられた。では省察なき人生こそ、かえって望ましいと考えられないであろうか。かのキェルケゴールは、意識の深度はいわば絶望べきの指数であつて、意識が増せば増すだけ、それだけ絶望の度はつよくなる、とも説いているが、では、人はむしろ、あまりに意識を深めないことが賢明であると考えることができないであろうか。わたしどもは、世の幸福を論ずる人々の説くところが、しばしば、A かような考え方のうえにおかれた幸福の道であることを知ってい





3 想定した内容を指示する語句にあてはめてみる。

内容をとらえたら、指示する語句の部分にあてはめてみて、すんなり文章が続くかどうか確かめます。しぜんに続いていけばよいのです。

《解答》

(1) 人は、あまりに意識を深めないことこそが賢明である(二十四字)

では、トレーニングを始めましょう。

トレーニング

解答は巻末にあります

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(大阪府立看護短大)

わたしたちは、ことさらに意識したり検討を加えたりはしないが、古代人の感覚がさほど現代の感覚とちがっていないのを、暗黙にみとめている。たとえば、赤い山肌やまはだの土を見て、これを赤い色の土とみとめるとすれば、古代人もまた赤い色の土とみたであろうことを、なぜか知らず知らずのうちに確信している。この場合、わたしたちの感覚が、ほとんど決定的に身体感覚に依存していることを疑ってはいないからである。けれど、いったん、赤い色の土を色覚の問題から解放して、意味付与の体系、あるいは文化の体系に移してみれば、難しい問題があらわれる。赤い色の土を採取してきて祭礼に

用いた古代人にとっては、赤い色は「聖」なる色である。Aそれは血の色であり、熱をもっていて、生命がはげしく煮えたる色であり、あるいは希望をあらわす色であり、もしかすると、Bそれなしには生を保つことができない火の色である。赤色の土をもって器物をこしらえて祭礼さいしよ用に供した古代人にとって、たんなる色覚の問題は、深い意味体系のなかに組み入れられて、べつの文化的な価値が与えられる。しかし、現在わたしたちは、赤い色の土、あるいはそういう山肌を眼めのまえにみても、Cそれを無用のもの、ありふれた山肌の土の色と以上に見たてずに通りすぎるだけであろう。そして、色彩心理学が、しいて赤い色に意味を与えようとするれば、古代人と同じような概念を赤い色に与えることができるだけだ。

● 語句注

感官||感覚器官(視覚器官・聴覚器官など)。また、そのはたらき。

意味付与|| (本来は何の意味もない)ものごとに、特定の意味を結び

つけること。赤い色を「聖」なる色としたり、「希望」と結びつけるのは、意味付与の一例である。人間の文化は、意味付与の活動のうえに成り立っている。

祭礼||祭り。

色彩心理学||色彩と人間の心理との関係を研究する科学。

(1) 線A・B・Cの「それ」は、それぞれ何を指していますか。本文中の語句を書き抜いて答えなさい。

A ( ) ( ) B ( ) ( )

C ( ) ( )

指示する語句は、いつも前に述べられたことがらを指すとは限りません。  
A・B・Cのうち一つは、あとに出てくる語句を指していますね。

☆☆次の問題もやってみよう！☆☆

(2) 「色彩心理学が、しいて赤い色に意味を与えようとすれば、古代人と同じような概念を赤い色に与えることができるだけだ。」とありますが、古代人は赤い色にどんな概念を与えたのですか。本文中でそれを具体的に述べている部分(百字以内)に——線を引きなさい。

ここで一度答えを合わせてから先へ進みましょう。

## 2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〔大妻女子大〕

「零は数である。」といったところで現在ではこと新しく人の耳には響かないかも知れない。しかし一般の人がこの言葉の意味を真に会得しているか否かは、実は、少々疑問なのではないかと思われる節があるのである。現に戦争前のことであるが、某校の入学試験に際して、受験生全部を三つの組に分ける必要が生じたことがあった。このとき、数学の先生は、受験番号を、

(I) 3で割り切れるもの、

(II) 3で割ると1が残るもの、

(III) 3で割ると2が残るもの、

という風に組分けすることを提案した。すると常識的でないという一般的非難と同時に、Aこれでは番号が1や2の者はいずれの組にもはまらないことにならないか、という批判的(?)質問が出て、大いに驚いたという話である。1を3で割れば、商は0で残りは1

である。だから番号1の者は当然(II)の組にはいるわけなのであるが、これは、すでに学校教育をおえてしまった他の先生たちから見れば、すこぶる形式的な不自然な考えかたのように思われるらしい。Bそう思うことも「常識」から見てCそう無理ともいえないかも知れないが、ただしかし、いったん0を数と考えてこれにブラーマグプタの述べたような加減乗に関する性質を与える以上、いまのような数学者流の考えかたに導かれるのは必然なのであって、Dそうしなければ、かえって、わざわざ数学に0を導入した意義が失われてしまうおそれさえあるのである。

### ●語句注

某校——ある学校。

ブラーマグプタ——古代インドの数学者。

(1) ——線Aの「これ」は、本文中のどの部分を指していますか。初めと終わりの三文字ずつを書き抜いて答えなさい。(句読点は含まない。)

初め「 」 終わり「 」

(2) ——線B・C・Dの「そう」のうち、本文中のことがらを指し示していないものを一つ選び、記号で答えなさい。

「 」

それぞれの「そう」が何を指し示しているか、一つ一つ考えてみましょう。







1 次の一線の漢字の読みを示しなさい。(□にチェックしなさい。)

- (1) 市井の庶民を好んで描いた作家だ。
- (2) 河口に土砂が堆積する。
- (3) 彼は、立板に水の勢いでしゃべりだした。
- (4) この洒落がわからないとは、よほどやばな人間だ。
- (5) 読書に倦むと、彼は散歩に出かけた。
- (6) うちの倅は、ちっとも勉強しない。
- (7) 女王は猜疑心の塊となった。
- (8) 上司の命令に唯唯諾諾と従うだけでは、よい社員とはいえない。
- (9) 彼女は、傷心を癒やすために旅に出た。
- (10) こういった類の問題は、よく入試に出ます。

2 次の一線のことばを漢字で示しなさい。(□にチェックしなさい。)

- (1) 日が暮れて、人や物のりんかくがぼやけてきた。
- (2) 初めて出会うことがらを、きちのことがらに結び付けて理解する。
- (3) あなたのぎゆうの書は何ですか。
- (4) 子どもたちはむじゃきに遊んでいる。
- (5) 現代の高校生が無気力だと、いちがいにいうことはできない。
- (6) その質問は、問題のかくしんを突いていた。
- (7) あの男には、自尊心がけつじよしている。
- (8) 彼らは、前世紀のいぶつと呼ばれるのにふさわしい。
- (9) 全社員がいちがんとなって、会社再興に努めた。
- (10) がいしようはないが、一応レントゲンで調べてみよう。
- (11) ラジオから、かんびなメロディーが流れていた。
- (12) それは、実にきばつなアイデアだ。
- (13) 一週間ほどきゆうかをとって、旅行をしたい。
- (14) われわれの申し出はきよぜつされた。
- (15) 投げた石は、こを描いて水面に落ちた。
- (16) この一文をけずったほうが、文章が引き締まる。

(17) 彼は、じかいのことばを書いた紙を机の前にはっている。

(18) この仕事は、思ったよりもまがかかる。

(19) あのおじようさんは、女子大生です。

(20) 生徒にたいばつを加えることは禁じられている。

(21) 戦争のひさんさを若い人々に語り伝える。

(22) ふつとうした湯を注いでかき回せば、スープができあがる。

(23) その件について、彼はもくして語らなかった。

(24) 事実をわいきよくして報道してはならない。

(25) 船員たちがかんばんで作業している。

3 動詞「する」は、その用法によって八種類に分類できますが、次の

(1)(2)はそのうちの二つです。後の文群(ア)から、(1)および(2)に相当する文を選び、それぞれの「」に記号で答えなさい。(該当する文は、「」の数だけあります。)

(1) 「AハCヲする」——これは最も一般的な用法で、用例も多い。「する」対象(C)には名詞がくるが、その名詞の意味範囲・意味内容に応じて「する」の意味も行為を表したり、状態を表したりする。

例 かわいい顔をした赤ちゃん。

サラリーマンをやめて農業をする。

(2) 「BニCヲする」——ある行為・活動を行うとき、相手Bに対してなされる場合である。Bには人、物、ことがらなどがたつ。

例 私は彼女に電話をする。

豚肉に塩こしょうをします。

(ア) いやな噂を耳にした。

(イ) 鋭い眼をした鷹。

(ウ) たこをさかなにして酒を飲む。

(エ) 大事なときにくしゃみをして困った。

(オ) 患者に注射をする。

## 文や語句の接続関係をつかむ

きょうは、文や語句の接続の関係をつかむトレーニングをします。具体的にいえば、ある文と文、語句と語句とが、「しかし」の関係でつながっているのか、「そして」の関係でつながっているのか、などを判断するトレーニングです。この「しかし」や「そして」などを、「接続する語句」と呼びます。

適切な「接続する語句」を選ぶ学習は、あなたが筆者の論理の方向を正しくつかんでいるかどうかをチェックするのに役立ちます。しっかりとトレーニングしましょう。



## ●例題●

解答は説明のあとにあります

▽ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。〔相愛女子短大〕

ながく鎖国状態にあった日本が西洋に向かって開かれてからすでに一世紀である。その間に西洋に受容された日本思想はいかなるものであったか、**A**、いかなる程度であったか、これは今日の世界における日本の思想的地位を測る上に重要な問題であろう。もちろん、西洋に知られ、受容され、評価されることによつて日本の思想の真価が決定するわけでない。それ自身において価値あるものは彼らの評価いかに依存しない。**B**単に地方的特異性とどまらず世界的地盤において評価されうるもの、評価にたえうるものでなければ真に価値あるものとはいえないであろう。そのためには世界の共通の広場に立つことを要する。世界的な理解への通路がひらかれねばならぬ。（下村寅太郎「我々の思想史における大拙博士の位置」より）

## ●語句注

受容 受け入れること。

彼らの評価いかに依存しない 彼ら（西洋人）がどう評価するかということに左右されない（価値あるものには、あくまでも価値がある）。

地方的特異性 ある地方、ある国にだけ通用する特殊なものであり、ほかの地方や国には通じないということ。



(1) **A**・**B**を埋めるのに最も適切な語句を次の中から選び、「**〔**」に記号で答えなさい。

- (ア) だから (イ) しかし (ウ) たとえば (エ) また  
(オ) あるいは (カ) ところで

A **〔** **〕** B **〔** **〕**

### 説明

接続する語句が前後をどのような関係でつないでいるか？  
また逆に、前後の関係から考えて、どのような接続する語句を用いればよいのか？

このような疑問を、どのように解決すればよいのでしょうか。

#### 1 接続関係の種類と、それに対応する接続する語句を知る。

接続関係には次のような種類があり、それに対応して用いられる接続の語句には「**〔**」に示したようなものがあります。

**順接**……前のことがらを原因・理由とすることがらが、あとに来る

ことを表す。(だから、それで、すると、したがって、など)

**逆接**……前のことがらとは逆のことがらがあとに来ることを表す。

(しかし、けれども、ところが、だが、だけど、など)

**累加・並立**……前のことがらにつけ加えたり並べあげたりすることを表す。(そのうえ、さらに、そして、また、および、など)

**説明・補足**……前のことがらについての説明や補いを表す。(つまり、なぜなら、たとえば、ただし、もつとも、など)

**対比・選択**……前のことがらとあとのことがらとを、比べたり、どちらかを選ぶことを表す。(または、あるいは、それとも、など)  
**転換**……話題を転じることを表す。(さて、ところで、など)

右のような分類法と代表的な語句を入れておくと便利です。なお、「**〔**」に示したのは、品詞でいえばいずれも接続詞ですが、接続する語句には、接続助詞(が、から、ので、など)や、一部の副詞(ただ、むしろ、特に、など)もあります。

#### 2 接続する語句がつないでいる範囲を押さえる。

接続する語句は、語句と語句、文と文、あるいはそれより大きな部分と部分とをつなぐことができます。そこで、まず、前のようなことがらと、あとのどのようなことがらをつないでいるのか、つないでいる範囲をはっきりさせましょう。

#### 3 前後の文脈を押さえて、どういう接続関係をつかむ。

例題のAの場合、前には「……日本思想はいかなるものであつたか」とあり、あとには「いかなる程度であつたか」とあります。同じような疑問表現が並んでいるわけで、接続関係は累加・並列です。ですから、ここに最もふさわしいのは、(エ)の「また」です。Bの場合は、もう少し広い範囲で接続関係を考える必要があります。まず、4行めの「もちろん」から「B」の直前までを読むと、ここには、**〔**日本の思想の真価は、西洋人の評価によって決ま

るのではない」という趣旨のことが述べられています。次に、**B**のあとを読むと、今度は、「諸外国の評価にたえるものでなければ真に価値あるものとはいえない」と述べられています。つまり、ほぼ逆のことが前後に述べられているわけで、接続関係は逆接です。したがって、ここに最もふさわしいのは、(イ)の「しかし」です。

解答

- (1) A・(イ) B・(イ)

次のページにポイントをまとめておきます。これを一読してから、トレーニングを始めましょう。

### 文や語句の接続関係をつかむ

- 1 接続関係の種類と、それに対応する接続する語句を知る。
- 2 接続する語句がつかないでいる範囲を押さえる。
- 3 前後の文脈を押さえて、どのような接続関係かをつかむ。

### トレーニング

解答は巻末にあります

- 1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〔法政大〕

人間は、理性的動物だと呼ばれているXが、実生活となると、みんな不合理になってしまう。不合理にならないと生きてゆかれない。理性的に、客観的に、自分じしんYと、自分の未来を眺めることができたなら、生きる勇気を失い、絶望し、自殺するであろう。

苦のみ多い世の中と、理性では知っていないながら、未来の幸福を思うことは、どんなに不合理かは、いうまでもない。あなたがたも私も、みんな、そのような不合理な生き方をしているのである。

**A**、実生活に即して物をいったり、書いたりするときは、きつと不合理なことをいったり、書いたりしてしまう。**B**、恋する男が、女にむかって、「私はあなたを世界一の幸福者にしてあげるつもりだ。」といったり書いたりすることは、ごくふつうのことである。

が、そんな能力をもっているのは、世界一の男一人だけである。**C**、なんのとりえもなく、品性の下劣な男までも、そういう言葉を女の耳にささやく。すると女の方も、そんなはずはないなどは批判しないで、日本一幸福な女になりそうな気になる。どう考えても不合理な話である。

● 語句注

品性 ひとがら。

- (1) **A**、**C**のそれぞれを埋めるのに最も適切な語句を次の中から選び、「」に記号で答えなさい。

- (ア) さて (イ) ところが (ウ) または (エ) たとえば  
(オ) それだから

A ( ) ( ) B ( ) ( ) C ( ) ( )

(2) —線Xの「が」、—線Yの「と」は、どちらも助詞です。それぞれ、文中でどのようなはたらきをしていますか。次の六種類のの中から選んで答えなさい。

順接 逆接 累加・並立(へいりつ) 説明・補足  
対比・選択 転換

X ( ) ( ) Y ( ) ( )

「順接、逆接、累加・並立」などの用語は、接続関係の種類について用いられるとともに、接続する語句のはたらきについても用いられます。これらの用語の意味を忘れた人は、32ページの「説明1」を参照してください。では、ここで答えを合わせてから、先へ進みましょう。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。 (京都女子大)

生物学の書物といっても、それにはいろいろの種類がある。現象や事実をこまごま集めただけのものから、体系的な理論構成を主眼としたものまで、さまざまである。A、現象とか事実とかいっても、そのものがすでにX説明をふくんでいる(それにより記載が可能になっている)場合も多いから、生物学の書物の各種類の間に厳格な境界線が引けるとはかぎらない。

B、それぞれの書物においても、その内容を構成する事実と理

論をまったく迷いなくえりわけるとは困難である。C、いちおうの区別ができないわけではない。ラマルクの「動物哲学」であれ、ダーウインの「種の起原」であれ、生物の分類や遺伝にかんする個々の記載と、進化学説の体系における論理のはこびとを、わけて考えることは可能である。

それぞれの学説が、その基礎となる事実をふまえて成立しているものであることは、いうまでもない。それだから、基礎事実があやしくなれば学説もゆらぐ。それは当然のことである。しかし、また他面からみると、学説Dというものは、自然が与えたままの事実とはややちがって、個々の学者のうみだした創造物である。それぞれの学説には、おのおの独自の思考のタイプがあらわれており、論理のはこびの確さにも種々の相違がある。そしてまた、それは人間の生命を分与された創造物として、時代とか社会とか、個人の階級的立場とかを反映してもいる。

それゆえにこそ学説は貴重なのであり、同時にそれゆえにこそ学説は蔑視(べつし)され危険視されるのである。Yだが、事実の集積がそれだけで正しい学説を自然本能的にうみだしていくのではない。そして正しい学説を樹立していく学者たちの努力によって、学問は本質的に進歩するのである。

● 語句注

主眼 中心。主要なところ。

記載 書物などに書いて載せること。11行めの「記載」は「書き記された文章」の意で使われている。

ラマルク フランスの生物学者(一七四四年～一八二九年)。著書「動物哲学」で、器官の用不用説を中心とする進化論を唱えた。

ダーウイン イギリスの生物学者(一八〇九年～八二年)。著書「種の起原」で、自然選択(淘汰)説を中心とする進化論を唱えた。



もすべてが完全に記憶されていることはまれであるが、それで理解にはさしつかえない。この場合、忘却はいかにも無秩序に行われるように、じつは、個人に特有のグラマーをもっている。肯定されるものは保持されるが、否定、反発されるものは排除されて忘れられる傾向を示す。

忘却は無意識、不随意的な選別作業である。精神分析が忘却に特別の意義を認めているのは周知のとおりだが、忘却が個性の発達に比例して、その働きを高めることも注意されるべきであろう。子供は記憶力がよいが、本当にものごとを理解する力は十分でない。

**B** 理解に必要な選別、すなわち忘却の作用がまだじゅうぶんに発達していないからであると考えられる。

〈中略〉

人間はどんなものを忘れていくようにできている。その忘却に堪えて残ったものが価値であり、個性である。この作用は個人を越えた社会とか時代とかいう次元においても認められるものである。

社会的忘却、歴史的忘却のプロセスをくぐって生きのびたものが、**C** 古典である。その点、一読者の頭の中でも小規模な古典化がつねに進行していることになる。その古典化という創造活動から言えば、批評的読み方や教室的読み方に比べて忘却の自由な活動の見られるコモンリーダーのほうがすぐれていることは、以上の考察によってもいくらか認められるであろう。

● 語句注

案出 考へ出す。

知覚 意識によつてとらえること。

即時的に すぐに。

グラマー 文法。ここでは、〈法則〉とか〈型〉という意味で使われて

いる。  
不随意的な 自分の意のままにならない。  
プロセス 過程。あることがらの変化・進行のみちすじ。  
批評的読み方 本文では、職業的批評家が、批評の通念にとらわれながら読む、非個人的な読み方を指す。  
コモンリーダー ふうふうの読者。

(1) **A**、**C** のそれぞれを埋めるのに最も適切な語句を、各組から選びなさい。

- |   |          |          |           |
|---|----------|----------|-----------|
| A | (ア) そこで  | (イ) それでも | (ウ) 従つて   |
|   | (エ) もつとも |          |           |
| B | (ア) やはり  | (イ) とても  | (ウ) とは言えど |
|   | (エ) まったく |          |           |
| C | (ア) もつとも | (イ) そこで  | (ウ) すなわち  |
|   | (エ) まったく |          |           |

一つ一つ  に入れて読み、前後のつながりが最もよいものを選びなさい。

☆☆次の問題もやってみよう！☆☆

(2) 本文につける表題として、最も適切なものを次の中から選びなさい。

- (ア) 忘却の機能      (イ) 読者の創造性      (ウ) 忘却の創造性

本文で筆者が言いたいことは何なのかをつかみ、それを最もよく表せるものを選んでください。

答えを合わせたら、トレーニング4に進みましょう。

#### 4 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〔近畿大〕

人間的関心は、いつも低俗なもののみに向けられるのではない。人間性を低きに求めることは、究極において人間性の否定となる。人間性は何か積極的なものであつて、人間はそれ自体において、すでになんらかの高さに達しているのである。したがつて高きに人間性を求めるヒューマニズムも、決して普遍性を欠くことにはならないのである。人間には過失もあれば、弱点もあり、墮落もある。A また向上もあれば、美点もあり、成功もある。B これこそ積極的に人間的なものなのである。そしてこのような善きものを人間に認めて、人間を信ずることこそひろく人間を愛することの基礎となるであろう。人間愛とは、漠然と人間を思い浮かべてこれを愛しようとするのではない。それは個々の場合に、人間をあくまで人間として認め、敵のうちにはさえ人間的なものを見出そうと努力することにはかならない。過失を許す場合にもそれが人間愛となるためには、根本において人間を信ずる心がなければならないのであつて、単なる共犯者意識だけでは、我々は冷酷な悪魔となつたであろう。人間のなしたげた善美なるものを見て、我々は人間を信じ、人間であることを喜ぶのである。善美なるものに無関心であるということとは、人間的なことではない。X 教養が人間性であるという意味は、このような人間的関心の開拓を指しているのである。ヒューマニズムは、

およそ人間のなすことは、自分にはよそごととは思われないという一個の博大な精神をいうのである。C ヒューマニズムは、人間の悪とともに、またその善をも見うる眼識とならねばならぬ。低きを見ることも必要であるが、高きを見ることは一層人間的なことなのである。人間性はその高きによつて、計らねばならぬ。

#### ● 語句注

人間性 人間の本性。人間らしき。

普遍性 多くのものに共通にあてはまる、という性質。「普遍性を欠く」

は、「特殊なこと、特別なことだ」という意味になる。

積極的に人間的なもの 肯定すべき、強調すべき人間的なもの。

共犯者意識 人間はどうせ不完全な存在なのだから、過失を犯すのは

お互いさまだ、という意識。

博大 (精神的なことから) 広く大きい様子。

眼識 ものごとのよしあしを見分ける力。

(1) A C のそれぞれを埋めるのに最も適切な語句を次の中か

ら選び、「」に記号で答えなさい。

- (ア) しかるに (イ) したがつて (ウ) やはり  
(エ) しかし (オ) さて (カ) たとえば  
(キ) もし (ク) そして

A ( ) B ( ) C ( )

まず、意味を考えながら本文をよく読み、内容をつかみましょう。なお、選択肢の中には、紛らわしいものが含まれていますので、□に入れて読みくらべ、前後のつながりが最もしぜんになるものを選びましょう。

☆☆次の問題もやってみよう！☆☆

(2) 線Xの「教養」の解釈として最も適切なものを次の中から選  
びなさい。

- (ア) 人間性を追求すること。
- (イ) 知・情・意を身につけること。
- (ウ) 人類愛を追求すること。
- (エ) 善・美を身につけること。

(3) 本文の趣旨と合うものを次の中から二つ選びなさい。

- (ア) 人間は本質的には善である。
- (イ) 人類愛とは広く愛することである。
- (ウ) 人類愛とは人間を信することである。
- (エ) ヒューマニズムとは人を信することである。
- (オ) ヒューマニズムは人間にとって最高のものである。
- (カ) ヒューマニズムは人類愛の基礎である。

—— 紛らわしい文が並んでいますね。本文と丹念に照らし合わせて、(ア) (ウ) か  
ら一つ、(エ) (カ) から一つ、適切なものを選んでください。  
きょうの読解はここまでです。

—— 次のページの「漢字・語句のトレーニング」を忘れずにやっておきましょう。



1 次の——線の漢字の読みを示しなさい。(□にチェックしなさい。)

- (1) 責任をもつて任務を遂行する。
- (2) 博士は、昨夜遅く逝去された。
- (3) 近ごろこの界限に怪しい男が出没するそうだ。
- (4) 当時の日本には、群雄が割拠していた。
- (5) あの人は、さる大富豪の御曹司だそうだ。
- (6) 彼の真摯な態度は、人々に好感をもたれた。
- (7) 最近の拙作を一句したためました。
- (8) 親に乱暴をはたらくとは、不届千万である。
- (9) 本校では、殆どの生徒がクラブ活動に参加している。
- (10) ぼくは、数学が不得手だ。

2 次の——線のことばを漢字で示しなさい。(□にチェックしなさい。)

- (1) 蔵相は、減税の可能性をしさした。
- (2) これは、俗衆にげいごうした作品だ。
- (3) 人手不足のため、稲のしゅうかくが遅れている。
- (4) 少女の自由でほんぼうな態度は、村人を驚かせた。
- (5) 歯をくいしばって屈辱にたえる。
- (6) 慎重に計画を練り、だいたんに実行する。
- (7) 何のへんてつもない石に見えるが、これは珍しい鉱石なのだ。
- (8) 二人の意見がいつちした。
- (9) 第三国のかいにゆうによって紛争は激化した。
- (10) 海にまつわるきかいな伝説を集めて本にする。
- (11) 自分の心をあざむくことはできない。
- (12) 水泳選手は、きんせいのとれた体つきをしている。
- (13) 彼はときどき母校を訪れ、こうはいを指導している。
- (14) 人をうらむよりも、自分自身を反省しなさい。
- (15) この記事は、現場の様子をよじつに伝えている。
- (16) 選手たちは、試合に臨むころえを、コーチから聞いた。

3 動詞「する」は、その用法によって八種類に分類できますが、次の(1)(2)はそのうちの二つです。後の文群(ア)から、(1)および(2)に相当する文を選び、それぞれの「」に記号で答えなさい。

- (17) 兄は、会社のどうりようと旅行に出かけた。
- (18) 足でひょうしをとりながらジャズを聞く。
- (19) 学歴をへんちようする傾向は、しだいに弱まるだろう。
- (20) 何だかふきつな予感がする。
- (21) 工業製品を世界各国にゆしゆつする。
- (22) ジプシーは、るろうの民である。
- (23) しろうともわかるように説明してください。
- (24) 子どもに高価ながんぐを与えるべきではない。
- (25) 宗教心は尊いが、きょうしんかになつてはいけない。

(1) 「CラDニする」——対象CをDの状態に変える。「化成で「……になる」との入れ替えが可能である。Dは名詞、形容動詞語幹のほか、形容詞の連用形を立てることもある。

例 息子を医者にする。(↓息子が医者になる。)

網の目を粗くする。(↓網の目が粗くなる。)

(2) 「CラEニする」——(1)と似ているが、「……になる」への言い換えはできない。

例 人を足蹴にする。

武器を手にして敢然と戦う。

文群

- (ア) いやな噂を耳にした。
- (イ) 鋭い眼をした鷹。
- (ウ) たこをさかなにして酒を飲む。
- (エ) 大事なときにくしゃみをして困った。
- (オ) 患者に注射をする。



## 係り受けをつかむ

きょうは係り受けをつかむ学習をします。

文学的文章でも論理的文章でも、文章を構成する一つ一つの文が長いと、文脈をたどっていくのに骨が折れるものです。

特に論理的文章では、それが厳密に書かれているものほど、慎重にさまざまな条件づけをしたり、挿入句的なものをたくさんさんんだり、とにかく一つの文が長くなって読みづらい部分によく出くわします。

そのような場合、主述の関係や修飾・被修飾の関係に注意して、この語句はどこへ係っているか、またこの語句はどこを受けているかというように、係り受けを正しくつかむと、その文の組み立てがわかり文脈がたどれます。

また逆に、主語や修飾語にあたるものが省略されているために、わかりにくくなっていることもあります。その場合は、前後の文脈から補って考えることが必要になりますね。

きょうは、以上のようなことを、比較的やさしい文章を使って考えてみることにしましょう。



### ● 例題 ●

解答は説明のあとにあります

▽ 次の A・B の文章を読み、それぞれ後の問いに答えなさい。

〔A は学習院女子短大・B は金城学院短大部〕

A

以前、湘南地方のある地区の小学校で、「ヨサネ」廃止運動というのがあった。「ヨサネ」とは、いうまでもなく、「あのヨ」、「そのサ」、「そんでネ」の「ヨ」と「サ」と「ネ」のことである。文法上では全く無意味なこれらの音が、言葉の切れ目切れ目にひときわ強く鳴る。a それは丁度、メゾピアノやメゾフォルテで奏されている b 旋律が、フレーズの切れ目ごとにスフォルツァンドで鳴り終わるといった形のもので、音楽的には、はなはだグロテスクな表情である。

B

立派な講義をして学生を魅了しないから、学生が変な所を遊び歩くと云う様な事を云う人もあるが、随分 d 面白い話であつて、いい講義が面白いとは限らない。本当は面白くある筈のものと思われるが、その面白さは学生の方で勉強して味わい当てるべきものである。学生の間評判がいいと云われる教師には、だらしないのが多い。教壇の上で声色を使ったり洒落を云ったりして、講義や

授業の興味をつなごうとする。教室で先生から御機嫌ごきげんを取り結ばれていると、学生の気質が墮落する。(内田百閒「百閒座談」より)

● 語句注

メゾピアノ||やや弱く。  
メゾフォルテ||やや強く。  
スフォルツァンド||特にその音を強く。  
声色しんしきを使う||役者のせりふまわしの音色・くせなどをまねる。

(1) Aの文章で、——線a、bを受ける述語として適切なものを次の中から選び、「〔 〕」に記号で答えなさい。

(ア)奏されている (イ)鳴り終わる (ウ)グロテスクな表情である

a〔 〕 b〔 〕

(2) Bの文章で、——線cはだれが「魅了めいりやうしない」のですか。また——線dはだれを「買いかぶった」のですか。それぞれ本文中から適切な語を書き抜いて答えなさい。

c〔 〕 d〔 〕

説明

「係り受け」ということは、さまざま(ときには、あいまいな)用い方をされますが、その中心となるのは主述の関係と修飾・被修飾の関係です。これらの関係を正しくつかむことは、論理的、文学的を問わず、文章読解の重要な基本です。きょうの学習では、

次のような点に気をつけましょう。

1 主述の関係を正しくつかむ。

「何が……どうする(どんなだ・何だ)」という主語と述語の関係は、文の大きな骨組みであり、一見簡単につかめそうです。しかし、主語や述語に長い修飾語句がついたり、間に挿入句そうにゅうくご的なものがはさまったり、また一つの文の中に主述の関係が二つ以上あったりすると、文が複雑になってなかなかつかいにくいです。例題の(1)では、「それは……(グロテスクな)表情である。」という文全体の主語・述語をまずつかみましょう。そして、間に説明的にはさみ込まれた部分(「丁度、……形のもので、」の中から、「旋律が」を受ける述語を探すと、「鳴り終わる」が見つかりますね。

2 修飾・被修飾の関係を正しくつかむ。

修飾語は、すぐ下の語句に係っているとは限りません。ずいぶんあとの部分を修飾している場合もありますから、注意が必要です。きょうのトレーニングではその種の設問も扱いますが、その場合、まずそれが連体修飾(名詞・代名詞など体言を修飾する)か、連用修飾(動詞・形容詞・形容動詞など用言を修飾する)かを明らかにしましょう。そうすれば、どの部分を修飾しているか見つけやすくなります。

3 主語や必要な修飾語句の省略は、前後の文脈から補う。

日本語では主語がよく省略されます。また、不必要な繰り返しや文がぐどくなるのを避けるために、「何の」とか「何を」といった本

来なら必要な修飾語句が省略されることもあります。これらは、最後の文脈からきちんと補って考えないと、その文の意味が通じなくなったり、また意味を取り違えたりしてしまいます。例題の(2)は、「魅了しない」の主語、「買いかぶった」の修飾語を、それぞれ補う設問ですね。cは、「教師」でも「先生」でもよろしい。dは、前後の文脈から当然「学生」が正解です。

【解答】

- (1) a (ウ) b (イ)  
 (2) c 教師(先生) d 学生

答え合わせをしたら、次のまとめを一読しておきましょう。

係り受けをつかむ

- 1 主述の関係を正しくつかむ。
- 2 修飾・被修飾の関係を正しくつかむ。  
 \* その場合、まず連体修飾か連用修飾かを考える。
- 3 主語や必要な修飾語句の省略は、前後の文脈から補う。

「係り受け」ということばは、主述の関係や修飾・被修飾の関係のほかに、たとえば副詞の呼応(「もしも〜なら」「まさか〜ないだろう」のように、ある副詞のあとに特定の言い方がくること)とか、「この文は前のどの部分を受けていますか。」といった形で用いられることもあります。一応、注意して

おきましょう。  
 では、トレーニングです。まず、主述の関係についてのごく簡単な問題から始めましょう。

トレーニング

解答は巻末にあります

- 1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。〔国学院大栃木短大〕

日本人は繊細な神経の持ち主であります。他人の心の動きに敏感です。相手が自分をどうおもっているかをすぐ察知する。日本人は特有な美意識を発達させました。それは、いはば潔癖の美学とでもいうべきものであります。穢れを祓うということ、汚れていない<sup>もと</sup>素の状態、無地の美しさを、最高の美とする。そして、この美意識は、たんに形あるものについてばかりでなく、無形の人間関係にもおよんでいます。人間関係を規制する倫理感も、つまりはこれによって支配されているのです。

- (1) 線a「察知する」の主語を書きなさい。

これは簡単ですね。答えはすぐにわかるでしょう。

☆☆次の問題もやってみよう！☆☆

- (2) 線bの「これ」は何を指していますか。できるだけ本文中の

語句を使って十字以内で書きなさい。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

答え合わせをして次に進みましょう。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〔明治大〕

いったい純文学と通俗小説との相違については、今までさまざま  
な人が考えたが、結局のところ、意見は二つである。純文学とは偶  
然を廃すること、いま一つは純文学とは通俗小説のように感傷性の  
ないこと、とこれ以外に私はまだ見ていない。しかし偶然とは何か、  
感傷とは何か、となるとその言葉の内容は簡単に説明されるもので  
はなく、したがってその説明も、私はまだ一つも見たことも聞いた  
こともないのであるが、しかし事がこの最初で面倒になると、aか  
ならずそんなことは勘でわかるではないかと人人はいう。少し難し  
い言葉を使う人は偶然のことを一時性といい、偶然の反対の必然性  
のことを日常性といっているが、感傷となると、これこそ勘でわか  
らなければ、わかり難い。bまずあるなら、一般妥当と認められる  
理智の批判に堪え得られぬもの、とでも解するより今のところ仕方  
もない。

● 語句注

純文学と通俗小説 純文学とは、純粋な文学思想を表現し、芸術  
性を第一の目的として書かれた文学作品（特に小説）のこと。ま  
た「通俗小説」とは、芸術的な価値に重点を置かず、一般大衆の  
興味を引くことを目的として書かれた小説のこと。ただし、これ

ら二つの分類の基準は人によって違い、またこのような分類自体  
が、無意味であると考える人もあり、議論がさまざまに分かれる  
ところである。

日常性 ここではふつうの意味ではなく、「いつもあたりまえのことと  
して存在する性質」といった特殊な意味が込められている。

一般妥当 一般的にいつて、実情や道理に無理なくあてはまること。  
堪え得られぬ 耐えることができない。

(1) 線aの「かならず」はどこに係っていますか。本文から適切  
な単語を書き抜きなさい。

( ) ( )

修飾・被修飾の関係についての問題ですね。説明の2で述べたように、ま  
ず連体修飾か連用修飾かを考えましょう。

(2) 線bの「まずあるなら」というのは、何が「ある」というの  
ですか。十字以内でまとめなさい。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

主語を補う問題です。ちょっと難しいですが、前後の文脈に注意して、適  
切にまとめましょう。

3 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〔千葉大〕

知人からこんな話を聞いた。ある人が、京都の嵯峨で月見の宴をした。もつとも月見の宴というような大袈裟なものではなく、集まって一杯やったのが、たまたま十五夜の夕であったといったような事だったらしい。平素、月見などには全く無関心な若い会社員たちが多く、そういう若い人らしく賑やかに酒盛りが始まったが、話の合間に、誰かが山の方に目を向けると、これにつられて誰かの目も山の方に向く。月を待つ想いの誰の心にもあるのが、いわず語らずのうちに通じ合っている。やがて、山の端に月が上ると、一座は、期せずしてお月見の気分支配された。暫くの間、誰の目も月に吸い寄せられ、誰も月の事しかいわない。

ここまでは、当たり前な話である。ところが、この席に、たまたまスイスから来た客人が幾人かいた。彼等は驚いたのである。彼等には、一変したと見える一座の雰囲気、どうしても理解できなかつた。そのうち一人が、今夜の月には何か異変があるのか、と、茫然と月を眺めている隣の日本人に、怪訝な顔附で質問したというのだが、その顔附が、いかにも面白かつた、と知人は話した。

スイスの人だつて、無論、自然の美しさを知らぬわけはなかつたろうし、日本にはお月見の習慣があると説明すれば、理解しない事もあるまい。しかし、そんな事は、みな大雑把な話であり、a心の深みに這(は)入って行くと、自然についてのb感じ方の、私たちとはどうしても違う質がある。これは口ではいえないものだし、またそれ故に、私たちは、いかにも日本人らしく自然を感じているについて平素は意識もしない。たまたまスイス人といっしょに月見を

して、cなるほどと自覚するが、この自覚もまた、一種の感じであつて、はつきりした言葉にはならない。スイス人の怪訝な顔附が面白かつたで済ますよりほかはない。

● 語句注

山の端——山のはし。山の、空に接する境。

期せずして——予期していなかったのに、偶然にものごと一致する様子。思いがけず。

怪訝な——不思議そうな。納得のゆかなさうな。

(1) ———線aの「心」とは、だれの「心」ですか。

(2) ———線bの「感じ方の」が係っている単語を書き抜きなさい。

(3) ———線cの「なるほどと自覚するが」とありますが、何を「自覚する」のですか。できるだけ本文中の語句を用いて書きなさい。

☆☆次の問題もやってみよう！☆☆

(4) ———線部の「いわず語らずのうちに通じ合っている」と同じ意味内容を表す漢字四字の熟語を書きなさい。

「いわず語らず」とは、ことばに出しては何も言わないことです。それでも自分の考えや気持ちに相手に伝わることを何とかいいますか。ぴったりした漢字四字の熟語を思い出しましょう。

さあ、次はいよいよ最後のトレーニングです。

#### 4 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(国学院大)

京都の古い庭を歩く、まがりくねった道の一つの角をまがりきると、あるいは、ふと一本の木を通りすぎると、その瞬間に、まるで今までとは違う景観が眼にとびこんできて、驚かされることがある。風が吹く——また新しく見える。歩くほどに、一つの庭がいろいろ異なった庭に見えてくる。

一方、ヨーロッパの名園といわれるものは、みんな高いところから見おろすようにできている。一目で見おろせるその空間は、たしかに均整がとれていて美しいかもしれないが、それとはまったく無関係な遠いところで時間が流れていく。ところが京都の庭では、あす隣りあわせだった——。

現代の音楽について語るとき、古い日本の庭をひきあいに出すのは奇妙なことかもしれない。しかし、現代の音楽形式について理解をもとうとするとき、このひゆのひゆについて考えてみることは、必ずしも的はずれではないと思う。ちょうど京都の庭を高いところから見おろして観賞することがまったく意味がないように、音楽がそこにある現代にあつては、その一瞬一瞬のうちにこそすべてがかげられているのであつて、古典的な形式感をもつて現代音楽に接するのはあらゆる誤解を生み出すものにならう。

職業化され、商品化された現在の演奏家の手によるb古典音楽には、あたかも、商店の店先に並べられている商品をもつて、cひやかすような、距離をおいた客観的な態度で接することも、ある程度聞き流すことも許されようが、もし、真に現代音楽への理解を深めようと思うのなら、そのような客観的な態度は期待を裏切るばかりであろう。みずから創造的な感性をもつて、音楽のなかへ立入っていかないかぎり、現代音楽は生きた存在となつて呼吸をとにもすることはなく、そこに音楽の営みは生まれぬ。

(1) ———線 a に「すぐ隣りあわせだった」とありますが、何と「隣りあわせ」だったのですか。次の中から適切なものを選びなさい。

- (ア) 一本の木 (イ) 道 (ウ) 風 (エ) 時間 (オ) 空間

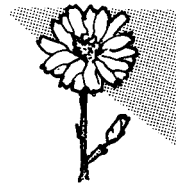
「何と」にあたる連用修飾語を補う問題です。

(2) ———線 b の「古典音楽には」が係っている文節を書き抜きなさい。

(3) ———線 c の「ひやかすような」が係っている単語を書き抜きなさい。

問い(2)・(3)は修飾・被修飾の関係についての問題です。それぞれ、まず、連体修飾か連用修飾かを考えましょう。また(2)は「文節」、(3)は「単語」という指示がありますから、きちんとその指示に従って書き抜きましょう。

答え合わせをしたら、きょうの学習は終わりです。ご苦労さまでした。



次のページの「漢字・語句のトレーニング」を忘れずにやっておきましょう。

1 次の線の漢字の読みを示しなさい。(□にチェックしなさい。)

- (1) 釈迦しよかの入滅を悲しむ慟哭たうこくがいたるところで聞かれた。
- (2) 彼は、切手の蒐集くしゅうを趣味としている。
- (3) 地下資源は、無尽蔵むじんざうではない。
- (4) 今、若者の間では、どんなことばが流行りゅうこうしていますか。
- (5) 当時、日本の工業製品の海外での評判は、あまり芳よししくなかった。
- (6) そんな危険を冒あそびしてまで、冬山に登る必要があるのか。
- (7) これは、彼には内証うちしやうにしておいてくれ。
- (8) 支度しどができたなら、すぐ出発しよう。
- (9) あの男も、所詮しよせんは利己主義者りきしやうしやにすぎない。
- (10) 最近の天気は、実に気紛きふんれだ。

2 次の線のことは漢字で示しなさい。(□にチェックしなさい。)

- (1) 彼は、頭を打って記憶をそうしつした。
- (2) 社会のルールを大きくいつだつした行為は、必ず罰せられる。
- (3) ここは、先祖が血と汗によつてかいたくした土地だ。
- (4) 物体をまさつして、静電気を起こす。
- (5) その年は、ペーターペンのせいだん二〇〇年めにあつた。
- (6) 責任を他にてんかしてはならない。
- (7) ふくしの充実を政府に望む。
- (8) われわれは、平和と自由をほつする。
- (9) 彼は、れいらくした貴族の家に生まれた。
- (10) 宇宙はなぞに満ちている。
- (11) 国土のほうえいについて論議する。
- (12) 最近、ひんぱんに地震が起こる。
- (13) この県は、多数の大政治家をはいしゆつしている。
- (14) 馬のちようきようは、忍耐力のいる仕事だ。
- (15) どうしよの計画では、ここに駅をつくることになつていた。
- (16) それは、科学的根拠のないぞくせつだ。

- (17) 問題が生じたら、ちくいち上司に報告しなさい。
- (18) 彼は、あらゆるしんさんをなめて成長した。
- (19) この道具はなかなかちようほうだ。
- (20) じゆくりよの末、決断を下す。
- (21) わたしの父は世界一がんこです。
- (22) 流れにさからつて泳ぐ。
- (23) この地方では、まだ桜がかいかしない。
- (24) 自分が今どこにいるのか、かいかも見当がつかない。
- (25) いなずまが走るのと同時に、雷鳴がとどろいた。

3 動詞「する」は、その用法によつて八種に分類できますが、次の(1)

(2)はそのうちの二つです。後の文群(ア)から、(1)および(2)に相当する文を選び、それぞれの「」に記号で答えなさい。(該当する文は、「」の数だけあります。)

(1)「……がする」——「が」の主格には、諸種の無意志的現象が立つ。

例 歌声がする。

何となくいやな予感がする。

「」 「」 「」

(2)「……トする」——「ト」の前には副詞や形容動詞がくる。「トなる」という表現も可能である。

例 気がついてはつとした。

記憶がはつきりとしてきた。

「」 「」

文群

(ア) そこにじつとしていなさい。

(イ) 昨夜地鳴りがした。

(ウ) ほくは月見そばにする。

(エ) 今朝、めまいがした。

(オ) 平常の二倍もするお値段。



## 〈総合〉読解の過程をふんで

きょうは、第5日までの技法的読解のトレーニングの成果も生かしながら、総合的な読解のトレーニングを行います。

論理的な文章を読む場合、筆者の書き表そうとした中心的な考え、つまり要旨をとらえることが、最終的な目標であるといえます。しかし、長い文章を読んで、いきなり要旨を把握することはなかなか難しいことなので、まず、ポイントとなるところを、文脈にそって検討し、そのうえで、構成を考え要旨をとらえるという読解の過程を踏んだトレーニングを行うことが必要となつてきます。

この総合的読解のトレーニングは、テストではありません。あくまでも、どのように内容を解きほぐしながら、理解し読み進めていけばよいのかという読解の手順を身につけるものです。ですから、トレーニングをやりながら、テキストに——線を引いたり、書き込みをしたりなど、授業を受けるつもりになって取り組んでください。また、一問ごとに答え合わせをして、正しい答えを確認しながら次に進むことも大切です。

きょうのテキストは、中央大学で出題された、清水幾太郎の「現代思想入門」という評論からの一節です。では、さっそくスタートです。

最初に、一とおり最後まで読んでみましょう。大切だと思われる部分や、わかりにくい部分にしるしをつけながら読んでもいいですよ。

### ●●きょうのテキスト●●

①元来、人間は自然の一部であつて、自己の生存に必要な物質を自然の懐から受け取ることができる限りにおいて、その生存を保つことが出来る。これは、同じく自然の一部である他の動物にも同様に当てはまることである。生存に必要な物質を自然から受け取るために、人間はその長い歴史を通じて各種の労働を続けて来た。労働という言葉を経極めて広く解するなら、他の動物もある種の労働を営むと考えることが可能であろう。しかし、周知のように、遠い昔から、人間はその労働に際して常になんらかの道具を用いて来た。人間は、一面、他の動物と同じく自然の一部として生きながら、他面、道具を作り且つ用いることによって、他の一切の動物と異なった方法で自然に関係する。第一に、道具の製作及び使用によって、人間は他の動物よりも深く自然と結びつくことができる。もっぱらその身体によつて自然と接触する他の動物にとつては隠されている自然のものもろの可能性が、道具を介して自然と接触する人間にとつては明らかに存在する。前者にとつては眠っている自然の諸力が、後者にとつては目覚めている。道具の使用を通して、人間は自然の表面を突き破り、その暗い内奥へ踏み入つて、自然の意志に逆らつてまで自然を自己のために利用することができる。しかし、このことは、見地を換えれば、道具という媒体によつて新しい屈折を与えられた

自然の諸力が、他の動物には見られぬ量と質とにおいて、深く人間の内部へ入り込み、そこで様々の機能を果たすことを意味する。人間の作った道具を通して、人間と自然とは、自然そのものの予想を越えて、内的に結びつくことができる。科学の発展に支えられて、やがて、道具は機械となり、機械は時代と共に巨大と精密との度を加えて来る。換言すれば、人間と自然とがいよいよ深く相互の内部へ入り込んで、両者の結合がますます内的に発展して行く。

②けれども、第二に、道具は、その出現の当初から、人間を自然から切り離す意味を有するものである。人類の歴史に現れた最初の道具は、それがいかに幼稚なものであつたにしろ、人間と自然との間に割り込み、人間を自然から切り離すものであつた。道具は人間と自然とを繋ぐ絆であると同時に、それ自体、この絆を切り放つ鋭いメスであつた。道具が現れた瞬間、他の動物に見られるような自然との間の直接的な結合乃至融合の時代は終わり、この瞬間以来、人間は道具を通して間接に自然と接触する運命を担うことになる。やがて、道具は機械に発展する。もとより、この発展も労働の諸領域にわたつて一挙に且つ一様に進みはしなかつたが、しかし、機械は、道具が人間を隔てていたのとは別個の規模において両者を大きく隔ててしまう。機械がいかに隔てたにしても、所詮、人間は自然と与えるものを受けて生きるほかはないし、また、**a**、人間は自然と相対し、自然と結ばれているにもかかわらず、人間が直接に接触するものは、自然であるよりも機械あるいはその一部分である。時に機械を通して垣間見られる自然は、もうナチュラルな自然ではなくなっている。

③もし人間を神の手から奪い取つて、これを自然の中に立たせるの

が自然主義であるのなら、私は喜んで自然主義を奉じよう。また、もし自然を人間の故郷と見た上で、その人間の福祉を願うのがヒューマニズムであるのなら、私は進んでヒューマニストの仲間に加わろう。しかし、自然主義もヒューマニズムも、そのどこかで人間と自然との直接的な結合や融合の夢を見ているのであれば、いずれも現代の条件の下で人間を支えて行く力は持ち得ないであろう。敢えて、「道具を作る動物」というフランクリンの規定を持ち出すまでもなく、人間は道具の製作及び使用によって自己を自然と結びつけ、しかも、同時に自己を自然から切り離したのであつて、道具から機械への発展を通じていよいよ広さと深さとを増して来た**b**性は、いわば人間それ自体の本質から流れ出ているものである。**b**性に堪えることは、そう言つてよいなら、人間の運命である。機械に向かつて呪咀の言葉を吐いてみても、それで機械時代は消えはしない。原始時代における人間と自然との融合を美しく描き上げ、将来におけるその回復を約束してみても、それで**b**性という運命がわれわれから離れ去るということはない。

#### 語句注

51 フランクリン——ベンジャミン・フランクリン（一七〇六年—一七九〇年）。アメリカ

カの政治家・科学者。

57 呪咀——のろうこと。のろい。

上の数字は行数を示す

内容のわかりにくい部分があるかもしれませんが、トレーニングを行うことによつて一つ一つ理解していきましょう。

1 筆者は、本来の人間と自然との関係をどう見ていますか。

2 「自己の生存に必要な物質を自然の懐から受け取ることができない限りにおいて、その生存を保つことが出来る。」(1行め)とは、わかりやすく言いかえると、どのように表現できますか。「」に適切な文字(四字)を補いなさい。

自己の生存に必要な物質を自然の懐から受け取ることが「」、その生存を保つことができる。

この点については、「同じく自然の一部である他の動物にも同様に当てはまる」(3行め)と筆者は述べています。そして、人間も動物も、自己の生存に必要な物質を受け取るために、「ある目的のために、体を使って活動すること」という広い意味での労働を営んできました。

3 自然から必要な物質を受け取るための労働という点において、人間と動物との相違点を述べなさい。

自然から必要な物質を受け取るための労働に、道具を用いるか用いないかによって、自然に関係する方法も異なってくるのですね。

4 「もっぱらその身体によって自然と接触する他の動物にとっては隠されている自然のもろもろの可能性が、道具を介して自然と接触する人間にとっては明らかに存在する」(12行め)ということの具体例として最も適切なものを選びなさい。

- (1) 人間以外の動物は、自然から食料として植物や他の動物を受け取るが、人間は道具を用いて、自然を題材とした絵画などの文化を生み出すことができる。
- (2) 食料としての植物ということについては、人間以外の動物は、野生に生えている植物を食べるしかないが、人間はくわなどの耕す道具を用いて植物を栽培し、これを自然から受け取ることができる。
- (3) 人間以外の動物は、武器を用いずに獲物を襲うが、人間はやりなどの武器を用いて獲物を襲い、それだけ危険にさらされる可能性が少なくなる。

この文章は、抽象的な説明が多く理解しにくいかもしれません。こういう文章は、必要な個所で具体例を補いながら読み進めていくとわかりやすいですよ。

5 「道具の製作及び使用によって、人間は他の動物よりも深く自然と結びつくことができる。」(11行め)ということが、二つの見地から説明されています。この二つの説明を次のように整理しました。「」に適切な語句を補いなさい。

「 (道具の使用) 〓 ( ) の内奥へ踏み入り、  
 ( ) の意志に逆らってまで、 ( ) を利用する。

(道具という媒体により) 屈折を与えられた ( ) の諸力〓深く  
 ( ) の内部へ入り込み様々の機能を果たす。

「見地を換えれば……ことを意味する。」(19〜21行め)という言い方に注意してください。前で述べたことを、「見地を換えて」言いかえています。そして、この二つの見地からの説明のあとで、もう一度、「人間の作った道具を通して、人間と自然とは、自然そのものの予想を越えて、内的に結びつくことができる。」(21行め)と書いています。

6 「自然の意志」(17行め)と同じ内容を、他の語句を使って表現している部分を書き抜きなさい。

「自然の意志に逆らって」(17行め)「自然そのものの予想を越えて」(22行め)というのは、たとえば、人間が、野生の植物以外にも、農具を用いて植

物を栽培し食料としたり、武器を用いることにより、弱肉強食という自然界の法則を破ったりすることです。

7 これまでに述べられたような人間と自然との結び付きは、時代が進むにつれ、どうなっていましたか。また、それはどういことが原因となっているのですか。

たとえば、石油などの天然資源の利用も、科学の発展、機械の発展により、人間にとって不可欠のものとなりました。

8 「第二に、」(27行め)以下で述べられていることは、どういうことについての第二番めの説明なのですか。

人間が他の動物と異なった方法で自然に関係するということを、二つの点から説明しています。第一の点は、「道具の製作及び使用によって、人間は他の動物よりも深く自然と結びつくことができる。」(11行め)ということでした。

9 「道具は人間と自然とを繋ぐ絆であると同時に、それ自体、この絆を切り放つ鋭いメスであった。」(30行め)という比喻で、筆者はどういうことを表そうとしたのか、本文中の語句を用いて簡潔にまとめなさい。

前問で触れた二つの説明において、道具が人間と自然の間でどういうはたらきをしたかを比喩的に表現しています。

10 「両者」(37行め)とは、何と何を指していますか。

機械の発展により、人間と自然との接触がますます間接的になり、人間と自然とを大きく隔ててしまいました。たとえば現代では、われわれは、自然とまったく接触することなしに、穀物や動物の肉を食料として手に入れていることが多くなりましたね。

11 a (39行め)に入れるのに最も適切と思うものを選びなさい。

- (1) それ自体
- (2) 表面的には
- (3) 究極において
- (4) 論理上

「究極において、人間は自然と相対し、自然と結ばれている」(39行め)とは、人間は自己の生存に必要な物質を自然の懐から受け取って生きており、いくら間接的であるにせよ、自然と関係し結ばれているということです。

12 「ナチュラルな自然」(42行め)とはどういう意味で使われていますか。わかりやすく説明しなさい。

機械の発展により、第一段落でいう人間と自然との結び付きは、内的にますます深まっていったと同時に、一方では、機械は、道具が人間を自然から隔てていたよりもっと大きな規模で、両者を隔ててしまいました。

13 第三段落の冒頭に「もし人間を神の手から奪い取って、これを自然の中に立たせるのが……」とありますが、この文中の「これ」(44行め)

は何を指していますか。

14 [ b ] (54・55・59行め)に入れるのに、最も適切と思う語を、第二

段落中から選びなさい。

( ) ( )

15 「人間それ自体の本質」(55行め)とは、具体的にはどういうことですか。本文中の他の語句をそのまま用いて、十字以内で答えなさい。

5 10

人間は道具を作り、使用する動物である以上、自然との間接的な接触は人間の運命であるというのですね。



16 「自然主義もヒューマニズムも、そのどこかで人間と自然との直接的な結合や融合の夢を見ているのであれば、いずれも現代の条件の下で人間を支えて行く力は持ち得ないであろう。」(48行め)について、次の問いに答えなさい。

次の問いに答えなさい。

A 「現代の条件の下」とは、具体的にどのような条件の下なのですか。それがわかる本文中の語句を、第三段落中から選び五字以内で答えなさい。B さらに、「人間を支えて行く力は持ち得ない」のはなぜか七十字以内で書きなさい。

5 10

「原始時代における人間と自然との融合を美しく描き上げ、将来におけるその回復を約束してみても、それで間接性という運命がわれわれから離れ去るということはない。」(58行め)の部分も参考になるでしょう。つまり、「現代の条件の下」では、間接性という運命によって、人間と自然との直接的な融合や結合は不可能であるのです。人間が道具も機械もない原始時代に戻ることはできないのですから。

次に、文章構成と要旨を考えましょう。

17 本文は、形式的に三つの段落に分かれています。内容のうえから四つに分けるとすれば、もう一か所、どこでくぎることができませんか。くぎる個所の直前の五文字を書き抜きなさい。(句読点は含まない。)

〔 〕

—— 答え合わせをしましょう。

18 前問で分けた段落ごとに、次の指示にしたがって、段落の要点を整理しなさい。

(1) 第一段落(1～11行め) 中から、この段落の要点となる文の初めの五文字を書きなさい。(句読点を含む。)

〔 〕

(2) 第二段落(11～26行め) の要点を左のようにまとめました。本文中から適切な語句を選んで、〔 〕に書き入れなさい。

〔 〕の製作及び使用によって、〔 〕は他の動物よりも  
〔 〕自然と結びつき、〔 〕が〔 〕に発展し、  
〔 〕そのものの発展につれて、両者の結びつきはますます  
〔 〕に深まっていく。

(3) 第三段落(27～43行め) の要点を左のようにまとめました。本文中から適切な語句を選んで、〔 〕に書き入れなさい。

〔 〕は人間と自然との間に〔 〕、人間を自然から切り離すものであり、〔 〕が〔 〕に発展し、  
〔 〕は両者をますます〔 〕しまう。

(4) 第四段落(44～60行め) の要点を左のようにまとめました。本文中から適切な語句を選んで、〔 〕に書き入れなさい。

自然との接触における〔 〕とそれに堪<sup>た</sup>えることは、  
道具・機械を用いる人間の〔 〕である。自然主義もヒューマニズムも、人間と自然との〔 〕な融合を夢見ているのであれば、現代の〔 〕の時代において、いずれも人間を支えていく力は持ち得ないであろう。

—— 第一段落で、人間と他の動物では、自然に関係する方法が異なることをい  
い、第二・第三段落で、その異なる点を説明しています。そして、第三段落で述べた間接性というものは人間の運命であり、この運命を忘れたような主義・主張は、人間を支えていく力は持ちえないことを第四段落で述べています。文章の構成は以上ようになっています。

19 この文章の表題として、最も適当と思うものを選びなさい。

- (1) 自然尊重の意義 (2) 機械文明の必然性





## 確認テスト

今月の現代文では、詩、論理的文章、漢字・語句の学習をしました。論理的文章では、「指示する語句」「接続する語句」「文や語句の接続関係」「係り受け」について重点的に学習しましたね。きょうは、確認テストをして、それらがあなたの実力としてどのくらい身についたか試してみましよう。取り上げるテキストは、詩とその解説文です。

- 答え合わせをするときは、解説や採点をよく読んで確かめなさい。

- 始める時刻を確かめて、さあ、スタートです。

時 間
50分
得 点
100

解答は巻末にあります

- ① 次にあげるのは中原中也の詩と丸山薫の解説です。よく読んで、後の問いに答えなさい。
- 〔実践女子短大〕

しののめの  
よるの海にて  
汽笛鳴る

心よ  
起きよ  
目を覚ませ

しののめの  
よるの海にて

汽笛鳴る

象のめだまの  
汽笛なる

童詩のような愛らしさのなかに、中原流の切なさのこもった詩である。平易に書かれているが、aただ一か所「象のめだまの汽笛」という中原独特の暗喩が光っていて、bそれがこの詩の内容を高めてもいる。前行は「しののめの 夜の海にて」だから、東の白む時刻の海でということになる。A 汽笛という無形のもの象の目玉という有形のものと、あるいはB 覚とC 覚と、といったもいし、DとEと、といったもいい。結びつかない二つのものをイメージによって思い深く連結させているのは、やはりいかにも中原的であるし、実は非常にCその辺になみなみならぬ彼の苦心が

払われているかとも思う。〔F〕、私がこの詩を暗誦するまでになつたのは、いま述べたような暗喩的技法のおもしろさや、修辭の平明さばかりのせいではない。明け方の海に鳴る遠い汽笛の音にゆめうつつの中で〔G〕と自分を叱咤し激励している中原中也の、一種可憐な自己規制の調子が心に伝わってくるからである。

● 語句注 (数字は行数を示す)

1 しのめ 明け方。夜明け。

24 叱咤 叱しかること。

(1) 〔B〕・〔C〕・〔D〕・〔E〕に入れるのに、最も適切な語句を次の中から選び、〔 〕に記号で答えなさい。(各4点計16点)

- (ア) 聴 (イ) 線 (ウ) 触 (エ) 臭 (オ) 円  
 (カ) 点 (キ) 視 (ク) 角 (ケ) 味 (コ) 辺

〔 B 〕〔 〕〔 C 〕〔 〕〔 D 〕〔 〕〔 E 〕〔 〕

(2) 〔F〕に入れるのに最も適切な接続詞を次の中から選びなさい。

(4点)

- (ア) だから (イ) つまり (ウ) そして (エ) だが

(3) 〔G〕には、本文の詩の、ある一連が入ります。その連をそのまま書き抜きなさい。

(5点)

(4) 〔A〕に入れるのに最も適切な文を次の中から選びなさい。

(15点)

(ア) その澄み切った海のはるかかなたから聞こえる汽笛の音を、汚れない象の目のイメージと重ねたところは、なかなかおもしろい。

(イ) その薄明の海の厳肅さと遠くから聞こえる汽笛の音を、何物にも動じない象の巨体と細い目のイメージと重ねた表現は、なかなかおもしろい。

(ウ) その明け方の波一つない穏やかな海から聞こえてくる汽笛の音を、小さく柔和な目をした象のイメージと重ねたところは、なかなかおもしろい。

(エ) その薄明の海と空の遠くで鳴る汽笛の音を、茫漠として灰色をした象の巨体に一点またたく小さな目のイメージと重ねた表現は、なかなかおもしろい。

(オ) その明けきらぬもやのかかった海で鳴る汽笛の音を、芒洋とした巨体に言いしれぬ優しさをただよわせた象の細い目のイメージと重ねた表現は、なかなかおもしろい。

(5) 線 a 「ただ一か所」は、どこに係っていますか。次の中から適切なものを選びなさい。

(5点)

- (ア) 「光っている」に係っている。
- (イ) 「高めてもいる」に係っている。
- (ウ) 「光っている」と「高めてもいる」の両方に係っている。

(6) —線b「それ」が指している内容を、次の「 」に書きなさい。  
(5点)

(7) —線C「その辺に」とありますが、「その」が指示している内容を、前後がうまくつながるように本文中から書き抜きなさい。  
(5点)

(8) 筆者(丸山薫)がこの詩を読んで、「切なさ」(12行め)と感じたのはどのようなことからでしょう。その個所を解説の部分から選んで、十字前後で書き抜きなさい。  
(10点)

(9) 次の(ア)~(ウ)の—線部に使われている比喩は、それぞれA直喩、

B暗喩、C擬人法(活喩)のどれにあたりますか。後の「 」に記号で答えなさい。  
(各5点計15点)

- (ア) 風が高い建物に当たって、思う如く真直に抜けられないので、急に稲妻に折れて、頭の上から斜めに敷石迄吹き卸して来る。
- (イ) 荒波のうねりが幾十条となくけものようにおしよせて来ていた。
- (ウ) 海の上の朝日が山の腹を温めていた。

- (ア) 「 」
- (イ) 「 」
- (ウ) 「 」

② 次の—線の漢字の読みを、それぞれ後の「 」に書きなさい。  
(各1点計5点)

- (1) 君は自惚が強すぎる。
- (2) この任務の遂行には危険が伴う。
- (3) 彼の趣味は、切手の蒐集である。
- (4) 女は身を投げ出して慟哭した。
- (5) この作家は市井の庶民を好んで描く。

- (1) 「 」 (2) 「 」 (3) 「 」
- (4) 「 」 (5) 「 」

③ 次の—線のことを、後の「 」にそれぞれ漢字で書きなさい。  
(各1点計12点)

(各1点計12点)

- (1) 彼の芸術は、時代精神のたんできな表現となっている。
- (2) 世界人口がこのまま増加すると、食糧・資源のこかつを招く。
- (3) 学術探検隊は今回の調査で大きなしゅうかくを得た。
- (4) この作品は、文芸評論の世界に未知の分野をかいたくした。
- (5) 父は自動車事故によって一時的に記憶をそうしつした。
- (6) 小説を読み進むにつれて、主人公のりんかくがはつきりしてきた。
- (7) 会議はしだいに議題をいつだつした方向へと進んだ。
- (8) きちの事実から、今後の展開を予想する。
- (9) その出会いが彼の一生を決めたといつてもかごんではない。
- (10) 首相はこのたびの所信表明演説で、政策の転換をしさした。
- (11) 私は、「七転八起」ということばをざゆうの銘としている。
- (12) 大衆へのむやみなげいごうは、芸術の墮落につながる。

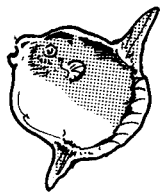
- (1) ( ) (2) ( ) (3) ( ) (4) ( )
- (5) ( ) (6) ( ) (7) ( ) (8) ( )
- (9) ( ) (10) ( ) (11) ( ) (12) ( )

④ 手紙の用語について、次の各説明にあてはまるものを選び、それぞれ「 」に書き入れなさい。  
(各1点計3点)

- (1) 略式または急ぎの手紙で、文面の末尾に添える語。
- (2) 封筒に記して、名あて人自身の開封を求める語。
- (3) あらたまって書いた手紙で、文面の末尾に添える語。

追伸 ついでしん 侍史 じし 御中 おんちゆう 謹言 きんげん 拝復 はいふく 啓上 けいじよう 親展 しんてん 拝啓 はいけい

- (1) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )



# memo

---

古  
典

---

## 〈更級日記〉東路の道の果てよりも

きょうは、平安時代の後期に成立した「更級日記」の冒頭部分を読んできます。まず、基本的な古語の学習から始めましょう。一つ一つきちんと覚えるようにしましょう。

### ●古語の意味を覚えよう●

▽古語や文語文を音読しながら、「」に古語の意味を書き込んでいきましょう。

① あやし【怪し・賤し】(形シク) いなかびている。変だ。おかしい。

例いかばかりかはあやしかりけむを、

(更級日記)

訳どんなにか「」だらうのに、

▼「あやし」は、普通でない、わけがわからないというような感じを言う語で、「怪し」や「賤し」などの漢字をあてる。後者は、「卑しい、そまつだ」という意。ここでは、文脈から考えて、「いなかびている」と考えておく。

② ゆかしさ(名) 興味。

例いとどゆかしささまされど、

(更級日記)

訳いよいよ「」を深く持ったが、

▼口語訳をするときには、何への興味であるかを補うようにする。

③ こころもとなし【心もとなし】(形ク) もどかしい。

例いみじく心もとなきままに、

(更級日記)

訳たいへん「」ままに、

④ みそかなり(形動ナリ) ひそかに。こっそり。

⑤ こほちちらす【こほち散らす】(動四) めちやくちやに壊す。

例あらはにこほちちらして、

(更級日記)

訳中がまる見えになるほどに「」て、

⑥ すごし【凄し】(形ク) いかにも寂しい。

例いとすごく霧りわたりたるに、

(更級日記)

訳いかに「」辺り一面に霧が立ちこめているときに、

▼「すごし」は、見たり聞いたりして、ぞつとして寒けを感じるようなときに使われる。「いかにも寂しい」のほかに、「恐ろしい、ぞつとするほどすばらしい」などの意味がある。



1 次の古語を音読しながら、その意味を後から選んで書きなさい。

- (1) あやし ( )  
 (2) ゆかしさ ( )  
 (3) こころもとなし ( )  
 (4) みそかなり ( )  
 (5) こほちちらす ( )  
 (6) すごし ( )

・めちやくちやに壊す。 ・興味。 ・いかにも寂しい。 ・変だ。 ・もどかしい。 ・ひそかに。

2 太字の語に注意しながら、次の(1)～(6)の口語訳を完成させなさい。

(1) 珍しき禽、あやしき獣、国に育はず。 (徒然草・二二段)

訳 珍しい禽、( ) 獣は国で育わない。

(2) ゆかしさまさりて、いつしかと思ふ。 (枕草子・一〇四段)

訳 ( ) を深く持って、早く(見たい)と思う。

(3) 八月二十余日、宵過ぐるまで待たるる月の心もとなきに、 (源氏物語・末摘花)

訳 八月二十日過ぎ、夜を過ぎるまで待ち遠しく思われる月が(なかなか出ない)ので( ) ( ) して、

(4) みそかなる所なれば、門よりもえ入らで、 (伊勢物語・五段)

訳 ( ) 所なので、門からも入ることができなくて、

(5) 屋をこほちちらして、怖ろしげにしなしたるを見るに、 (成尋阿闍梨母集)

訳 家を( ) ( ) して、不気味な状態にしてあるのを見ると、

(6) ものあはれにすこく思ひめぐらし、しをれ給ふ。 (源氏物語・紅梅)

訳 しみじみと( ) ( ) 思ひめぐらして、悲しんでいらつしやる。

基本古語の意味は、しっかりと覚えておきましょう。次に、きょう取り上げる作品「更級日記」についての説明を示しておきます。よく読んでおきましょう。

◆「更級日記」

「更級日記」は、菅原孝標女が一〇五八年(康平元)から一〇六〇年(康平三)までのころに書いた、回想の日記である。内容は、十三歳の一〇二〇年(寛仁四)九月、父の任国上総の国(現在の千葉県)から上京した旅に筆をおこし、夫、橘俊通と死別した翌年一〇五九年までの四十年間の物語である。作者は、若き日、「源氏物語」以下多くの物語に対して心酔したが、やがて冷厳な現実が目ざめさせられて、それらの物語に不信の念を抱くようになり、信仰生活に傾いていく。日記中、夢の話が合計十一も語られ、作品に幻想的な色調を添えているが、その夢をきっかけにして作者は、物語への耽溺を反省し、信仰を志すのである。作者は、四年間、祐子内親王家に仕えていたが、この日記はいわゆる宮廷女流日記とは少し趣が異なる。



1 あつち  
東路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひ始めけることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、所々語るを聞くに、いとどゆかしきまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。2 いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとくあげ給ひて、物語の多く候ふなる、ある限り見せ給へ。」と、身を捨てて額をつき、祈り申すほどに、十三になる年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所に移る。

5 年ごろ遊び慣れつる所を、あらはにこぼちちらして、たち騒ぎて、日の入りぎはの、いとすぐく霧りわたりたるに、車に乗るとて、うち見やりたれば、人まには参りつつ、額をつきし薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。

語釈

上の数字は文番号を示す

1 東路の道の果て＝都から東国へ行く道の終わりにある常陸の国（現在の茨城県）を指す。

1 なほ奥つ方＝もっと奥の方。作者の父菅原孝標の任地の上総の国（現在の千葉県中部）を指すが、辺境であることを誇張して言ったもの。

1 生ひ出でたる人＝成長した人。作者自身のこと。

1 いかばかりかはあやしかりけむを＝どんなにかいなかびていたであろうのに。

「あやし」には、「不思議だ、珍しい、卑しい、そまつだ」などの意味があるが、

ここでは前文から考えて、「いなかびている」の意。

1 あんなる＝あるという。「あんなる」は「あるなる」の撥音便で、「なる」は推定・伝聞の助動詞「なり」の連体形。「トイウ、ト聞ク」の意。

1 いかで見ばや＝何とみて見たい。「ばや」は、希望の終助詞。「タイ」の意。1 つれづれなる＝することもなく退屈な。形容動詞「つれづれなり」の連体形。

1 宵居＝夜おそくまで起きていること。

1 継母＝高階成行の娘。上総大輔と呼ばれた。実母は京都に残っていた。

1 光源氏のあるやう＝「源氏物語」の主人公。光源氏の様子。

1 いとど＝いよいよ。

1 ゆかしき＝（物語への）興味。「ゆかし」とは、心がそのほうへひかれてゆくこと。

1 いかでか＝ここでは「どうして」と反語の意を表す副詞。

2 いみじく心もとなき＝たいへんもどかしい。「枕草子・一六〇段」に「心もとなきもの」という段がある。

2 等身に＝人の身長と同じ高さに。等身大に。おもに仏像について用いる。

2 薬師仏＝薬師如来像。薬師如来は人間の病苦を救い、願いごとをかなえると言われる仏。

2 人ま＝人の見ていないとき。

2 みそかに＝ひそかに。こっそり。

3 物語の多く候ふなる＝物語がたくさんございますそうですが、「の」は主語を表す格助詞。「候ふ」は「有り」の丁寧語で、「ございます、あります」などの意。「なる」は、推定・伝聞の助動詞「なり」の連体形。「トイウ、ト聞ク」の意。

意。

4 身を捨てて額をつき＝五体を投げうち、額を床について礼拝し。

4 十三になる年＝「なる」は、ラ行四段活用動詞「なる」の連体形。

4 九月三日＝一〇二〇年（寛仁四）九月。

4 門出して＝「門出」とは、旅などに出発すること。出発する日や行く方向が凶であった場合、吉日を選んで仮に他所に移り、それで出発したことになった。当時の習慣だった。

4 いまたち＝地名か。

5 あらはに＝（家の）中が（外から）まる見えになるほどに。

5 こぼちちらして＝めちやくちやに壊して。「こぼつ」の「ぼ」は、古くは清音であった。後年、「こぼつ」になった。

5 日の入りぎはの＝日がまさに沈もうとしてるときで。後の「の」は同格を表す

格助詞。「すこし」の意。

5 すこくゝいかにも寂しげに。「すこし」には、「いかにも寂しい」の他に、「恐ろしい、身にしみるくらいすばらしい」の意味がある。

5 霧りわたりたるに〓辺り一面に霧が立ちこめておるときに。「霧り」は、ラ行四段活用の動詞「霧る」の連用形。「わたる」は、その動作・状態が時間的に、または空間的に続くことを表す補助動詞。ここでは一語とみる。「たる」は完了の助動詞「たり」の連体形で存続を表す。「くテイル、テアル」の意。「に」は時を表す格助詞。

5 うち見やりたれば〓そつと目を向けると。「うち」は、動詞について、す早い動作、ちよつとしたなげない動作などを表したり、語の調子を整えたりする接頭語。「たれ」は完了の助動詞「たり」の已然形。

5 見捨て奉る〓後にお残し申し上げ(て上京す)ることが。

5 うち泣かれぬ〓自然に泣けてきた。「れ」は、自発の助動詞「る」の連用形。「ぬ」は完了の助動詞。

次のトレーニングに進みましょう。

なお、以下の設問中、引用文の( )内の数字は、テキストの文番号を示しています。

### トレーニング

解答は巻末にあります

**3** 「きょうのテキスト」を、一回、ゆっくりと音読しなさい。

古文は、まず読みなれることが大切です。恥ずかしがらずに声を出して読みましょう。

**4** 次の語のテキストでの読みを、現代かなづかいで書きなさい。

- (1) 東路 ( )
- (2) 宵居 ( )
- (3) 候ふ ( )
- (4) 九月 ( )

(5) 参り ( )

**5** もう一回、ゆっくりと音読しなさい。

**6** 次の語句のテキストでの意味を書きなさい。

- (1) いとど ( )
- (2) ゆかしさ ( )
- (3) いみじ ( )
- (4) 心もとなし ( )
- (5) すごし ( )

**7** 次の(1)~(5)の——線部を語釈を参考にしながら口語訳しなさい。

(1) いかばかりかはあやしかりけむを、 (1)

(2) 世の中に物語といふもののあんなるを、 いかに見ばやと思ひつつ、  
つれづれなる昼間、宵居などに、 (1)

(3) いみじく心もとなきままに、 等身に薬師仏を造りて、 (2)

(4) 手洗ひなどして、 人まにみそかに入りつつ、 (2)

(5) 日の入りぎはの、いとすごく霧りわたりたるに、(5)

答え合わせをしたら、次の通釈を読んでみましょう。

### 通釈

都から東国へ行く道の終わり(にある常陸の国)よりも、もつと奥の方(の上総の国)で生まれ育った私は、どんなにかいなかびていたであろうのに、どうして思いそめたことであるか、この世には物語というものがあるというが、(それを)なんとかして見たいと思ひ、することもなく退屈な昼間や、夜おそくまで起きているときなどに、姉や継母などの大人たちが、あの物語、この物語、「源氏物語」に書かれた(光源氏の様子などを、とどころ話すのを聞いてみると、いよいよ(物語への)興味を深く持つが、私の心ゆくまで、どうして覚えていて話してくれたりしようか(話してはくれない)。たいへんもどかしいままに、等身大に薬師如来像を造ってもらい、手を洗いきよめたりして、人の見ていないときひそかに(仏間に)こもっては、「京に早く上らせて下さいまして、(都には)物語がたくさんございますうですが、(それを)ありったけお見せください。」と、五体を投げうち額を床について、お祈り申し上げているうちに、十三になる年、上京しようということとなって、九月三日門出(かどで)して、いまたちという所に移る。

長年遊びなじんできた(わが)家を、(家の)中が(外から)まる見えになるほどにめちやくちやに壊して、(人々は荷造りに)大わらわであるが、日がまさに沈もうとしているときで、いかにも寂しげに辺り一面に霧が立ちこめているときに、車に乗ろうとして、(わが家の方に)そつと目を向けると、人の見ていないとき(ひそかに)お参りしては、額を床について礼拝した薬師如来像が立っておいでになるのを、後にお残し申し上げ(て上京す)ることが悲しくて、(私は)人知れず泣かれずにはいられなかった。

書かれている内容はしっかりつかめましたか。次は、トレーニングです。

### トレーニング

解答は巻末にあります

8 次の——線部の「なる」は、(ア)推定・伝聞の助動詞 (イ)動詞 (ウ)ナリ活用の形容動詞の活用語尾の、どれにあたりますか。記号で答えなさい。

- (1) 物語といふもののがあんなるを、(1)〔 〕
- (2) つれづれなる昼間、宵居などに、(1)〔 〕
- (3) 物語の多く候ふなる、(3)〔 〕
- (4) 十三になる年、(4)〔 〕

「なり」という助動詞は、推定・伝聞のほかに、断定の意味もあります。

9 次の、——線部の敬語の意味を後から選んで書きなさい。

- (1) 京にとくあげ給ひて (3)〔 〕
- (2) 物語の多く候ふなる (3)〔 〕
- (3) 身を捨てて額をつき、祈り申すほどに (4)〔 〕
- (4) 見捨て奉る悲しくて (5)〔 〕

尊敬 謙讓 丁寧

10 次の——線部の「の」のうち、例文の「の」と同じ用法のものを選

びなさい。

例 世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

〔古今集・春上〕

世の中に桜というものがまったくなくしたら、春の人の心は本当にのどかでいられるのに。

(ア) 東路の道の果てより (1)

(イ) 姉、継母などやうの人々の (1)

(ウ) 物語の多く候ふなる (3)

格助詞の「の」は主語を示す場合と、連体修飾語を示す場合があります。

その他、同格を示す場合もあります。

11 テキストの中から、同格の「の」を使っている部分を抜き出さない。

い。

12 準体用法の用例をテキストの中から抜き出さない。

▼準体用法とは、用言の連体形が体言として用いられる用法をいう。

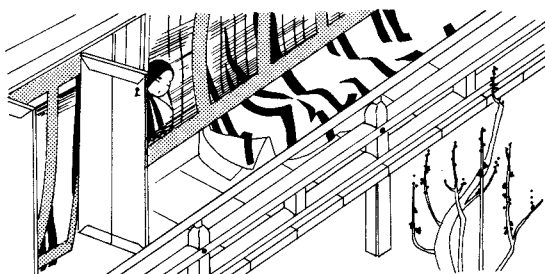
例 色こく咲きたる、いとめでたし。

色が濃く咲いているのが、たいへんすばらしい。

〔枕草子・三七段〕

下に「こと」を補って通じるところを探します。

答え合わせをして、「こくこア・ラ・カルト」を読みましょう。



◆こくこア・ラ・カルト／散逸物語について◆

中古の物語で現存するものは、わずかに十数種にすぎないが、このほか現在名のみ伝えられて、その本文が失われてしまった散逸物語は多数あった。「三宝絵詞」の序文に、当時「大荒木の森の草よりも繁く、有磯海の浜の真砂よりも多」くの物語があったという。そして、今は残らない「土佐のおとど」「今めきの中将」「ながるの侍従」などを、男女の恋を語る物語として掲げている。「枕草子・二二二段」の「物語は」にも、清少納言が目にした物語名の一部が列挙されているが、「住吉」「殿うつり」「月待つ女」「交野の少将」などの物語があったらしい。散逸物語の作者の多くは不明であるが、現存する物語と同じく女性が密接な関係を持っていて、その内容も現存する物語とだいたい同じ傾向にあったようである。

ずいぶんたくさんさんの物語がなくなってしまったのですね。今は読めなくて残念ですね。

トレーニング

解答は巻末にあります

13 作者は、物語というものがあるのを聞いてどのように思っていましたか。

14 「そらにいかでかおぼえ語らむ」(1)はだれの動作ですか。テキスト中の語句で答えなさい。

15 「いみじく心もとなきままに」(2)とありますが、何に対してどのように思うのですか。

16 作者は、物語を見たいと願うあまり、どのようなことをしましたか。テキストからその行動を記した部分の始めと終わりの四字を抜き出しなさい。

始め 「 」 終わり 「 」

17 作者たち一行が出発したのは、何月何日ですか。また、(ア)朝 (イ)昼 (ウ)夕方 (エ)夜の、どの時刻でしたか。

月日 「 」 時刻 「 」

—— きょうの最後のトレーニングですよ。文学史的なことから確認しましょう。

18 「更級日記」の作者名と成立時代を書きなさい。

作者名 「 」 成立時代 「 」

19 平安時代に成立した女流日記文学を「更級日記」以外に三つ書きなさい。

「 」 「 」 「 」

—— ご苦労さまでした。答え合わせをして、終わりにしましょう。

# 〈更級日記〉かくのみ思ひくんじたるを

きょうは、「更級日記」の続きです。物語にあこがれていた少女は、やつのことで物語を手に入れます。作者の気持ちになって読んでいきましょう。まずは、いつものとおり、基本的な古語の学習です。

## ●古語の意味を覚えよう●

▽古語や文語文を音読しながら、「」に古語の意味を書き込んでいきましょう。

① こころぐるし【心苦し】(形シク)心配だ。気がかりだ。

例 かくのみ思ひくんじたるを、心も慰めむと、心苦しがりて、  
〔更級日記〕

〔このように(私が)ふさぎこんでいるので、(母は私の)心を慰めてあげようと、〕て、

② おほゆ【覚ゆ】(動下二)思われる。感じる。

例 紫のゆかりを見て、続きの見まほしくおほゆれど、  
〔更級日記〕

〔紫のゆかり(若紫の巻など)を見て、その続きが見たく〕

▼「おもほゆ」から変化したもの。「ゆ」は、平安時代以前に用いられた自発・受身・可能の助動詞。だから、「ゆ」が自発の意なら「思われる」、受身の意なら「(他人から)思われる」、可能の意なら「思い出せる」の意味を表す。

③ こもる【籠る】(動四)神社や寺などに祈願のために泊まりこむ。参籠する。

例 親の大素にこもり給へるにも、  
〔更級日記〕

〔親が大素寺に御〕

④ くちをし【口惜し】(形シク)残念だ。

例 いと口惜しく思ひ嘆かるるに、  
〔更級日記〕

⑤ うつくし【美し】(形シク)かわいい。愛らしい。

例 とうつくしう、生ひなりにけり。  
〔更級日記〕

〔現代語の「美しい」とは異なるから注意する。〕成長しましたね。

⑥ たてまつる【奉る】(動四)差し上げる。

例 何をか奉らむ。  
〔更級日記〕

〔何をか奉らむ。〕ましようか。  
謙譲語。身分が下の者から上の者へ、差し上げるの意である。



1 次の古語を音読しながら、その意味を後から選んで書きなさい。

- (1) こころぐるし ( )  
 (2) おぼゆ ( )  
 (3) こもる ( )  
 (4) くちをし ( )  
 (5) うつくし ( )  
 (6) たてまつる ( )

・参籠する。 ・かわいい。 ・差し上げる。 ・気がかりだ。  
 ・残念だ。 ・思われる。

2 太字の語に注意しながら、次の(1)～(6)の口語訳を完成させなさい。

- (1) 参りてはいとど心苦(こころ)しう、心肝(こころ)も尽くるやうになむ。 (源氏物語・桐壺)

訳 おうかがいしてみますとたいそう「 」様子で、魂も消え失せて  
 しまいそうです。

- (2) つれづれに心細うのみおぼゆるを、 (源氏物語・未摘花)

訳 所在(そこ)なくただ心細くばかり「 」ので、

- (3) 大將殿は、入道の宮の悩み給ひければ、石山にこもり給ひて、 (源氏物語・蜻蛉)

訳 (薰) 大將殿は、(母の) 入道の宮が御病氣なので、(病氣平癒を祈願して)  
 石山寺に御「 」なさって、

- (4) 夕影なれば、さやかならず奥暗き心地するも、いと飽かず口惜し。

(源氏物語・若紫上)

訳 夕方の光なので、はつきりせず奥の暗くなっているようなもの、じつにはが

ゆく「 」。

- (5) うちかたぶきて物など見たるも、うつくし。 (枕草子・一五一段)

訳 (子供が) 首をかしげて何かを見ているのも、「 」。

- (6) 中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに、 (枕草子・一〇二段)

訳 中納言が(中宮の御座所に) 参上なさって、御扇を「 」なさる  
 ときに、

基本的な古語は、しっかり覚えておくことが大切です。

◆菅原孝標女

上総の地に過ごした少女時代に筆を起こし、それから四十年、人に訪ねられぬ老  
 残の身を嘆くに至る生涯をつづつた回想の手記。「更級日記」の作者は、菅原  
 孝標女である。

作者の父孝標は、菅原道真の五世の嫡孫であり、母は藤原倫寧女で、「蜻蛉日記」  
 の作者右大將道綱母の異母妹にあたる。孝標女の文学的資質は、これらの人々の血  
 を受け継いだものであろう。

鎌倉時代の歌人藤原定家が書写した「更級日記」の奥書(書写本の末尾にあり、  
 書写した人の名前や書写した事情・日付、また、その本の由来などについて書いた  
 もの。)を見ると、

「……よはのねさめ(夜半の寢覚)」「夜の寢覚」、みつのはままつ(「御津の浜松」  
 つまり「浜松中納言物語」)、みつからくゆる(散逸)、あさくら(散逸)などは、こ  
 の日記の人の作られたとぞ。」

とあり、孝標女は「夜の寢覚」や「浜松中納言物語」の作者ともされているのであ  
 る。文末は「とぞ」となっており、定家はこれが伝承であることを述べているが(現  
 在でも、これらの作品の作者ははつきりしていない)、物語好きの作者が自ら物語を  
 創作したであろうことは、十分に考えられるのではなからうか。

1 かくのみ思ひくんじたるを、心も慰めむと、心苦しがりて、母、物語など求めて見せ給ふに、げにおのづから慰みゆく。2 紫のゆかりを見て、続きの見まほしくおぼゆれど、人語らひなどもえせず。3 たれもいまだ都慣れぬほどにて、え見つけず。4 いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるままに、5 この、源氏の物語、一の巻よりしてみな見せ給へ。6 と心のうちに祈る。7 親の太秦にこもり給へるにも、異事なくこのことを申して、出でむままにこの物語見果てむと思へど、見えず。8 いと口惜しく思ひ嘆かるるに、をばなる人の田舎より上りたる所に渡いたれば、9 「いとうつくしう、生ひなりにけり。10 など、あはれがり、珍しがりて、帰るに、11 「何をか奉らむ。12 まめまめしきものは、まさかなりなむ。13 ゆかしくし給ふなるものを奉らむ。14」とて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将、とほごみ、せり河、しさら、あさうづなどいふ物語ども、一袋取り入れて、得て帰る心地のうれしさぞいみじきや。

語釈

上の数字は文番号を示す

1 かくのみ思ひくんじたるを||このように(私が)ふさぎこんでいるので。「かく」は、この文章の前にするされている、上総へとも下つていた継母が離婚して去つたり、乳母が死んだり、作者が持っていた習字の手本の筆者である侍従大納言藤原行成の娘がなくなつたり、悲しいことが重なつてふさぎこんでいた、という記事を受ける。「思ひくんず」は、ふさぎこむという意味で、「くんず」は、「屈す」と同じである。「たる」は完了の助動詞「たり」の連体形で存続を表す。「くテイル、テアル」の意。「を」は接続助詞、「ので」と訳す。1 心も慰めむと|| (私の)心を慰めてあげようと。主語は、母。「心苦しがりて」にかかる。「む」は推量の助動詞で意志を表す。「くウ、ヨウ」の意。

1 心苦しがりて||心配して。気がかりに思つて。主語は、母。  
1 げに||なるほど。確かに。

2 紫のゆかり||「源氏物語」には、紫の上のことを「紫のゆかり」と呼んでいるところが数か所ある。「ゆかり」とは、「縁あるもの」という意味で、紫の上は藤壺(藤の花は紫色)の姫にあたるため、「紫のゆかり」と呼ばれたのである。ここでは、転じて、紫の上のことを書いた若紫の巻などを指すと思われる。

2 続きの||続きが。この「の」は、主語を表す格助詞。

2 見まほしく||見たく。「まほしく」は、希望の助動詞「まほし」の連用形。

2 人語らひ||相談。人に依頼すること。この場合の相談の内容は、「紫のゆかり」(若紫の巻など)の続きの所在(だれが持っているのか)などについてであろう。

2 えせず|| (相談)することもできない。「え」は、打消を表す語(この場合は、打消の助動詞「ず」)を伴い、全体で「くできない」という意味を表す。「せ」は、サ行変格活用の動詞「す」の未然形。

3 ほど||ころ。時分。

3 え見つけず|| (若紫の巻などの続きを)見つけることもできない。前文の「人語らひなどもえせず」に続いて、適当な知人がいなくて相談もできないから、みづから「紫のゆかり」(若紫の巻など)の続きを求めようとしますが、上京して間もないため不案内で、それもできないというのである。

4 心もとなく||じれったく。もどかしく。

4 ゆかしくおぼゆるままに||読みたいと思われので。「ゆかし」は、ある対象について、見たい、聞きたい、知りたいなどと感じる気持ちを表す。具体的な意味は、場面場面で読みとる。「ままに」は、「くノデ」の意。他に、「くストスグニ」、「くノトオリニ」、「くニマカセテ」、「くニツレテ」の意味を表す場合もある。

5 一の巻よりして||第一巻から始めて。「し」は、サ行変格活用の動詞「す」の連用形。この場合、第一巻から「する」というのは、第一巻から(見せ)始めて、という意味である。

7 親の||親が。「の」は、主語を表す格助詞。

7 太秦||太秦寺京都市右京区太秦にある広隆寺のこと。

7 こもり給へるにも||おこもりなされたときにも。「こもり給へる(とき)にも」と、補つて考える。作者もいつしよに参籠するのである。

7 異事なく||ほかのことは差し置いて。

7 このこと||「この、源氏の物語、一の巻よりしてみな見せ給へ。」を指す。

7 出でむままに|| (参籠を終えて寺から)出るとすぐに。「ままに」は、「くストス



スグニ」の意。

7 見果てむ 最後まで読もう。「む」は、推量の助動詞で意志を表す。

7 見えず 見ることができない。「見え」は、マ行下二段活用助動詞「見ゆ」の未然形。「見ゆ」は、「見ることが出来る」の意味で、他に、「目にうつる、見せる」などの意味を表す。

8 口惜しく 残念で、もの足りなくて。

8 思ひ嘆かるるに 自然とため息がちになつているときに。「思ひ嘆く」は、「嘆息する」という意味。「るる」は、自発助動詞「る」の連体形。「自然トクレル」、「ツイレル」の意。ここは、物語を読みたいあまりにじれったくなくて、ため息ばかりついている様子を表す。

8 をばなる人の 叔母である人が。「なる」は、断定の助動詞「なり」の連体形。「の」は、主語を表す格助詞。

8 渡いたれば 行ったところ。「渡い」は、「渡り」のイ音便。「渡る」は、「行く」という意味。なお、「渡し」の音便形とみて、「親が私を」行かせたところ」と解釈する説もある。

9 うつくしう かわいらしく。「うつくしう」は、「うつくしく」のウ音便。「うつくし」は、現代語の「美しい」にはあたらず、「かわいらしい」という意味で用いられる場合が、平安時代では大半を占める。「枕草子・一五一段」の「うつくしきもの」を読むと、あどけない幼児のしぐさやすずめの子などが取り上げられており、語の感じがよくわかる。

9 生ひなりにけり 成長しましたね。「に」は完了助動詞「ぬ」の連用形。「けり」は過去の助動詞で詠嘆を表す。

10 あはれがり なつかしがり。いとおしがり。

11 何をか奉らむ 何を差し上げましょうか。「か……む」は、係り結び。係助詞「か」は疑問を表す。「む」は推量の助動詞「む」の連体形で意志を表す。

12 ままめしきもの 実用的なもの。日常使うもの。

12 まさなかりなむ きつとつまらないでしょう。「まさなし」は、予想や予期に反した悪い状態をいい、「見苦しい、よくない」などの意。「なむ」は、完了助動詞「ぬ」の未然形に推量の助動詞「む」がついたもので、「キツトダロウ」の意。

13 ゆかしくし給ふなるもの (あなたが) 心ひかれていらつしやるといふもの。「なる」は、推定・伝聞の助動詞「なり」の連体形で、人から伝え聞いたことを表す。

14 櫃 上にふたをするように作った木箱。大きさ、用途ともに種々ある。

14 入りながら 入ったまま。「一袋取り入れて」にかかる。「ながら」は、二つの動作・作用が並行して行われることを表す接続助詞。

14 在中将 在中将の物語。「在五中将日記」の別称がある「伊勢物語」のことであろう。在五中将とは、在原氏の第五子で中将である人という意味。「伊勢物語」の主人公、在原業平を指す。

14 とほぎみ、せり河、しらら、あさうづ いずれも当時読まれた物語の名と思われるが、今は、散逸して伝わらない。

14 一袋取り入れて (叔母は) 一袋に (いっしょに) 取り入れて (くれて)。主語は叔母。なお、主語を作者自身とする説もある。

14 うれしさぞいみじきや うれしさといったら、(それはそれは) たいへんなものだよ。「ぞ……いみじき」は、係り結び。「いみじ」は、程度のはなはだしいことをいうのがもとで、うれしい場合にも、悲しい場合にも、ものごとのすばらしい場合にも、かわいそうな場合にも用いられるから、具体的な意味は場面場面で読みとる。「や」は、感動を表す間投助詞。

語釈と対照させながら、本文を読みましよう。次は、トレニングです。なお、以下の設問中、引用文の ( ) 内の数字は、テキストの文番号を示しています。

### トレニング

解答は巻末にあります

3 「きょうのテキスト」を、一回、ゆっくりと音読しなさい。

古文は、まず読みなれることが大切です。恥ずかしがらずに声を出して読みましよう。

4 次の語のテキストでの読みを、現代かなづかいで書きなさい。

(1) 人語らひ ( )

- (2) 大秦〔 〕 (3) 口惜し〔 〕  
 (4) 田舎〔 〕  
 (5) うつくしう〔 〕

5 もう一回、ゆっくりと音読しなさい。

6 次の語句のテキストでの意味を書きなさい。

- (1) 思ひくんず〔 〕  
 (2) 心もとなし〔 〕  
 (3) あはれがる〔 〕  
 (4) まめまめし〔 〕  
 (5) まさなし〔 〕

7 次の(1)～(5)の——線部を語釈を参考にしながら口語訳しなさい。

- (1) 母、物語など求めて見せ給ふに、げにおのづから慰みゆく。(1)  
 (2) たれもいまだ都慣れぬほどにて、え見つけず。(3)  
 (3) 親の太秦にこもり給へるにも、異事なくこのことを申して。(7)  
 (4) いとうつくしう、生ひなりにけり。(9)

- (5) 何をか奉らむ。まめまめしきものは、まさなかりなむ。ゆかしく  
 給ふなるものを奉らむ。(11～13)

—— 通釈を読んで、書かれている内容を確認しましょう。

### 通釈

このように(私が)ふさぎこんでいるので、心を慰めてあげようと、心配して、母は、物語などを探し求めて見せてくださるので(読んでみると)、なるほど(ふさいでいた気持ちは)自然と慰んでゆく。「源氏物語」の(中の)若紫の巻などを見て、その続きが見たく思われるけれど、(人に)相談することなどもできない。(家の者も)だれもまだ都に慣れていないころなので、(若紫の巻の続きなどを)見つけることもできない。ひどくじれったく、読みたいと思われているので、「この源氏の物語を、第一巻から始めて全部お見せくださいませ。」と心のなかで祈っている。親が太秦寺にお籠りなされたときにも(私もいっしょに参籠し)、ほかのことは差し置いてこのことばかりを(仏様にお願ひ)申し上げて、(参籠を終えて寺から)出るとすぐにこの物語を最後まで読もうと思うけれど、見ることができない。たいそう残念で自然とため息がちになっているときに、(ある日)叔母である人が地方より上京してきていた所に行つたところ、「たいそうかわいらしく、成長しましたね。」などと、なつかしがり、珍しがって、(私が)帰るときに、「何を差し上げましょうか。実用的なものでは、きつとつまらないでしょう。(あなたが)心ひかれていらつしやるというものを差し上げましょう。」と言って、「源氏物語」五十余巻を、櫃に入つたまま、(そのほかに)「在中将」、「とほぎみ」、「せり河」、「しらら」、「あさうづ」などという数々の物語を、(叔母は)一袋に(いっしょに)取り入れて(くれて)、(それを)もらつて帰る気持ちのうれしさといつたら(それはそれは)たいへんなものだよ。

物語を手に入れて大喜びの作者の様子が伝わってきますね。

### トレーニング

解答は巻末にあります

3 次の——線部 a ~ c の主語を、後の (ア) ~ (エ) から選んで記号で答えなさい。

かくのみ a 思ひくんじたるを、b 心も慰めむと、c 心苦しがりて、母物語など求めて見せ給ふに、

a 「 」「 b 「 」「 c 「 」「

(ア) 作者 (イ) 作者の母 (ウ) 作者の「をば」 (エ) 都の人々

9 「異事なくこのことを申して、」(7)とありますが、「このこと」は何を指しますか。テキストの中の語句で答えなさい。

作者の強い願いの気持ちが述べられているところです。

10 テキストには係り結びが用いられている所があります。その係助詞と結びの語を抜き出し、また何を強めているのか説明しなさい。

▼係り結び=文中に係助詞「ぞ・なむ・か・や」が用いられている時、文末を連体形、「こそ」が用いられている時、文末を已然形で結ぶきまり。「ぞ・なむ・こそ」は強意を示す係助詞。「や・か」は疑問・反語を示す係助詞。

例 風の音にぞ驚かれぬる。

風の音を聞いて(はじめて、秋だなあと)自然に感じられたことだ。

(古今集・秋上)

係助詞「 」「 」「 」「 」「 」「  
結び「 」「 」「  
強めていること

11 次の——線部の「なむ」のうち、例文の「なむ」と同じ用法のものを選びなさい。

例 まめまめしきものは、まさなかりなむ。(12)

(ア) いつしか梅咲かなむ。(更級日記)

(イ) 髪もいみじく長くなりなむ。(更級日記)

(ウ) かかることなむありし。(更級日記)

「なむ」には、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に、推量の助動詞「む」がついたもの、強意を表す係助詞の「なむ」、あつらえ望む意を表す終助詞の「なむ」の三つがあります。

12 次の——線部の「ままに」が表している意味を、後の (ア) ~ (オ) から一つずつ選んで記号で答えなさい。

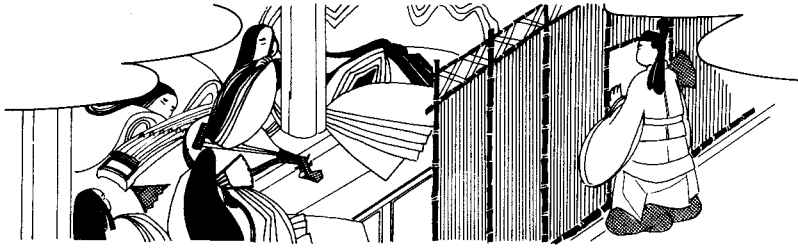
(1) 「ゆかしくおぼゆるままに」(4) 「 」「

(2) 「出でむままにこの物語見果てむ」(7) 「 」「

- (ア) くノトオリニ (イ) くノデ (ウ) くニマカセテ  
 (エ) くニツレテ (オ) くスルトスグニ

「ままに」は、名詞「まま」に格助詞「に」がついたもので、接続助詞のように用いられます。右にあげた五つの訳し方を、覚えておきましょう。

答え合わせをして、「こくごア・ラ・カルト」を読んでみましょう。



◆こくごア・ラ・カルト／更級日記と源氏物語◆

きょうのテキストの部分には、「一の巻よりして、みな見せ給へ。」という念願がかなって、作者が「源氏物語」五十余巻を手に入れる場面が描かれている。

当時は、現在のようない印刷術はもちろんない。本は、個人個人が書写すること、つまり、原作者から本を借りてだれかが書写し、その書写したものをまただれかが書写する、といったことの繰り返しによって広まったのである。もちろん、大人数で組織的に書写するようなこともあったが、それにしても書写される数は限られていただろう。紙も貴重品であった。この「源氏物語」などは「五十余巻」というのだから、一そろいの形で書写するとしたら、それがいかんたいへんなことであるかは容易に想像されるだろう。

ところが、「更級日記」の作者が継母や姉から「源氏物語」の内容を教えられたのは、一〇一八・九年（寛仁二・三）のころのこと、これは「源氏物語」の作者紫式部の推定没年一〇一四年（長和三）から、さして遠からぬころのことである。そのころにはすでに、受領階級の人々さえも内容を知っているとこのことから、「源氏物語」がかなり読まれていたことがわかる。そして、きょうのテキストの部分にあたる作者十四歳の折の一〇二一年（治安元）には、一介の受領階級の娘でさえも、写本一そろい「五十余巻」が手に入るようになっていたのである。いかに「源氏物語」

の流布の度合いがすごかったかが知られるのであり、裏をかえせば、その人気のほどがうかがわれるのである。

一字一字書き写すなんて、気が遠くなりそうですね。叔母に「源氏物語」をもらったときの作者の喜びは、さぞ大きなものだろうと想像されますね。

トレーニング

解答は巻末にあります

- 13 「きょうのテキスト」で、作者が最も心ひかれているのはどんなことですか。

「ゆかし」という語に注意して、何を「ゆかし」と思っているのかを考えましょう。

- 14 母が「物語など求めて見せ給ふ」（1）たのはなぜですか。

文頭に示されている作者の様子を見て、母はどうしようと思いましたか。

- 15 「人語らひなどもえせず。たれもいまだ都慣れぬほどにて、え見つけず。」（2・3）という状態であった作者は、源氏の物語を全部読も

うとして、次にどのような具体的な行動をしましたか。

親が大秦寺に籠ったときに、作者はどうしましたか。

16 「いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるままに、」(4)とありますが、だれが何に対してそう思ったのですか。

「 が 」 に対して。

17 「をば」のことばの中の「ゆかしくし給ふなるもの」(13)とは何ですか。

作者が「ゆかし」と思っていたものは何ですか。「きょうのテキスト」には、「見る」という語が七回も出てきます。作者の「見たい」気持ちの強かったことが、よくわかりますね。

きょうの最後のトレーニングです。文学史的なことから、整理しておきましょう。

18 「この、源氏の物語、一の巻よりしてみな見せ給へ。」(5)とありますが、「一の巻」の巻名は何ですか。また、「源氏の五十余巻」とありますが、源氏は何巻か

ら成っていますか。

19 「在中将、とほぎみ、せり河、しらら、あさうづなどいふ物語ども」とありますが、このうち現在まで伝わっている物語はどれですか。また、その物語の題名は、現在では一般に何と呼ばれますか。

おつかれさま。答え合わせをして、ゆつくり休みましょう。

## 〈枕草子〉春はあけぼの

「更級日記」に引き続いて、きょうは少し時代をさかのぼり、有名な「枕草子」の文章に触れてみましょう。きょうのテキスト「春はあけぼの」は、「枕草子」の冒頭を飾るものとして特によく知られています。では、いつものように、基本的な古語の学習から入りましょう。

### ●古語の意味を覚えよう●

▽古語や文語文を音読しながら、「」に古語の意味を書き込んでいきましょう。

① やうやう【漸う】(副) だんだん。

例 やうやう白くなりゆく山ぎは少しあかりて、  
(枕草子・一段)

訳 「白んでいく山ぎわの辺りが少し明るくなって、

▼ほかに「かろうじて・やっと」などの意味に用いられることもある。

② をかし(形・シク) 趣がある。興味深い。

例 雨など降るもをかし。  
(枕草子・二段)

訳 雨などが降るのも「」。

▼「をかし」は、知的で明るい感じの趣を表現し、次の「あはれなり」は、主情的でしみじみとした趣を表現することが多い。

③ あはれなり(形動・ナリ) (しみじみとした) 趣がある。

例 からの寝所へ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。  
(枕草子・二段)

訳 からのすがねぐらに帰って行くこうとして、三羽四羽、また二羽三羽などと

(連れ立って) 飛び急ぐのさへ「」。

▼ほかに「かわいい」「感心だ」「気の毒だ」「残念だ」など、心に強く感じた場合の表現として、多方面に用いられる。

④ つとめて(名) 早朝

例 冬はつとめて。

訳 冬は「」(がいい)。

(枕草子・二段)

⑤ つきつきし(形・シク) ふさわしい。似つかわしい。

例 いと寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るもいとつきつきし。

(枕草子・二段)

訳 たいそう寒い朝に、火などを急いでおこして、炭火を持って(廊下など)を通じて) 運んで行くのもたいそう(冬の朝に)「」。

▼調和がとれていて好ましい感じを表現する語。

⑥ わろし【悪し】(形・ク) 感心しない。よくない。

例 火桶の火も白き灰がちになりてわろし。  
(枕草子・二段)

訳 火桶の中の火にも白い灰が目だってきて「」。

▼この時代、もの事を評価する語として「よし」↓「よろし」↓「わろし」↓「あし」があり、この順に評価が下がっていく。

1 次の古語を音読しながら、その意味を後から選んで書きなさい。

- (1) やうやう ( )  
 (2) をかし ( )  
 (3) あはれなり ( )  
 (4) つとめて ( )  
 (5) つきづきし ( )  
 (6) わろし ( )

・ふさわしい。似つかわしい。 ・(しみじみとした)趣がある。  
 ・早朝。 ・しだいに。だんだん。 ・感心しない。よくない。  
 ・趣がある。興味深い。

2 太字の語に注意しながら、次の(1)～(6)の口語訳を完成させなさい。

- (1) かくて翁おきなやうやう豊とよかになりゆく。 (竹取物語)  
 訳こうして翁は「 」豊かになつてゆく。  
 (2) 野分のわきのあしたこそをかしけれ。 (徒然草・一九段)  
 訳野分(台風)の翌朝は「 」。六月のころ、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊かやり火ひふすぶるもあはれな  
 り。 (徒然草・一九段)  
 訳六月のころ、みすぼらしい家に夕顔の花が白く見えて、蚊かやり火ひ(の煙)が  
 くすぶっているのも「 」。 (徒然草・一九段)  
 (4) 雨うち降りたるつとめてなどは、世になう心あるさまにをかし。

(枕草子・三七段)

「雨雨が降った(翌日)の」 「などは、くらべるものがないほどに風

情があつて趣深い。

(5) 家居いぐのつきづきしく、あらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど、興あるもの  
 なれ。 (徒然草・一〇段)

「訳住居が(住む人に)」 「理想的であるのは、(無常の世の)仮の

宿りとは思ふけれど、(やはり)趣のあるものである。

(6) さるまじき人のもとに、あまりかしこまりたるも、げにわろきことなり。  
 (枕草子・二四六段)

「訳それほど(の身分)ではない人のもとに、あまりかしこまった(ことばで文  
 を書く)のも、まったく」 「ことである。

それではここで、「枕草子」について、簡単に説明しておきます。

◆「枕草子」

「清少納言」によって書かれた、わが国最古の随筆である。ほぼ同じころに書か  
 れた紫式部の「源氏物語」と並んで、平安朝女流文学の代表的作品。随筆文学の祖鼻  
 として、後世の文学に与えた影響も大きく、鎌倉時代の「方丈記」(鴨長明)、「徒然  
 草」(兼好)とともに、三大随筆と称されている。

成立は、平安時代中期。ちょうど西暦一〇〇〇年のころである。九九六年(長徳  
 二年)ごろには、すでに原形が整い、その後幾度か作者自身による修正増補が行わ  
 れ、一〇〇一年(長保三年)ごろまでに完成したものと思われる。なお、この西暦  
 一〇〇〇年をはさんだ百年ほどの時代は、作者や紫式部をはじめとして、  
 右大将道綱母、和泉式部、菅原孝標女など、著名な女流文学者を数多く輩出して  
 おり、平安女流文学のいわば黄金時代でもあった。

「枕草子」は、長短合わせて約三百段の文章から成り、その内容は、「ものづくし」  
 と呼ばれる類集的なもの、自然や人生に関する随想的なもの、また、宮廷生活に材  
 を得た日記回想的なものと、三種に大別することができる。そのいづれにも、作者  
 独特の機知やとぎすまされた感性が遺憾なく発揮され、この作品をいわゆる「をか  
 し」の文学として特色づけている。

1 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。  
 3 夏は夜。月のころはさらなり、やみもなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。  
 7 秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、からすの寝所へ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど、飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。  
 10 日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。  
 11 冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにあらず、霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るもいとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

語釈

上の数字は文番号を示す

- 1 春はあけぼの。「春はあけぼの(いと)をかし」の意で、体言止めにする事で表現を強めている。「あけぼの」は、「夜のほのぼのと明けるころ」をいう。
- 2 やうやう「しだいに」「やうやく」のウ音便化したもの。
- 2 山ぎは「山に接した空の部分」をいう。
- 2 あかりて「明るくなつて」「あかりて」は「明りて」である。また一説に「赤りて」として、「赤らんで」の意とする。
- 2 紫だちたる「紫がかった」。「紫」は古代紫と呼ばれる色調で、現在の紫よりも赤みの濃い色。「だつ」は接尾語で、名詞について「そのようになる」「……めく」の意となる。
- 2 たなびきたる「たなびきたるさま、(いと)をかし」の意である。「春はあけぼ

- の」と同様、連体形で止めて力強さを表し、余韻を残している。「たなびく」は横に長く引く、長く連なるの意。「た」は接頭語。
- 4 月のころ「月の美しいころ。陰暦十五日で毎月三日以降十九日ごろまでを指す。このころが月の観賞の対象となる。ここでは、夕月夜の出る十日ごろから十七、八日ごろまでをいったものと思われる。月の出ている時刻をいうのではない。
- 4 さらなり「いうまでもない」「言ふもさらなり」の略である。
- 4 飛びちがひたる「飛びかつている(のは趣深い)。「飛びちがひたるさまをかし」の意である。「ちがふ」は行きかう、すれちがうの意である。
- 5 うち光りて「うち」は動詞につける接頭語で、意味を強め、語調を整える。
- 5 をかし「趣がある。現代語の「おかし」とは異なっていることに注意したい。主観的・感情的でしみじみとした美を表す「あはれ」に対し、「をかし」は客観的・知的で、明るい美しさを表す。
- 8 山の端いと近うなりたるに「山の端にたいそう近くなった時分に。主語は「夕日」である。「山の端」は、山の空に接する部分で、「山ぎは」に対する語。「に」は時を表す格助詞で、口語訳の際には「とき」や「おり」などの語を補って訳すと解しやすくなる。
- 8 からすの寝所へ行くとして「からすがねぐらに帰って行こうとして。「の」は主格である。
- 8 三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり「三羽四羽と連れ立って飛んでいく姿を印象的に表している。「さへ」は程度の軽いものをあげて、思いものを推量させる意である。「あはれなり」はしみじみとした趣があるの意。
- 9 まいて「まして」のイ音便化したもの。
- 10 日入り果てて「日がすっかり沈んでしまつて。「入り果つ」は、入りきつてしまふという意味の複合動詞である。
- 10 風の音、虫の音「音とは、一般に風や鐘などの大きな音響についていい、「音」とは、人の泣き声・鳥や虫の声・楽器などの小さく弱い音についていう。
- 10 言ふべきにあらず「いよいよもなく趣深い。
- 11 つとめて「早朝。早いことを意味する「つと」から出たことばである。
- 11 霜のいと白きも「霜がたいそう白い朝でも。「白き」の下には「朝」が省略されていると見るべきである。
- 12 さらに「さあらでも」の約された形である。「で」は「ずて」のつまったもので、用言の未然形に続き、打消の意味を表す接統助詞である。
- 12 いと寒きに「たいそう寒い朝に。「に」は時を表す格助詞であるが、ここでは「朝



を補ったほうが意味が明らかになる。

12 炭持て渡るも||炭火を持って(廊下などを通じて)運んで行くのも。「持て」は「持ちて」の促音便「持って」の転。「渡る」は通ることと空間的に広くわたること。ここでは、局(部屋)に炭火を配るために、廊下などを通じて行くことを表している。暗に宮中の広さが示されている。

12 つきつきし|| (冬の朝に) ふさわしい。「付き付きし」で、いかにも似つかわしく、ぴったりとしているさまを表す。

13 ぬるくゆるびもていけば||寒さがだんだんゆるんで暖かくなっていくと。主語は文中にないが、「寒さ(寒気)」である。「ゆるびもていく」は複合動詞として扱ったが、ほかに四段動詞「ゆるぶ」の連用形に「もていく」が付いたものともとれる。「もて」は接頭語である。なお、「ば」は已然形接続であるから、確定条件である。

13 火桶||円形の火鉢で、桐材で作られることが多かった。

13 白き灰がちになりて||白い灰が目だつてきて。

13 わろし||感心しない。「わろし」は「よろし」(まあまあよい)に対応する語で、「よし」「よろし」「わろし」「あし」の順に評価が下がる。

「をかし」「あはれなり」「つきつきし」など、形容語のニュアンスをしっかりと把握しましょう。

なお、以下の設問中、引用文の( )内の数字は、テキストの文番号を示しています。

### トレーニング

解答は巻末にあります

3 「きょうのテキスト」を、一回、ゆっくりと音読しなさい。

古文は、まず読みなれることが大切です。恥ずかしがらずに声を出して読みましょう。

4 次の語のテキストでの読みを、現代かなづかいで書きなさい。

- (1) やうやう ( ) (2) 蛍 ( )
- (3) 山の端 ( ) (4) 寝所 ( )
- (5) 雁 ( ) (6) 火桶 ( )

5 もう一回、ゆっくりと音読しなさい。

6 テキスト中の次の語句の意味を答えなさい。

- (1) 山ぎは ( )
- (2) さらなり ( )
- (3) をかし ( )
- (4) まいて ( )
- (5) さらでも ( )
- (6) 渡る ( )

7 次の(1)~(10)の——線部を語釈を参考にしながら、また省略されている語に注意しながら口語訳しなさい。

(1) 春はあけぼの。(1)

(2) やうやう白くなりゆく山ぎは少しあかりて、(2)

(3) 紫だちたる雲の細くたなびきたる。(2)

(4) 月のころはさらなり、(4)

(5) 夕日のさして山の端いと近うなりたるに、(8)

(6) 飛び急ぐさへあはれなり。(8)

(7) 風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。(10)

(8) 霜のいと白きも、またさらでも、(12)

(9) 炭持て渡るもいとつきづきし。(12)

(10) 昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、(13)

(10)は、語順を入れ替えた方が口語訳しやすいでしょう。

一つ一つの語句の意味を確認しながら口語訳することが大切です。また、省略の多い文章ですから、どこに何を補うべきかをしっかりと考えてください。

答え合わせをしたら、次の通釈を読んで、もう一度確認してみましよう。

### 通釈

春はあけぼの(が趣深い)。しだいに白んでいく山ぎわの辺りが少し明るくなって、紫がかつた雲が細くたなびいているさま(はすばらしい)。

夏は夜(に趣がある)。月の美しいころ(がよいの)はいうまでもないが、月の出ないやみ夜のころもやはり、蛍がたくさん飛びかっている(のは趣深い)。また、ただ一つ二つなどと、ほのかに光って飛んで行くのも趣がある。雨などが降るのも趣がある。

秋は夕暮れ(がすばらしい)。夕日がさして山の端にたいそう近くなった時分に、からすがねぐらに帰って行くとうとして、三羽四羽、また二羽三羽などと、(連れ立って)飛び急ぐのさえしみじみとした趣がある。まして、雁などの列をなしたのがたいそう小さく見えるのはとても情趣がある。日がすっかり沈んでしまつて、風の音や、虫の鳴く声などは、またいいようもなく趣深い。

冬は早朝(がいい)。雪が降っている朝はいうまでもなく、霜のたいそう白い朝でも、またそうでなくても、たいそう寒い朝に、火などを急いでおこして、炭火を持つて(廊下などを通つて)運んで行くのもたいそう(冬の朝に)ふさわしい。昼になつて、寒さがだんだんゆるんで暖かくなつていくと、火桶の中の火にも白い灰が目だつてきて感心しない。

春夏秋冬の、それぞれ、どんな点に作者が心をひかれていたのか、理解できましたか。それでは、さらに読解を深めていきましょう。

8 次の一文を、例にならって文節に切りなさい。

例 雨など一降るも一をかし

やうやう白くなりゆく山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。(2)

「なりゆく」は、複合動詞で、一語と考えます。

9 「やうやう」は、活用のない自立語で、主に用言を修飾する働きをもつ単語です。このような単語を何と呼びますか。品詞名を書きなさい。

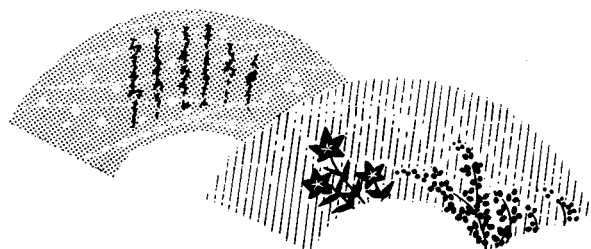
10 次の(1)～(4)に含まれる「の」の中には、一つだけ他と性質の異なるものがあります。それはどれですか、その番号を答えなさい。

- (1) 紫だちたる雲の細くたなびきたる。(2)
- (2) 月のころはさらなり、(4)
- (3) 夕日のさして(8)
- (4) 雁などの連ねたるが、(9)

11 「夕日のさして山の端いと近うなりたるに、からすの寝所へ行くと

て」(8)の中で、——線部「近うなりたるに」の主語となるものは何ですか。書き抜きなさい。

12 「春はあけぼの。」「夏は夜。」などのような文末の結び方を何と呼びますか。また、そうすることによってどのような効果が生まれますか。答えなさい。



◆こくごア・ラ・カルト／「枕草子」のネーミング◆  
清少納言の書いたこの作品が、なぜ「枕草子」と名付けられているかについては、実のところ諸説入り乱れて確定していない。中には、多くの段が「……は」「……もの」など、主題を冒頭部に、「枕」のように置いて書き始められているからとする説もあるが、諸説の大部分は、「枕草子」の最終段落の次の記述を手がかりとしている。

「宮の御前に、内大臣の奉り給へりけるを、『これになにを書かまし。上の御前には、史記といふ書をなむ書かせ給へる。』などのたまはせしを、『枕にこそは侍らめ。』と申ししかば、『さは得てよ。』とて賜はせたりしを……。」(宮の御前(中宮定子)に、内大臣(定子の兄藤原伊周)が(草子を)献上なさったのだが、(宮は)「これに何を書こうかしら。帝は、『史記』という書をお書きになった。』などとおっしゃるので、『枕でございませう。』と申し上げたところ、『それでは(そなたに)取らせよう。』とおっしゃつ

てくださったのを……。

内大臣から献上された草子（紙を糸でとじたもの）の使  
い道を思案していた中宮に、作者が機転をきかせて「枕に」  
と言ったところ、中宮は即座にその草子を作者にくださつ  
たというのである。問題は、作者の言う「枕」が何を意味  
するかである。単に「史記」↓「敷・敷物」から連想され  
るしゃれであると考えられる。また、作者の漢文に対する素  
養から考えて、「書を枕にして眠る」（白氏文集）などから  
思いついたものだとする説などさまざまであるが、この  
「枕」が、頭の下に置く、いわゆる枕ではなく、常に身近に  
置いて、「目に見え心に思ふこと」などを書きとめておいた  
めのノート、いわば備忘録のようなものを言うのだとする  
説が、最も信頼しうるようである。もつとも、この記述の  
ある段落そのものが、清少納言の書いたものではなく、あ  
とからだれかが付け加えたものだと考える説もあつたりし  
て、このような有名な作品にさえ、まだまだ不明の点が多  
い。こんななぞ解きに挑戦してみるのも、古典を学ぶおも  
しろさのひとつだろう。

さて、もうひと息。最後のトレーニングです。がんばりましょう。

### トレーニング

解答は巻末にあります

13 「山ぎは」と「山の端」との違いを説明しなさい。

14 「をかし」と「あはれなり」は、ともに趣深さを表現する語ですが、

その趣には微妙な差異があります。その違いについて説明しなさい。

15 「日入り果てて」（10）とありますが、「日」が「入り果て」、辺りが

暗くなることによつて、作者はそれまでとは違った感覚の世界へ入つ  
て行きます。作者の感覚はどのように移っていますか。次の(1)(2)の空  
欄に、それぞれ、適切な漢字一字を書き入れなさい。

(1)  覚の世界から、(2)  覚の世界へ。

16 冬について述べている段落には、その内容に、春・夏・秋には見ら  
れなかった特色がありますが、それはどのような点ですか。答えな  
さい。

春・夏・秋の段では、作者の目は自然の情景に向けられていたが、冬の段  
では、早朝の宮中で、各部屋に炭火を配って歩く身辺の様子が描かれている。

17 「昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶おけの火も白き灰がちに  
なりて」（13）とありますが、これを「わろし」と評したのは、どのよ  
うな考えからでしょうか。次の中から最も適切なものを選び、番号で  
答えなさい。

(1) 昼になり暖かくなると、せつかくおこした火桶の炭火も無用のも

- のになってしまふから。
- (2) 昼になり暖かくなると、冬の長所である寒さがうせてしまつて、おもしろみがないから。
- (3) 昼になり暖かくなると、冬の寒さも、また、それにふさわしい緊張感もうせてしまふから。
- (4) 昼になり暖かくなると、火桶の火もすっかり灰になり、かえつて寒々としてしまふから。

「わろし」が「つきづきし」に対応する語であることに注意します。

最後にもう一度、「枕草子」に関する知識を確認しましょう。

18 「枕草子」の作者名を漢字で書きなさい。また、その成立年代を西暦で答えなさい。

作者名〔 〕 成立年代〔 〕 年ごろ〔 〕

19 「枕草子」は、三大随筆の一つに数えられています。他の二つの作品名と作者名とを、それぞれ漢字で書きなさい。

〔 作品名 〕 作者名 〓  
〔 作品名 〓 作者名 〓  
〔 〕 〓

よくがんばりました。清少納言の鋭い感受性やあざやかな表現は理解できましたか。答え合わせをして、正解の出せなかつたところは、もう一度よく見直しておきましょう。

# 〈万葉集〉玉だすき……

きょうは、「万葉集」から、柿本人麻呂かきものひとまろの和歌を取り上げます。長歌とそれに対する反歌二首を読み味わいましょう。まずは、基本古語のトレーニングからです。

## ●古語の意味を覚えよう●

▽古語や文語文を音読しながら、「」に古語の意味を書き込んでいきましょう。

① よきる【過る】(動四) 訪れる。通りすがりに立ち寄る。

例 近江あふみの荒れたる都に過るときに、  
(万葉集・卷二)

例 近江おおうみの荒れたる都に「」たときに、

▼のちに「よぎる」となった。

② しらしめす【知らし召す・領らし召す】(動四) お治めになる。

例 いやつぎつぎに 天あめの下 知らしめししを  
(万葉集・卷二)

例 次々に(大和の国で)天下を「」たのに、

▼平安時代では「しらしめす」が用いられた。

③ おもほしめす【思ほし召す】(動四) お思いになる。

例 いかさまに 思ほしめせか  
(万葉集・卷二)

例 どのように「」たからか、

▼動詞「おもほす」に、尊敬の補助動詞「めす」が付いてできたもので、「思う」の尊敬語。

「思う」の尊敬語。

④ ひな【鄙】(名) いなか。

例 あまざかる ひなにはあれど  
(万葉集・卷二)

例 「」ではあるが、

▼「あまざかる」は「ひな」に係る枕詞で、ここでは訳を省略する。

⑤ おほみや【大宮】(名) 皇居・神宮に対する敬称。

例 天皇の 神の尊の 大宮は ことと聞けども  
(万葉集・卷二)

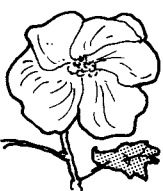
例 (天智) 天皇の「」はここだと聞けれど、

▼訳では「皇居」あるいは「宮殿」としておく。

⑥ ささく【幸く】(副) 無事に。変わりなく。

例 采浪さいなみの志賀しがの唐崎からさき幸くあれど  
(万葉集・卷二)

例 采浪さいなみの志賀しがの唐崎からさきは昔と「」ずにあるが、



1 次の古語を音読しながら、その意味を後から選んで書きなさい。

- (1) よきる ( )  
 (2) しらしめす ( )  
 (3) おもほしめす ( )  
 (4) ひな ( )  
 (5) おおみや ( )  
 (6) さきく ( )

・お治めになる。 ・訪れる。通りすがりに立ち寄る。 ・いな  
 か。 ・お思いになる。 ・無事に。変わりなく。 ・皇居、神  
 宮に対する敬称。

2 太字の語に注意しながら、次の(1)～(6)の口語訳を完成させなさい。

- (1) 通りおはしましけるよし、ただ今なむ、人申すに、 (源氏物語・若菜)  
 訳「 」なさつたよし、ただ今、人が申しますので、  
 (2) 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ 天皇の (万葉集・巻二)  
 訳大津の宮で、天下を「 」たとかいう (天智) 天皇の  
 (3) やすみしし わが大君の 神ながら 思ほしめして 豊の宴 見す今日の (万葉集・巻一九)  
 日は  
 訳わが大君が、神の御心のままに「 」て、酒盛りをなさるきよう  
 は  
 (4) よしやいかなるひなの住居なりとも、その憂きにこそせめては堪へめ。

訳たとえどんな「 」の住居であろうとも、その悲しみに無理にで

も辛抱ができるであろう。

(5) 大宮の内まで聞こゆ網引きすと網子ととのふる海人の呼び声 (万葉集・巻三)

訳「 」の中まで聞こえる。網を引こうとして、網子を指揮する漁

夫の掛け声が

(6) 命を幸く良けむと石走る垂水の水をむすびて飲みつ (万葉集・巻七)

訳命が「 」であれば、滝の水を、手のひらですくって飲んだ

きょうのテキストに入る前に、「万葉集」についての説明を読んでおきましよう。

◆「万葉集」

「万葉集」は、全部で二十巻から成り、約四千五百首あまりの和歌が収められている。歌体別では、長歌(五七七五七七)約二百六十首、短歌(五七七五七七)約四千二百首、旋頭歌(五七七五七七)約六十首が大部分を占める。四世紀前半から八世紀中ごろまでのおよそ四百年間の和歌を収録し、これらの和歌は、雑歌(宮廷の諸行事や天皇の行幸に関する歌)相聞(恋愛の歌)、挽歌(人の死を悼む歌)や辞世の歌などに分類されている。現在みられるような形にまとめられるまでの過程は複雑で、不明な点も多いが、その成立には、自身「万葉集」に多くの歌を残している大伴家持が深くかかわっているとされ、奈良時代末期から平安時代初期にかけて、全体がまとめられたものと思われる。

作者は、天皇から民衆にまでおよび、地域的にも全国に広がっている。その歌風も宮廷歌から民謡風の歌まで豊かな多様性を備えている。五七調の力強く荘重な調べが重んじられ、その純真素朴ではつらつとした歌風は、「ますらおぶり」と呼ばれている。枕詞・序詞などの修辞が盛んに用いられたのも表現の特色としてあげることができよう。

●きょうのテキスト●

1 近江の荒れたる都に過るときに、柿本朝臣人麻呂の作る歌

2 玉だすき 畝傍の山の 櫃原の ひじりの御代ゆ 生れましし

神のごとごと つがの木の いやつぎつぎに 天の下 知らしめし

しを そらにみつ 大和を置きて あをによし 奈良山を越えい

かさまに 思ほしめせか あまざかる ひなにはあれど いはばし

る 近江の国の 楽浪の 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ

天皇の 神の尊の 大宮は こと聞けども 大殿は ことと言へ

ども 春草の しげく生ひたる かすみ立ち 春日の霧れる もも

しきの 大宮所 見れば悲しも

3 反歌

4 楽浪の志賀の唐崎幸くあれど大宮人の舟待ちかねつ

5 楽浪の志賀の大わだよどむとも昔の人にまたもあはめやも

語釈

上の数字は文番号を示す

1 近江の荒れたる都 歌の中の大津の宮(滋賀県大津市)を指す。「近江」は旧国名

で、今の滋賀県。天智六年(六六七年)、大和からこの地に遷都されたが、壬神

の乱(六七二年)の後、再び都が大和にうつり、荒廃に帰した。

1 過る 訪れる。通りすがりに立ち寄る。後に「よぎる」となった。

1 柿本朝臣人麻呂 柿本人麻呂のこと。朝臣とは、天武天皇(在位六七二―六八六

年)のときに制定された「八色の姓」第二位のもの。柿本人麻呂は、生没年未

詳。持統(在位六八六―六九七年)・文武(在位六九七―七〇七年)両天皇の頃

に活躍した。情熱的で雄大な構想と豊かな修辭を兼ね備えた作品を残した。和

歌史上有数の歌人といわれている。

2 玉だすき 「畝傍」に係る枕詞。「玉だすき」は、たすきの美称。たすきをうな

じに「掛ける」ことを「うなぐ」と言うところから、「うね」「掛く」に係る枕

2 畝傍の山 奈良県橿原市にある山。大和三山の一つ。

2 櫃原 畝傍山のふもとにあり、初代神武天皇即位の地と伝えられる。現在、奈良

県橿原市。

2 ひじりの御代ゆ (神武)天皇の御代より。「ひじり」は、徳の高い人のこと。こ

こは、天皇の尊称で、神武天皇を指す。「ゆ」は、上代に用いられた格助詞で、

「ヨリ・カラ」の意。

2 生れましし お生まれになった。「まし」は、尊敬の意を表す補助動詞「坐す・座

す」の連用形。「あり」の尊敬語で、「オ・ニナル」の意。「し」は、過去の助動

詞「き」の連体形。

2 神のごとごと 天皇のごとくが。天皇は神であると考えた。

2 つがの木の 「つぎつぎ」に係る同音による枕詞。「つが」は「とが」とも言い、

マツ科の常緑高木。

2 知らしめししを お治めになったのに。「を」は逆接を表す接続助詞。「を」を感

動を表す間投助詞とする説もあるが、ここでは、後の「大和を置きて」「いかに

まに思ほしめせか」などの関係から前者をとっておく。

2 そらにみつ 「大和」に係る枕詞。

2 大和を置いて 大和を差し置いて。

2 あをによし 「奈良」に係る枕詞。

2 奈良山 奈良市北部にある山。ここを越えると山城の国(京都府)で、その先に

近江の国がある。

2 いかさまに思ほしめせか どのようなようにお思いになったからか。「思ほしめせ」は

「思ふ」の尊敬語である「思ほしめす」の已然形。ここは「思ほしめせばか」の

意である。上代では、活用語の已然形が、接続助詞「ば」を伴わずに係助詞に

接続し、「くダカラ」「スルト」などの確定条件を表すことがある。

2 あまざかる 「はるか空のかなたである」の意から「ひな」(田舎)に係る枕詞。

2 いはばしる 「近江」に係る枕詞。

2 楽浪 琵琶湖の西南沿岸地方の古称。



2 ももしきの「大宮」に係る枕詞。

2 悲しも悲しいことだなあ。「も」は、詠嘆を表す終助詞で上代に用いられた。

3 反歌に添える歌で、五七七の短歌形式のものが主である。その役割は、長歌の内容を要約したり、また補ったりする。ここは、後者の場合。

4 志賀の唐崎幸くあれど志賀の唐崎は昔と変わらぬ。志賀の唐崎は、現在の滋賀県大津市北部にある。「幸く」は副詞で、「無事に」の意。ここは、「楽浪の志賀の唐崎」が、無事で昔と変わらぬにあり、ということ。擬人法が使われている。また、「からさき」「ささく」と同音を繰り返す技法を用いて、語調を調えている。

4 大宮人の舟（昔、ここで遊んだ）大宮人の舟。「大宮人」は、宮中に仕える人のことで、ここは、大津の宮に仕えた人を指す。

4 待ちかねつ（都が荒れ果ててしまった今となつては）待ち受けることは確かできないのだ。「かね」は、「くすることはできない」という意味の、下二段型活用の接尾語「かね」の連用形。「つ」は、完了の助動詞で、確意の意。「キツト」ダ・タシカニ「ダ」の意。「待ちかねつ」の主語は「楽浪の志賀の唐崎」で、擬人法を用いている。

5 大わだ海・湖・川などの、大きく湾曲した所。入り江。

5 よどむとも（昔、ここで遊んだ大宮人の舟を待ち受けるように）よどんでいる。たとえ、このままよどんでいても。「とも」は、まだ実現していないことがらに対して、逆接の仮定を表す場合と、すでに実現していることがらに対して、たとえそうであっても、と強調している場合がある。ここは、後者の用法。

5 あはめやも会うだろうか。（いや、会いたくないのだ。）「め」は、推量の助動詞「む」の已然形。「やも」は、係助詞「や」に、詠嘆を表す終助詞が付いたもので、反語の意を表す。上代では、係助詞「や」は、活用語の已然形に付くことが多い。「あはめやも」の主語は、「楽浪の志賀の大わだ」で、擬人法を用いている。

きょうのテキストは、柿本人麻呂の作品で、長歌（五七五七…）と以下五七を繰り返して、五七七で終わる歌体（五七五七）とそれに対する反歌二首です。反歌二首は短歌形式（五七五七）となっています。

では、長歌の音読からトレーニングに入りましょう。五七五七のリズムに注意することが大切です。長歌の場合、つい七五調に読んでしまいがちです。から。

なお、以下の設問中、引用文の（ ）内の数字は、テキストの文番号を示しています。

トレーニング 解答は巻末にあります

3 「きょうのテキスト」を、一回、ゆっくりと音読しなさい。

古文は、まず読みなれることが大切です。恥ずかしがらずに声を出して読みましょう。

4 次の語のテキスト中での読みを、現代かなづかいで書きなさい。

- (1) 近江 ( ) (2) 過る ( )
- (3) 朝臣 ( ) (4) 畝傍 ( )
- (5) 天皇 ( ) (6) 尊 ( )
- (7) 幸く ( )

そのほかに、「檀原」「楽波」などの地名も読み方が難しいですね。

5 もう一回、ゆっくりと音読しなさい。

6 次の語句のテキストでの意味を書きなさい。

- (1) 過る ( ) (2) いや ( )
- (3) 知らしめす ( )
- (4) ひな ( ) (5) 大宮 ( )

(6) 幸まぐく「」

7 次の(1)～(10)を語釈を参考にしながら口語訳しなさい。

(1) 玉たまだすき 畝うね傍びの山の 檀かじ原はらの ひじりの御み代よゆ

(2) つがの木の いやつぎつぎに 天あめの下 知しらしめししを

(3) そらにみつ 大やまと和とを置おきて あをによし 奈なら良ら山やまを越こえ

(4) いかさまに 思おもほしめせか

(5) あまざかる ひなにはあれど いはばしる 近あふみ江みの国くにの

(6) 大おほ宮ほは こと聞きけども大おほ殿ほ(との)は こと言いへども

(7) 春はる草くさの しげく生おひたる かすみ立ち 春はる日ひの霧きれる

(8) ももしきの 大とこ宮ころ所 見みれば悲かなしも

(9) 大おほ宮ほ人の舟ふね待まちちかねつ

(10) 昔むかしの人にまたもあはめやも

(1)の「玉だすき」は「畝傍」に係る枕詞で、訳では省略されます。同じように、(2)の「つがの木」は、「つぎつぎ」に係る枕詞、(3)の「そらにみつ」は「大和」に、「あをによし」は「奈良」に係る枕詞、(5)の「あまざかる」は「ひな」に、「いはばしる」は「近江」に係る枕詞、(9)の「ももしきの」は「大宮」に係る枕詞です。

答え合わせをしたら、次に、通釈を示しておきますので、目を通しておきましょう。

通釈

近江の荒れた都に訪れたときに、柿本朝臣麻呂の作った歌  
畝傍の山の檀原の(神武)天皇の御代より、お生まれになった天皇のことごとくが、  
次々に(大和)の国で天下をお治めになったのに、大和を差し置いて、奈良山を越え、  
どのようにお思いになったからか、田舎ではあるが、近江の国の楽浪の(大津)の宮  
で、天下をお治めになったとかいう(天智)天皇の皇居はここだと聞くけれど、宮殿は  
ここだと言うけれど、春の草が生い茂り、かすみ立ち、春の日がかすんでいる、  
(この)皇居のあった所を見ると悲しいことだなあ。

反歌

楽浪の志賀の唐崎は昔と変わらずにあるが、(昔、ここで遊んだ)大官人の舟を(都が荒れ果ててしまった今となつては、)待ち受けることは確かにできないのだ。  
 楽浪の志賀の大きな入り江は、(昔、ここで遊んだ大官人の舟を待ち受けるように)よ  
 どんでいる。たとえ、このままよどんでいても昔の人にまた会うだろうか(いや、会  
 いはしないのだ)。

トレーニング

解答は巻末にあります

8 テキストの長歌から、枕詞を抜き出さない。

▼枕詞：通常五音からなり、後に続くことばを導くために慣用的に用いられる修飾語のこと。どの枕詞がどの語句に係るかは、ほぼ一定している。また、枕詞は本来は意味をもつていたことばが慣用的に用いられるうちに意味を失つたものと考えられ、訳では省略されることが多い。

〔 〕

〔 〕

〔 〕

〔 〕

〔 〕

〔 〕

〔 〕

〔 〕

〔 〕

9 「ひじりの御代ゆ 生れましし」は、だれを修飾していますか。テキスト中の語句で答えなさい。

〔 〕

〔 〕

10 「いかさまに 思ほしめせか」とありますが、「思ほしめせか」の主

語はだれですか。また、その人物のどんな行為に対して、この和歌の作者はこう歌っているのですか。

〔 〕

〔 〕

〔 〕

〔 〕

11 この長歌には、対句がいくつか用いられています。どの句とどの句が対句になっているのか、「 」に對になっている句を書きなさい。

▼対句：意味・形式が対応する二つの句や文を並べた表現。

- (1) そらにみつ 大和を置きて
- 〔 〕
- (2) 大宮は こと聞けども
- 〔 〕
- (3) 春草の しげく生ひたる
- 〔 〕
- 〔 〕

12 「見れば悲しも」とありますが、作者は何を嘆き悲しんでいるのですか。原文から抜き出して答えなさい。

13 きょうのテキストの反歌二首を、一回ゆっくりと音読しなさい。

—— 反歌二首は、五七五七七の短歌形式です。

14 反歌二首の中から、擬人法を使っているところを例にならって抜き出さなさい。

▼擬人法<sup>ひにんぽう</sup>は比喩表現の一種で、人間以外のものをまるで人間の行為のように表現する方法。

例 「楽浪の志賀の唐崎―幸くあれど、」

〔 〕

〔 〕

〔 〕

〔 〕

〔 〕

15 「よどむとも」とありますが、作者の眼前にある入り江は、実際によどんでいるのですか、いないのですか。

—— 語句注を参考にしましょう。「よどむ」は、「流れが滞って動かないこと」で、まるで、昔の大宮人の舟を待ち受けるようによどんでいる光景なのです。

16 反歌二首では、何が詠まれていますか。適切なもの一つ選びなさい。

- (ア) 自然の美しさと昔の人々への称賛。
- (イ) 自然の雄大さと昔の人々への懐かしさ。
- (ウ) 自然の悠久さと人の営みのはかなさ。

17 次の短評は、「きょうのテキスト」のどの歌にあてはまりますか。それぞれ、初めの二句を書きなさい。

- (1) 同音を繰り返して語調を調べ、また、「自然」を擬人化して、自然の悠久さと人の営みのはかなさを対照している。

- (2) 初代神武天皇<sup>じんむ</sup>の御代から歴代天皇の治世に触れ、天智天皇<sup>てんじ</sup>の近江<sup>おうみ</sup>の大江の宮にまでいたる雄大な構想で、旧都の荒廃を嘆いた歌である。また、枕詞<sup>まくらことば</sup>や対句<sup>たいく</sup>を重用し、声調を豊かにしている。

- (3) 前句とおなじように自然を擬人化し、よどんでいる水が、昔の人

に再び会うことはできないという、自然の悠久さと人事のはかなさを  
思う気持ちが表現されている。

最後に、文学史的なことから確認しておきましょう。

18 「万葉集」の成立時期について、正しいものを選びなさい。

- (ア) 大和時代中期
- (イ) 大和時代末期～奈良時代初期
- (ウ) 奈良時代末期～平安時代初期

19 「万葉集」の代表歌人を、二人以上書きなさい。

答え合わせがすんだら、きょうの学習は、これで終わりです。ごくろうさ  
までした。余裕のある人は、次のページの〈参考〉の和歌も読み味わって  
みましょう。

〈参考〉 その他のおもな「万葉集」の和歌

柿本朝臣人麻呂、妻の死にしのちに、泣血哀慟して作る歌あはせて短歌

天飛ぶや 軽の道は 我妹子が 里にしあれば ねもころに 見まくほ  
しけど やまず行かば 人目を多み まねく行かば 人知りぬべみ さね  
かづら のちもあはむと 大舟の 思ひ頼みて 玉かぎる 岩垣淵の 隠  
りのみ 恋ひつつあるに 渡る日の 暮れぬるがごと 照る月の 雲隠る  
ごと 沖つ藻の なびきし妹は もみち葉の 過ぎて去にきと 玉梓の 使  
ひの言へば 梓弓 音に聞きて 言はむすべ せむすべ知らに 音のみを  
聞きてありえねば 我が恋ふる 千重の一重も 慰もる 心もありやと  
我妹子が やまず出で見し 軽の市に 我が立ち聞けば 玉だすき 畝傍  
の山に 鳴く鳥の 声も聞こえず 玉梓の 道行き人も ひとりだに 似  
てし行かねば すべをなみ 妹が名呼びて 袖を振りつる

短歌二首

秋山のもみちを茂み惑ひぬる妹を求めむ山道知らずも  
もみち葉の散りゆくなへに玉梓の使ひを見ればあひし日思ほゆ

〈通釈〉

柿本朝臣人麻呂が、妻が死んだのちに、激しく泣いて悲しんで作  
った歌と短歌。

軽の道は、私の妻の里であるので、心をこめて丁寧に見たいと思うけ  
ど、いつも行けば人目が多いので、しばしば行ったらきつと人が知るだ  
ろうから、(今でなくとも)のちにでも会おうと(将来を)頼みに思っ  
て、岩垣淵のように人知れず恋慕していたところ、(空を)渡る日が暮  
れてしまうように、照る月が雲に隠れるように、(自分に)なびき寄った  
妻は死んでいったと使いの者が言うので、話に聞いてどう言ったらよい  
か、どうしたらよいかわからず、話だけを聞いていられないので、私が  
恋しく思う千分の一でも慰める気持ちにもなるだろうかと、妻がいつも  
出て見ていた軽の市に私が立って耳を澄ますと、畝傍の山に鳴く鳥のよ  
うには、(妻の)声は聞こえず、道行く人も、一人さえ(妻に)似た人が  
通らないので、しかたなく妻の名を呼んで袖を振ったことだ。

秋山の紅葉が茂っているので迷ってしまった妻を捜そうとするが、そ  
の山道もわからないことよ。

〈語釈〉

紅葉が散ってしまうとともに使いの者(が来るの)を見ると、(このよ  
うにして、妻の死の知らせが来たのだと、)妻に会った日のことが思い出  
される。

柿本朝臣人麻呂 柿本人麻呂のこと。朝臣とは天武天皇(在位六七二―  
六八六年)のときに制定された「八色の姓」の第二位のもの。柿本人麻  
呂は、生没年未詳。持統(在位六八六―六九七年)・文武(在位六九七―  
七〇七年)両天皇に仕える。情熱的で雄大な構想と豊かな修辭を兼ね備  
えた作品を残した。和歌史上有数の歌人といわれている。泣血哀慟し  
て激しく泣いて悲しんで。天飛ぶや 軽 にかかる枕詞。軽の  
道 奈良県橿原市大軽付近。当時の交通の要路であった。我妹子が  
私の妻の。「わぎもこ」は「わがいもこ」がつまったもので、男性が自分  
の妻や愛人を親しみをこめて呼ぶ語。「が」は格助詞で連体修飾語を表  
す。「く」の意。ねもころに 心もこめて丁寧に。見まくほしけど  
 見たいと思うけど。「ま」は推量の助動詞「む」の未然形で、仮定・婉  
曲の意味を表す。「く」は「くノコト、くノモノ」という意で、活用語を  
体言と同じはたらきにする助詞(準体助詞)。上代に用いられた。人目  
を多み 人目が多いので。「み」は、原因・理由を表す接尾語で、多くは  
〔名詞+間投助詞〕を「十形容詞の語幹+「み」で「くノガクノデ」の意。  
まねく行かば しばしば行ったら。人知りぬべみ きっと人が知るだ  
らうから。「ぬ」は、完了の助動詞で確述を表す。「キツトダ」の意。  
「べみ」は、推量の助動詞「べし」の語幹に、原因・理由を表す接尾語「み」  
がついたもの。さねかづら 、「のちもあふ」に係る枕詞。「さねかづら」  
はつる性の低木。「びなんかづら」とも呼ばれ、つるが伸びて先でまた会  
うところから、「のちもあふ」に係る枕詞となった。大舟の 、「思い頼  
む」に係る枕詞。玉かぎる 岩垣淵の 、「玉かぎる」は、「岩垣淵」に  
係る枕詞。「岩垣淵」は垣根のように岩がとり囲んだ淵。「玉かぎる」  
垣淵の 、「隠る」を導く序詞となつている。渡る日の 暮れぬるが  
ごと 、「次の「照る月の 雲隠るごと」とともに、「過ぎて去にき」に係る。  
沖つ藻の 、「なびく」に係る枕詞。もみち葉の 、「過ぐ」に係る枕詞。  
過ぎて去にきと 死んでいったと。玉梓の 、「使ひ」に係る枕詞。梓  
弓 、「音」に係る枕詞。音に聞きて 話に聞いて。言はむすべ せ  
むすべ知らに 、「どう言ったらよいか、どうしたらよいかわからず。「に」  
は、打消の助動詞「ず」の連用形で、上代に用いられた。千重の一重

も〓千分の一も。慰もる〓下二段動詞「なぐさむ」の連体形「なぐさむる」が変化したものといわれる。玉だすき 畝傍の山に 鳴く鳥の〓「玉だすき」はたすきの美称で「畝傍」に係る枕詞。たすきをうなじに「掛ける」ことを「うなぐ」と言うところから、「うね」に「掛く」に係る枕詞となった。「畝傍の山」は、奈良県橿原市にある山で大和三山の一つ。「玉だすき 畝傍の山に 鳴く鳥の」で、「声」を導く序詞となっている。「声も聞こえず」は、「声」は、亡き妻の声。玉梓の〓「道」に係る枕詞。「玉梓」は、三叉路などに立て、悪霊の侵入を防ぐほこ状の石柱。すべをなみ〓しかたなく。「すべ」は手段・方法。「な」は、形容詞「なし」の語幹。「名詞十間投助詞」を〓十形容詞の語幹十接尾語「み」の用法で、「み」は原因・理由を表す。袖を振りつる〓袖を振るのは愛情の表現で、別れを惜しんだりするときにする。恋しさのあまり、生きてゐる者に別れを告げるように袖を振ったのであろう。また、生き返ることを願う呪術的な行為と解釈する説もある。「そ」は係助詞「ぞ」で、上代では清音であった。「そ……つる」で係り結びとなっている。もみちを茂み〓紅葉が茂っている。「名詞十間投助詞」を〓十形容詞の語幹十接尾語「み」の用法で、「み」は原因・理由を表す。惑ひぬる〓迷ってしまった。死者を山中に葬ったのを、死者みずから山中に迷い込んだものと表現したもの。知らずも〓「も」は、詠嘆を表す終助詞で上代に用いられた。散りゆくなへに〓散ってしまうとともに。あひし日思ほゆ〓妻に会った日のことが思い出される。

### 〓解説

内容的に三つの部分から構成され、会うこともままならない妻を、人知れず恋慕していたこと、愛する妻が死んだと知らされ、心が迷い乱れたこと、じつとしておれずに軽の市に出て、妻の幻影を追い求めることが叙述されている。人麻呂の特色である、枕詞、序詞、対句などの修辭技法が使用され、愛する妻を亡くした、どうすることもできない切実な悲しみが効果的に歌われている。

「惑ひぬる」という表現には、まだ妻が山中で迷いながらも生きてゐるのではないかという人麻呂の気持ちが含まれており、妻への深い恋慕の情が伝わってくる。

心を静めて落ち着いた今でも、使いの者を見ると、妻と会った懐かしい日々が人麻呂の心によみがえり、いつまでも尽きることのない妻への追慕の情がわき上がって来るのである。

〈文法〉助動詞「ず・る・らる」

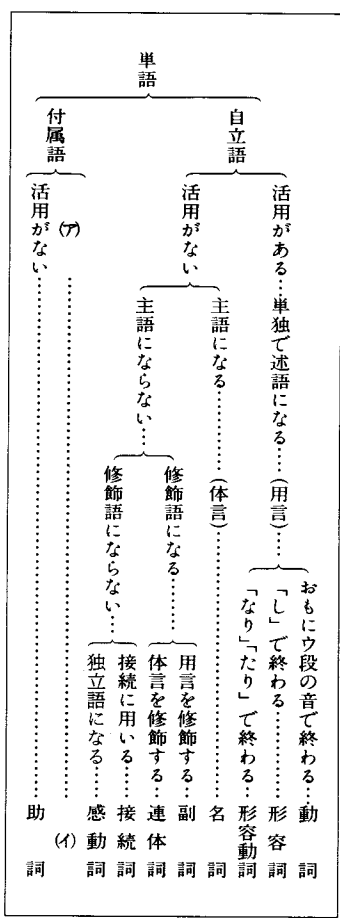
今年度の文語文法は、助動詞・助詞・敬語に重点をおいて学習します。まず、今月から、十回にわたって助動詞を取り上げます。助動詞の学習の基本は、「意味・活用・接続」です。この三つが理解できたかどうかを確かめながら学習しましょう。きょうの学習は、次のとおりです。

- ◎ (1) 打消 (2) 受身・尊敬・自発・可能の助動詞について、それぞれの意味・活用・接続を理解する。

復習トレーニング

解答は巻末にあります

1 次の品詞分類表の(ア)(イ)にあてはまる語句を書きなさい。



(ア) (イ)

答え合わせをしたら、次に一つ一つの助動詞についての学習に入りましょう。

助動詞 ず 打消の助動詞

▼意味 「ず」は打消を表す助動詞で、動作や状態などを否定するときに用いられる。現代語の「……ナイ」にあたる。

▼活用

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ず	ず(ず)	ず	ず	ぬ	ね	○
	ざら	ざり	○	ざる	ざれ	ざれ

▼接続 「ず」は、活用語の未然形につく。

↓この日の終わりに詳しい説明がついています。トレーニングのあとで読んで確認しておきましょう。

それでは、トレーニングで、意味・活用・接続の三点を確認していきましょう。



1 次の——線部の助動詞は、どんな意味を表すか、書きなさい。

(1) よき人は怪しきことを語らず。

立派な人は、確かでないことを話さない。

(徒然草・七三段)

——口語訳をするのではないことに注意しましょう。

2 打消の助動詞「ず」の活用表を完成させなさい。

ず	( )		○			○
基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形

3 次の——線部の助動詞の活用形を書きなさい。

——複雑な活用です。繰り返し声を出しながら、完全に覚えてしまいましょう。

(1) 植ゑし植ゑば秋なきときや咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめ

や

(伊勢物語・五一段)

しつかりと植えさせしならば、秋の来ないときには咲かないだろうが(秋は必ず来るから菊の花はきつと美しく咲くはずだ)。たとえその花が散っても、根まで枯れるだろうか(枯れずに毎年美しく花を咲かすだろう)。

(2) 風波やまねば、なほ同じ所に泊れり。

風波がやまないのに、やはり同じ所に(船は)停泊している。

(土佐日記)

(3) 法師ばかりうらやましからぬものはあらし。

法師くらいうらやましくないものはあるまい。

(徒然草・一段)

(4) 今日<sup>けふ</sup>は空曇りても影うつらず。

きょうは空が曇っていて、ものの影ができない。

(奥の細道・須賀川)

(5) 声よく妙にして、他人の声及ばざりけり。

声が美しく優れていて、他人が競争しても及ぶところではなかった。

(梁塵秘抄)

——活用形を考えるときには、いつも下に続く語に注意します。(2)の「ば」は確定条件を表します。口語訳で確認しておきましょう。

4 次の「——」の中の、打消の助動詞「ず」を適切な形に活用させて、

書きなさい。

(1) 見「ず」む世までを思ひおきてむこそ、はかなかるべけれ。

見ることはない(自分の死後の)世のことまで、思いはからつておくというのは、むなしことだろう。

(徒然草・二五段)

(2) 生きとし生けるもの、いづれか歌をよま〔ず〕ける。

(古今集・仮名序)

この世に生を受けているもので、どれが歌を詠まなまいということがあろうか。

(3) 京には見え〔ず〕鳥なれば、みな人見しら〔ず〕。

(伊勢物語・九段)

京では見られない鳥なので、だれも見知らない。

(4) 船の人も見え〔ず〕なりぬ。

(土佐日記)

船に乗っている人も(遠くなり)見えなくなりました。

(5) 風の吹くことやま〔ず〕ば、岸の波立ち返る。

(土佐日記)

風の吹くことがやまないので、岸の波が寄せては返る。

—— 下についている語に注目して、どのように活用させるか考えます。分からなければ、答えを見て確認しておきましょう。(5)の「ば」は確定条件を表します。

5 次の、助動詞「ず」が接続している——線部の語の品詞と活用形、および基本形を答えなさい。

(1) 筆をとどめて記さず。

筆を留めて記さなかった。

(奥の細道・出羽三山)

(2) 珍しくありがたきものは、よからぬ人のもて興ずるものなり。

(徒然草・一三九段)

めづらしく、めつたにないようなものは、たいしたことのない人が喜ぶものである。

(3) 思ひ出すとは忘るるか 思ひ出さずや忘れねば

(閑吟集)

思い出すというのは、忘れるからか。思い出すわけではないだろう、忘れなければ。

(4) いと若き男の、月影に色あひさだかならねど、

(徒然草・四四段)

たいそう若い男の、月の光で色あいはつきりわからないが、

—— 「ず」が何形に接続するかわかりましたね。

6 ——線部に注意して、「」の中の語を適切な形に活用させて、書きなさい。

(1) ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水に〔あり〕ず。

(万丈記)

川の流れは絶えることなく、それでいて水はもとの水ではない。

(2) 松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭・西湖を「恥づ」ず。  
(奥の細道・松島)

松島は日本第一の好風景であり、中国の名勝の洞庭や西湖と比べても見劣りがしない。

(3) この理を「知る」ざるなり。  
(徒然草・九一段)

この道理を知らないのである。

(4) 荒れにけりあはれいく世の宿なれやすみけむ人の訪づれも「す」ぬ  
(伊勢物語・五八段)

なんと荒れてしまったことだろう、この家に住んでいた人はどうしてしまったのか、とんと訪ねもしてくれない。

(5) 内のさまは、いたく「すさまじ」ず、  
(徒然草・一〇四段)

(その家の) 中の様子は、ひどく荒れて趣がないというのではなく、

7 次の——線部の助動詞の意味と活用形を答えなさい。

(1) 身死して財残ることは、智者のせざるどころなり。

自分の死んだ後に財産が残っているなどということは、賢い人のしないことである。  
(徒然草・一四〇段)

[ ] [ ] [ ] [ ]

(2) いはば朝顔の露に異ならず。  
たとえて言うなら、朝顔の露と同じである。  
(方丈記)

(3) 世の中をうしとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば  
(万葉集・巻五)

この世の中をつらい、身も細るようだと思っけれど、どこかへ飛んでいってしまうこともできない。鳥ではないのだから。

(4) 神鳴るさわぎに、え聞かざりけり。  
(伊勢物語・六段)

雷鳴のやかましい音で聞くことができなかった。

(5) この心をも得ざらむ人は、物狂ひとも言へ、  
(徒然草・一二二段)

この気持ちさえ理解しないような人は、(わたしを) 物狂いとも言え、

「ず」の活用は複雑ですから、活用形は下につく語に注意して考えます。

「ず」の助動詞の意味・活用・接続は、理解できましたね。次は、「る」「らる」についての学習です。

助動詞 る・らる 自発・可能・受身・尊敬の助動詞

▼意味 「る」「らる」は、次のような意味を表す。

- (1) 自発 動作がしぜんにそうなる意を表す。現代語の「……レル」「……ラレル」「(ひとりで) ……レル」にあたる。
- (2) 可能 動作ができる意を表す。現代語の「……レル」「……ラレル」「……デキル」にあたる。
- (3) 受身 他から動作や作用を受ける意を表す。現代語の「……レル」「……ラレル」にあたる。
- (4) 尊敬 動作の主に対する敬意を表す。現代語の「……レル」「……ラレル」「……ナサル」「オ……ニナル」にあたる。

▼活用

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ

(自発・可能には命令形がない。)

▼接続 「る」は、四段活用・ナ行変格活用(ナ変)・ラ行変格活用(ラ変)の動詞の未然形につき、「らる」は、それ以外の動詞の未然形につく。

↓この日の終わりに詳しい説明がっています。トレーニングのあとで読んで確認しておきましょう。

では、トレーニングをしながら、意味・活用・接続を覚えましょう。

トレーニング

解答は巻末にあります

⑧ 次の——線部の助動詞は、どんな意味を表すか、書きなさい。

(1) なほ梅のにほひにぞ、いにしへのことも立ちかへり恋しう思ひ出でらるる。  
(徒然草・一九段)  
何といつても梅の香りにこそ昔のことも、その当時に返って、ひとりでになつかしく思い出されるものだ。

(2) 木曾殿は信濃より、巴、山吹とて、二人の便女をぐせられたり。  
(平家物語・木曾最期)

(3) なかなかもの思ひ乱れて臥したれば、とみにしも動かれず。  
(源氏物語・松風)

(4) 上手の中にまじりて、そしり笑はるるにも恥ぢず、

(徒然草・一五〇段)  
(舌が未熟なうちから) 名人の中にまじりて、悪く言われ、笑われるのにも恥ぢずかしがらず、

口語訳をするのではないことに注意しましょう。

⑨ 自発・可能・受身・尊敬の助動詞「る」「らる」の活用表を完成させなさい。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
らる						
る						

繰り返して声を出しながら覚えてしまうのも、一つの方法です。また、「る」「らる」は下二段型の活用をしますから、下二段の動詞の活用を知っていれば簡単に覚えられますね。

10 次の——線部の助動詞の活用形を書きなさい。

(1) よしよし、また仰せられかゝることもぞ侍る。  
(枕草子・八段)  
まあよろしい。また何か(難題でも)おっしゃられては、たいへんです。

(2) 長らえばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき  
(新古今集・雑下)  
生き長らえたなあ、また(同じように)このごろがなつかしく思い出されるのだろうか。辛いとおもった(昔の)世が、今は恋しく思われる。

(3) 大方は、家居にこそ、ことごまはおしはからるれ。  
(徒然草・一〇四段)  
一般に、その住まいによって、(主人の)心の様子は推測されるものだ。

(4) うち棄てらるるもことわりなれど、  
(源氏物語・蓬生)  
見捨てられてしまうのも、もつともだけれども。

(5) 「夜ざりはとく」と仰せらる。  
(枕草子・一八四段)  
「夜分は早く(おいでなさい)」とおっしゃる。

(6) 角三つ生ひたる鬼になれ さて人に疎まれよ  
(梁塵秘抄)  
角が三本生えた鬼になれ。そうして、人々にきらわれなさい。

活用形を考えるときには、いつも下に続く語に注意します。また、(3)は係り結びに注意します。

11 「」の中の自発・可能・受身・尊敬の助動詞「る」「らる」を、適切な形に活用させて書きなさい。

(1) 大井の土民に仰せて、水車をつくらせ「らる」けり。  
(徒然草・五一段)  
大井の地元の住人にお命じになり、水車をお造らせになった。

(2) 越の白山思ひやら「る」雪の中に、  
(源氏物語・蓬生)  
越の国の白山がしぜんと思ひ出されるほどの雪の中で、

(3) 門をひらか「る」ずとも、このきはまで立ち寄りせ給へ。

門をお開けにならないでも、この近くまでお寄りください。

(平家物語・忠度都落)

(4) 右近の内侍召して、「かくなむ」と仰せ「らる」ば、わらひののし

るを、

(中宮が)右近の内侍をお召しになつて、「これこれしかじかである。」とおっしゃるので、(皆が)笑いさ

(枕草子・九段)

(5) おどろおどろしう追ひちらして出で「らる」。

大げさに、お先払いなどをして、お出かけになる。

(繪巻日記)

(6) 「内裡より召す。すみやかに参ら「る」「と仰せふくめども、

「内裏からお召した。すみやかに参上しなさい」と言いふくめなされたが、

(保元物語・上)

下についている語に注目して、どのように活用させるか考えます。分からねければ、答えを見て確認しておきましょう。(4)の「ば」は確定条件を表します。(6)は文脈から考えて判断します。

種類と活用形を答えなさい。

(1) なべてならぬ法ども行はるれど、さらにそのしるしなし。(方丈記)

特別な加持・祈禱などが行われたが、いっこうに効きめはなかった。

(2) ありがたきもの しょうとにほめらるる婿。

めったにないものは、娘の父にほめられる婿。

(枕草子・七五段)

(3) かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、

このようにしても住めるものなのだなど、しみじみと感じ入って見ているうちに、

(徒然草・二二段)

(4) 弓矢して射られじ。

(月の國の人を)弓矢でもって射ることはできないだろう。

(竹取物語)

(5) さらにこそ信ぜられね。

まったく信じることはできない。

(天鏡・序)

「る」「らる」は、同じ活用形に接続するが、活用の種類によってどちらが接続するか決まっていることに注意しましょう。

13 次の動詞には、助動詞「る」「らる」のどちらが接続するか、例にならって書きなさい。

12 次の、助動詞「る」「らる」が接続している——線部の語の、活用の

例 待つ「待たる」

- |     |    |      |    |
|-----|----|------|----|
| (1) | 書く | (2)  | 出づ |
| (3) | 死ぬ | (4)  | 読む |
| (5) | 試む | (6)  | 見る |
| (7) | 蹴る | (8)  | す  |
| (9) | 来  | (10) | あり |

14 次の「」に助動詞「る」「らる」のいずれかを、適切に活用させて入れなさい。

(1) さやうの所にてこそ、万に心づかひせ」。。(徒然草・一五段  
そのような所でこそ、万事にひとりてに気を配るようになるものだ。

(2) 「旅宿花」といふ題にて、一首の歌をぞよま」たる。  
〔平家物語・忠度最期〕

〔旅宿花〕という題で、歌を一首お詠みになられた。

(3) 御胸つとふたがりて、つゆまどろま」ず。  
〔源氏物語・桐壺〕  
(帝は悲しみで)胸がつまって、少しもお休みになれなかった。

(4) 御覧じだに送らぬおほつかなさを、言ふ方なく思ほさ」。  
〔源氏物語・桐壺〕

(身分が高いために)見送ることのできないその気がかりを、言いようもなく(悲しく)お思いになられる。

(5) 「御装束は果てぬるにや」と仰せ」に、  
〔大極殿の〕ご装束は済んだのか」とおっしゃられるので、  
(大鏡・道長)

「る」「らる」のどちらが入るかは、上にくる動詞の活用の種類で判断します。さらに、どのように活用させるかは、原則として、下に続く語から考えます。

15 次の——線部の助動詞の意味と活用形を答えなさい。

(1) 人々に、「遊びものどもまるらせよ」と仰せられければ、  
(大鏡・伊尹)

人々に「おもちゃを献上なさい」とおっしゃったので、

(2) 来し方行く末思しめされず、よろづのことを、泣く泣く契りのた  
まはすれど、  
(源氏物語・桐壺)  
(帝は)過ぎ去ったことも、これから先のこともお考えになれず、さまざまなことを泣く泣くお約束なさるけれど、

(3) 住みなれしふるさとかぎりなく思ひ出でらる。  
〔更級日記〕  
住みなれたふるさとが、このうえなく(なつかしく)思い出される。

(4) 元輔もとすけが後のちといはるる君きみしもや今宵こよひの歌にはづれてはをる

(あの有名な歌人の) 元輔の子といわれているあなたが、今夜の歌の会の仲間からはずれているとは。

(枕草子・九九段)

[ ] [ ] [ ] [ ]

(5) 子故ゆゑにこそ、万よろづのあはれは思ひ知らるれ。

子によってこそ、さまざまな情愛は思い知るものだ。

(徒然草・一四二段)

[ ] [ ] [ ] [ ]

意味は、文脈から考えて、判断します。(5)は係り結びに注意します。

活用形を考えるとときは、いつも下に続く語に注意しましょう。

よくがんばりましたね。次はきょうのまとめのトレーニングです。

### まとめのトレーニング

解答は巻末にあります

1 次の——線部の助動詞の意味と活用形を答えなさい。

(1) 人の国くににても、なほかかることなむやまざりける。

他国においても、やはりこのようなことはやまなかつたそうだ。

(伊勢物語・一〇段)

[ ] [ ] [ ] [ ]

(2) あらざらむ後のちしのべとやそでの香かを花たちばなにとどめ置きけむ

死んだ後に思慕せよと、そでの香りを花たちばなに残しておいたのだろうか。

(新古今集・哀傷)

[ ] [ ] [ ] [ ]

(3) 知らぬ道みちをも問へば迷はず

知らない道でも(だれかに)尋ねれば迷わない。

(閑吟集)

[ ] [ ] [ ] [ ]

(4) 風体ふうていはめづらしからねども、わづらはしくもなく、

様子は目新しいところはないが、ごたごたしたところもなく、

(風姿花伝)

[ ] [ ] [ ] [ ]

(5) この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。

この人々の深い厚意は、この(深い)海にも劣らないだろう。

(土佐日記)

[ ] [ ] [ ] [ ]

2 次の——線部の助動詞の意味と活用形を答えなさい。

(1) みな人々よみいだして、よしあしなどさだめらるるほどに、

人々が皆、歌を詠み終わって、(内大臣が) そのよしあしを判定になるうちに、

(枕草子・九九段)

[ ] [ ] [ ] [ ]

(2) 恋しからむことの耐へがたく、湯水飲まれず、同じ心になげかしがりけり。

(竹取物語)



(使われる人々もかぐや姫が月の国へもどつたら、姫を恋しく思うだろうことに耐えられず、湯水も飲めず。(翁夫婦と)同じ心になつて嘆いていた。

( ) ( ) ( ) ( )

(3) 梶原たばかられぬと思ひけむ、  
梶原はだまされたと思つたのだろうか。 (平家物語・宇治川先陣)

( ) ( ) ( ) ( )

(4) 興なきことを言ひても、よく笑ふにぞ、品のほど計られぬべき。  
(徒然草・五六段)

つまらないことを言つても、よく笑うことで、(その人の)品位のほどがおのずと計られてしまうだろう。

( ) ( ) ( ) ( )

(5) 験あらむ僧たち、祈り試みられよ。  
効験あらたかな僧たち、ためにしにお祈りくださいませ。 (徒然草・五四段)

( ) ( ) ( ) ( )

きよの学習は、これで終わりです。きちんと答え合わせをしておきましょう。お疲れさまでした。



◆ず

**意味** 打消の助動詞「ず」は、動作・作用・状態・気持ちなどを、「……しない」「……でない」と否定する場合に用いられます。現代語の「……ナイ」にあたります。

**例** 文を書きて、やれども、返りごともせず。

(竹取物語)

**例** (貴公子は) 手紙を書いて送るのだが、(かぐや姫は) 返事も書かない。

**例** 日入りはてて、風の音むしのねなど、はたいふべきにあらず。

(枕草子・一段)

**例** 日がすつかり沈んで、風の音や虫の音がするのなども、また言うまでもない(言うまでもなく趣がある)。

**活用** 助動詞「ず」には、「(ず)・ず・ぬ・ね・〇」「(ず)・ざり・〇・ざる・ざれ・ざれ」のように、二通り(正確には「な(に)・〇・ぬ・ね・〇」「(ず)・ず・ず・〇・〇・〇」「(ざ)・ざり・〇・ざる・ざれ・ざれ」の三通り)の活用

があります。複雑ですから、よく注意して覚えておくようにしましょう。

なお、「ざり」の列は、「ず」の連用形にラ行変格活用の動詞「あり」がついてできたもので、これは、他の助動詞や助詞への接続を補うために生まれたものと考えられます。

**接続** 打消の助動詞「ず」は、活用語の未然形に接続します。

**例** 日一日、風やまず。  
(土佐日記)

**例** 一日中、風がやまない。

● 「やま」は「やむ」の未然形

**例** 下戸ならぬこそ男はよけれ。

(徒然草・一段)

**例** 全く酒が飲めないというのではないのが、男としてはよいのだ。

● 「なら」は「なり」の未然形

◆る・らる

**意味** 助動詞「る」「らる」は、次の四つの意味を表します。これは現代語の「れる」「られる」と、ほぼ同じです。

(1) **自発** そうするつもりがなくても、動作や状態がしげんにそうなる意を表します。現代語の「……レル」「……ラレル」にあたりますが、「ひとりで」「しげんに」ということばを添えると、自発の意味がいつそうはつきりします。

す。

**例** 暁にはとく下りなむと急がる。

(枕草子・一八四段)

**例** 夜明け前になると、早く退出したいとひとりりで気がせいでくる。

(2) **可能** 動作ができる意を表します。現代語の「……レル」「……ラレル」……デキル」にあたります。

なお、平安時代では、可能の意味を表す「る」「らる」は、助動詞「ず」、助詞「か(かは)」「や(やは)」などの打消、反語の表現を伴い、「できない」ことを表す場合に用いられるのがふつうでした。

**例** ものはすこし覚ゆれども、腰なむ動かれぬ。

(竹取物語)

**例** 多少、意識はあるが、腰は動かすことができない。

(3) **受身** 他から動作や作用を受ける意を表します。現代語の「……レル」「……ラレル」にあたります。

受身は、ふつう、人や動物だけに用いられます。例外もありますが、古文では、原則として無生物は受身の主語になりません。無生物が受身の主語と考えるような文でも、示されていない動作の主に対する、(4)の尊敬の用法である場合も少なくないので、注意が必要です。

**例** 人にいとはれず、よろづ許されけり。

(徒然草・六〇段)

**例** (非常識な行動をしたが) 人にきらわれず、万事許された。

(4) **尊敬** 動作をする人に対する敬意を表し、現代語の「……ナサル」「オ……ニナル」「……レル」「……ラレル」にあたります。

なお「仰す」「思す」「思しめす」などの敬語動詞につくときは、その敬意を強めます。敬意の対象となる動作の主が主語として示されていない場合、(3)の受身とまちがえやすいので、注意しましょう。

**例** 入道殿は、「いと不便なることをも申さるるかな」と仰せられながら、

(大鏡・伊尹)

**例** 入道殿(道長)は、「たいそう具合が悪いことを申されるものだね。」とおっしゃりながらも、

**例** 格子も上げられたれば、例の物の怪の入り来たるなめり。

**例** 格子もおお上げになったので、いつもの物の怪が入ってきたのでしょ。

(源氏物語・横笛)

**活用** 助動詞「る」「らる」の活用は、動詞「生まる」「枯る」などの活用と同じ下二段型で、規則的に変化します。

ただし、自発、可能の意味で用いられるときは、「る」「らる」とともに、命令形には活用しません。

**接続** 助動詞「る」「らる」は、意味も活用型も同じですが、接続に違いがあります。

す。

・「る」は、四段・ナ変・ラ変の動詞の未然形に接続します。

例 九月二十日のころ、ある人に誘はれ奉りて、  
(徒然草・三段)

例 九月二十日のころ、ある方にお誘いいただいて、

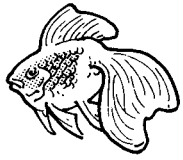
● 「誘は」は「誘ふ」の未然形

・「らる」は、四段・ナ変・ラ変を除く動詞の未然形に接続します。

例 「葛城の神もしばし」など仰せらるるを、  
(枕草子・一八四段)

例 「葛城の神も(もう)しばらく(いなさい)」などとおっしゃるので、

● 「仰せ」は「仰す」の未然形



# 〈文法〉助動詞「き・けり」

きょうは、助動詞の学習の二日めです。一日めに取り上げた打消と、受身・尊敬・自発・可能の助動詞については、十分に理解できましたか。きょうは、次のことを目標にして、学習を進めましょう。

◎過去の助動詞について、その意味・活用・接続を理解する。

## 復習トレーニング

解答は巻末にあります

① 次の——線部の助動詞の意味を答えなさい。

(1) 桃李<sup>とちり</sup>の言はねば、たれとともにか昔を語らん。  
(徒然草・二五段)

(2) さらに許されぬによりてなむ、かく思ひ嘆き<sup>はな</sup>侍る。  
(竹取物語)

(1) 「 」 「 」 「 」

(2) 「 」 「 」 「 」

打消の助動詞「ず」、受身・尊敬・自発・可能の助動詞「る」「らる」と覚えてしましましょう。  
それでは、きょうの学習に入ります。気持ちを引き締めて、さあ、スタートです。

### 助動詞 き 過去(回想)の助動詞

▼意味 「き」は、過去の意味を表す助動詞。多くの場合、自分の経験した過去のことからをふりかえって(回想して)述べるときに用いられる。現代語の「……タ」にあたる。

#### ▼活用

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
き	(せ)	○	き	し	しか	○

未然形の「せ」は、ほとんど「……せば……まし」「……だしたら……だろうのに」の意)の形でしか用いられない。

#### ▼接続 「き」は活用語の連用形につく。

ただし、カ変の動詞「来」と、サ変の動詞「す」には、特別のつき方をする。

サ 変(す)	カ 変(来)	
せ し か	こ し か	未 然 形
し き	き し か	連 用 形

↓この日の終わりに詳しい説明がついています。トレーニングのあとで読んで確認しておきましょう。

それでは、トレーニングで、意味・活用・接続を確認していきましょう。

### トレーニング

解答は巻末にあります

1 次の——線部の助動詞は、どんな意味を表すか、書きなさい。

- (1) 京より下りししときに、みな人、子どもなかりき。  
都から(土佐の国へ)下ったときには、(同行の)人はみんな、子どもがなかった。 (土佐日記)

—— 口語訳をするのではないことに注意しましょう。

2 過去の助動詞「き」の活用表を完成させなさい。

基本形	き
未然形	( )
連用形	○
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	○

—— 不規則な活用です。繰り返し声を出しながら、完全に覚えてしまいう。

3 次の——線部の助動詞の活用形を書きなさい。

- (1) 法師になり給ひにししこそあはれなりしか。  
法師になってしまわれたのは、しみじみと悲しかった。 (枕草子・三五段)

- (2) 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを。  
(恋しいと)思いながら寝るので(あの人が)夢に見えたのかしら。夢とわかっていたら、目を覚まさないかったのに。 (古今集・恋二)

- (3) あるときには、かてつきて草の根をくひものとき。  
あるときには、食糧がなくなつて草の根を食べ物にした。 (竹取物語)

—— 活用形を考へるときには、いつも下に続く語に注意します。(1)は、係り結びに注意します。(2)の「ば」は仮定条件を表します。



す	く(来)	あり	減ぶ	捨つ	学ぶ	(例)思ふ	き
〔 〕	○	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 思ひ 〕	き(終止形)
〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 思ひ 〕	し(連体形)
〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 思ひ 〕	しか(已然形)
〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 思ひ 〕	しか

7 次の——線部の助動詞の意味と活用形を答えなさい。

(1) いとあはれなることも侍りき。

たいそうかわいそうなこともありました。

(方丈記)

〔 〕

(2) わがまたぬ年は来ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず

わたしが待たない年はやってきたけれど、冬草が枯れて姿を見せないように、わたしから離れていった人は(いくら待っていても)便りもくれない。

(古今集・冬)

〔 〕

(3) 「かへすがへす口をしき御心なり」と言いたりしこそ、をかしかりしか。

「ほんとうに情けないお心だ」と(手紙に)言つてあつたのは、おもしろいことだつた。

(徒然草・三一段)

〔 〕

(4) こよなく心とまり侍りき。

このえなく心がひきつけられた。

(源氏物語・帚木)

〔 〕

(3)は、係り結びに注意します。

次の学習は、「けり」についてです。「き」と比較しながら、理解することが大切です。

助動詞 けり 過去の助動詞

▼意味 「けり」は、次のような意味を表す。

(1) 過去 人から伝聞した過去の事実を回想して述べる場合に用いられることが多い。現代語の「……タ」「……タソウダ」「……トイウコトダ」にあたる。

(2) 詠嘆 あることがらに初めて気がついたという驚きや感動などの気持ちを表す。現代語の「……タコトヨ」「……ナノダナア」にあたる。

▼活用

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
けり	(けら)	○	けり	ける	けれ	○

▼接続 「けり」は、活用語の連用形につく。

↓この日の終わりに詳しい説明がついています。トレーニングのあとで読んで確認しておきましょう。

では、トレーニングで、意味・活用・接続を確認しましょう。

トレーニング

解答は巻末にあります

8 次の——線部の助動詞は、どんな意味を表すか、書きなさい。

(1) 暗けれど主を知りて、飛び付きたりけるとぞ。  
(飼い犬が 暗かったのに主人だと知って、飛び付いたことだ。) (徒然草・八九段)

[ ]

(2) 「あさましよう、犬なども、かかる心あるものなりけり」と笑はせ給ふ。

「驚いたことに、犬などでもこのような心があるものなのだなあ」とお笑いあそばされる。 (枕草子・九段)

[ ]

口語訳するのではないことに注意しましょう。

9 過去の助動詞「けり」の活用表を完成させなさい。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
けり	( )	○				○

「けり」はラ変型の活用をしますから、ラ変の動詞の活用を知っていれば、簡単に覚えられます。

10 次の——線部の助動詞の活用形を書きなさい。

(1) 大井の土民に仰せて、水車をつくらせられけり。  
大井の地元の住民にお命じになり、水車をお造らせになった。 (徒然草・五一段)

[ ]

(2) 念じて射むとすれども、外さまへ行きければ、あれも戦はで、心地ただ痴しれに痴れて、まもり合へり。  
かまんで射ようとするのだが、(放った矢は)見当違いのところへ行ってしまうので、荒々しく戦いもしないで、気分はただもうぼうつとなつて、皆でじつと見つめていた。 (竹取物語)

[ ]

(3) 目には見て手にはとられぬ月のうちの桂かづらのごとき君にぞありける

目には見えて、手には取ることでできない、月の中の桂のようなあなたなのだね。 (伊勢物語・七三段)



活用形を考えるときには、いつも下に続く語に注意します。(2)の「ば」は確定条件を表します。また、(3)は、係り結びに注意します。

Ⅱ 次の「        」の、助動詞「けり」を適切な形に活用させて、書きなさい。

(1) 和歌、主も客人も、異人もいひあへり「けり」。  
やまとうた あるじ まらんど こひひと  
和歌を、主人も客も、また他の人々もみな詠みかわした。 (土佐日記)

(2) 坊のかたはらに、大きな榎の木のあり「けり」ば、人、「榎木僧正」  
えのきのそうじやう  
とぞ言ひ「けり」。  
僧坊のそばに大きなえのきがあったので、人々は(その僧正を)「榎木僧正」とよんだそうだ。 (徒然草・四五段)

下についている語に注目して、どのように活用させるか考えます。分からなければ、答えを見て確認しておきましょう。(2)の「ば」は、確定条件を表します。また、係り結びにも注意してください。

Ⅲ 次の、助動詞「けり」の接続している——線部の語の品詞と活用形、および基本形を書きなさい。

(1) ある人、清水へ参りけるに、  
ある人が、清水寺へ参詣したときに、  
(徒然草・四七段)

(2) かの巻物のうちに、さりぬべき歌いくらもありけれど、

あの巻物の中には、そうとうすぐれた歌がいくらでもあったけれど、 (平家物語・忠度都落)

(3) 唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れあしかりけれど、

唐土(中国)でも、こんなことが原因で、国政がみだれ悪いことになったのだと、 (源氏物語・桐壺)

(4) まだいと若うて、後のただにおはしけるときとや。  
(后が) まだずつと若くて、后がふつうの身分でいらつしやったときのことだというよ。 (伊勢物語・六段)

(5) まどろむ隙もなきうちに、あらたなりける夢の告げと

うとうとしたかしないかのうちに、あらたかな夢のお告げがあったと (謡曲・紅葉狩)

「けり」が何形に接続するかわかりましたね。

Ⅳ ——線部に注意して、「        」の中の語を適切な形に活用させて、書きなさい。

(1) 見わたせば花も紅葉も〔なし〕けり浦の苦屋とまやの秋の夕暮れ

見渡せば、(美しい)花も紅葉もないことであるなあ。入り江の苦屋(ある辺りの)秋の夕暮れは。

(新古今集・秋上)

(2) 水をも手してささげて〔飲む〕けるを見て、

水さえも手でもってすくいあげて飲んでいたので、

(徒然草・一八段)

(3) わら一束〔あり〕けるを、夕ゆふにはこれに臥ふし、朝あしたには〔をさむ〕けり。

わらが一束あったのを、夕暮れになるとこれに寝て、朝になると片つけたそうだ。

(徒然草・一八段)

(4) 佐々木かしまつて〔申す〕けるは、

佐々木がかしまつて申し上げるには、

(平家物語・生ずきの沙汰)

14 次の——線部の助動詞の意味と活用形を答えなさい。

(1) ときはなる松の緑も春くればいまひとしほの色まさりけり

一年じゅう色が変わらない松の緑でも、春が来たのでさらにいちだんと色が鮮やかになったことだなあ。

(古今集・春上)

(2) 梶原かきはら、おしならべてやくむ、むかう様さまにやあておとすと思ひける

が、まづ詞ことばをかけけり。

(平家物語・生ずきの沙汰)

梶原は、(自分の馬を相手の馬に)並べて組みつこうか、正面から(馬を)ぶつけて落とそうかと思つたが、とりあえずことばをかけた。

(3) 「誠にさにこそ候まことひけれ。もとも愚かに候ふ」と言ひて、

「まことにそのとおりでございしました。ほんとうに愚かでございます」と言つて、

(徒然草・四一段)

(4) 橋を八つわたせるによりてなむ、八橋やっはしといひける。

(その場所は)橋が八つ渡してあるゆえに、八橋といつた。

(伊勢物語・九段)

(3)(4)は、係り結びに注意します。

次に、まとめのトレーニングで、もう一度確認しておきましょう。

まとめのトレーニング 解答は巻末にあります

1 次の——線部の助動詞の意味と活用形を答えなさい。

(1) 西の京に御乳母めのおとの住み侍る所になむ、はひ隠れ給へりし。

西の京の乳母の住んでいました所に、ひそかに隠れていらつしゃつた。

(源氏物語・夕顔)

( ) ( ) ( ) ( )

(2) まことに、蚊のまつげの落つるをも聞きつけ給ひつべうこそありしか。  
ほんとうに、蚊のまつげが落ちる（ほどかすかな）音までも聞きつけなせることができそうなほどであった。  
(枕草子・二七五段)

( ) ( ) ( ) ( )

(3) さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。  
そのような人が（賀茂の）祭を見物した様子は、たいへん珍しいものであった。  
(徒然草・一三七段)

( ) ( ) ( ) ( )

(4) 七珍万宝さながら灰燼となりにき。  
あらゆる種類の宝物がごとく灰になってしまった。  
(方丈記)

( ) ( ) ( ) ( )

(1)(2)は、係り結びに注意します。

2 次の——線部の助動詞の意味と活用形を答えなさい。

(1) ぬすびとなりければ、国の守にからめられにけり。

( ) ( ) ( ) ( )

盗人であったので、国守に、捕らえられてしまった。

(伊勢物語・一二段)

(2) 山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば

(古今集・冬)  
山里は（いつも寂しいが）特に冬がいちだんと寂しいことだよ。人の出入りも途絶えてしまったし、草も枯れてしまったと思うと。

( ) ( ) ( ) ( )

(3) 口惜しかりけるわざかな。  
残念なことをしたなあ。  
(大鏡・頼忠)

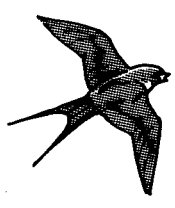
( ) ( ) ( ) ( )

(4) 明くれば尾張の国へこえにけり。  
夜が明けたので、尾張の国へ越えていつてしまった。  
(伊勢物語・六九段)

( ) ( ) ( ) ( )

(2)は、係り結びに注意します。

これで、助動詞についての二日めの学習は終わりです。一度覚えただけでは、すぐに忘れてしまいますから、時間を見つけては、繰り返しトレーニングすることが大切です。



◆き

**意味** 過去の助動詞「き」は、自分自身が直接経験したこと、あるいは、直接経験していないことでも、たしかに過去にあったこととして回想するときに用いられます。現代語の「……タ」にあたります。

例 鬼のやうなるもの出て来て殺さむとき。

(竹取物語)

例 鬼のようなものが出てきて(わたしを)殺そうとした。

なお、同じ過去の助動詞に「けり」がありますが、「けり」は、平安時代の物語や日記・随筆などでは、自分では直接経験しないで、人から伝聞したことを回想するときに用いられるのがふつうです。「き」と「けり」の使われ方の違いに注意して覚えるようにしましょう。

・き——直接経験したことの回想

・けり——伝聞したことの回想

**活用** 助動詞「き」は、特殊型の活用で、規則的に活用する語ではありません。ですから、「(せ)・○・き・し・しか・○」と繰り返し覚えるのがよいでしょう。

**接続** 「き」は、原則として、活用語の連用形に接続します。

例 死じ子、顔よかりき。

(土佐日記)

例 死んだ子は、顔がきれいだった。

●「よかり」は「よし」の連用形

なお、例外として、「来」(カ変)と「す」(サ変)には、次のように変則的に接続します。

例 見れば来て来し女もなし。

(伊勢物語・六段)

例 見ると、連れてきた女もない。

●「来」は「来」の未然形

この「来」と「す」の接続はやつかいですが、よく出てくる形なので、「こし・こしか／きし・きしか」「せし・せしか／しき」と覚えてしましましょう。そのうえで、「こ」は未然形、「き」は連用形、といったふうに覚えるのが能率的です。

◆けり

**意味** 助動詞「けり」は、過去や詠嘆の意味を表します。

(1) **過去** 過ぎ去った動作やことがらを表す場合に用いられます。特に、平安

時代の物語や日記・随筆などでは、自分では直接経験しないで、人から伝え聞いた過去のことからをふりかえって(回想して)述べるときに多く用いられます。現代語の「……タ」「……タソウダ」「……トイウコトダ」などにあたります。

例 いまは昔、竹取の翁といふものありけり。

(竹取物語)

例 今となつては昔のことだが、竹取の翁という者がいた(そうだ)。

(2) **詠嘆** 驚きや感動などの気持ちを表す場合に用いられます。今まで意識しなかったことがらに初めて気づき、驚いたり、感動したりした気持ちを表すことが多いのですが、ある事実を目の前にしての感情の動きや、過去から現在まで続いていることがらをしみじみと述べる場合にも用いられます。現代語の「……タコトヨ」「……ナノダナア」などにあたります。

なお、詠嘆を表す「けり」は、和歌でよく用いられます。

例 よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり

(古今集・春上)

例 (これまでは)遠くからばかりみごとだと、梅の花を賞美していたのだが、ほんとうに賞美しつくせないほどの梅の花と香りととは、折り取つての後に知ることが出来るものなのだなあ。

**活用** 助動詞「けり」の活用は、動詞「あり」「居り」などの活用と同じラ変型ですが、連用形・命令形はありません。

**接続** 過去の助動詞「けり」は、活用語の連用形に接続します。

例 むかし、男ありけり。

(伊勢物語・二段)

例 むかし、ある男がいた(そうだ)。

●「あり」は「あり」の連用形

例 つゆ御供の人は心得ざりけり。

(大鏡・師輔)

例 お供の人は、全く事情のみこめなかった。

●「ざり」は「ず」の連用形

〈漢文の基礎〉漢文の読み方

漢文の学習を始めて、すでに一年がたちました。基礎も固まり、そろそろ応用段階に進んで、高度な文章にいどむことも可能になったわけだ。それにもかかわらず、きょう「漢文の基礎」を学習するのは、なぜだと思えますか。

学校の授業でも、あるいはトレペの学習でも、「書き下し文」を作ったり、「口語訳」したりすることは、いつも欠かさずに練習しているはずだ。しかし、白文に「送りがな」や「返り点」をつけることは、一年の初めにしばらく練習しただけで、その後あまりやっていないのではないだろうか。その結果、漢文学習の最も基礎的な部分である「返り点」についての知識が、とかくあやふやになりがちなのです。

きょうは、初心に返って、「送りがな」や「返り点」のつけかたを復習します。退屈などとは思わずに、まずは虚心にしっかりと基礎を固めることに努めましょう。

送りがな・返り点

▼送りがなは、原則として、歴史的かなづかいを用い、漢字の右下に、必ずかたかなで、小さく書く。

▼「レ点」は、下の字からすぐ上の一字に返って読むことを示す。

例 得<sub>レ</sub>狐<sub>ヲ</sub>。(狐を得たり) ② ①

▼「一二点」は、二字以上離れた下から、上の字に返って読むことを示す。

例 見<sub>ニ</sub>南<sub>ノ</sub>山<sub>ヲ</sub>。(南山を見る) ③ ① ②

▼「上下点」は、同じ文中で「一二点」を一度以上使い、さらにそれをはさんで下から上に返って読むことを示す。

例 悪<sub>下</sub>称<sub>ニ</sub>人<sub>ノ</sub>之<sub>ヲ</sub>悪<sub>上</sub>者<sub>ヲ</sub>。(人の悪を称する者を悪む) ⑥ ④ ① ② ③ ⑤<sub>上</sub>

▼「レ点」「一二点」「上下点」を合わせて「返り点」という。

① 漢文には、日本語の用言の活用語尾にあたるものがなく、助詞・助動詞にあたる文字もほとんど用いません。そのため、漢文を訓読するときには、語と語との関係を明らかにするために、適切な日本語の助詞・助動詞や用言の活用語尾を、「送りがな」として補います。

② 漢文と日本語では、異なった文法をもち、語順もしばしば違っています。そのため訓読に際しては、漢文の語順を日本語の語順に直すために「返り点」を使います。

③ 「送りがな」と「返り点」を合わせて、「訓点」といいます。

——では、トレーニングで、これら既習の知識を確認しましょう。

### トレーニング

解答は巻末にあります。

1 ( ) の中の読み方にしたがって、次の漢文に「送りがな」をつけなさい。

(1) 大器 晩成。 (大器は晩成す。)

(2) 一挙 兩得。 (一挙にして兩得す。)

(3) 国破 山河在。城春 草木深。 (国破れて山河在り。城春にして草木深し。)

2 ( ) の中の読み方にしたがって、次の漢文に「送りがな」と「レ点」をつけなさい。

(1) 縁木 求魚。 (木に縁りて魚を求む。)

(2) 傍若無人。 (傍らに人無きがごとし。)

(3) 有備無憂。 (備へ有れば憂ひ無し。)

(4) 玉不琢不成器。人不学不知道。 (玉琢か

ざれば器を成さず。人学ばざれば道を知らず。)

(玉(という宝石)は、みがかなければ、りつばな器にならない。)

(同様に)人は、学ばなければ道理を知ることできない。

(5) 少年易老学难成。一寸光阴不可轻。

(少年 老い易く 学成り難し。一寸の光陰 軽んずべからず。)

▼「一寸光陰」は、短い時間のこと。

「レ点」は、(2)(4)(5)のように二つ以上連続して用いることもあります。ここで答えを合わせ、わからないところがないようにしましょう。

③ ( ) 中の読み方にしたがって、次の漢文に「送りがない」と「二点」をつけなさい。

(1) 疑心生暗鬼。(疑心 暗鬼を生ず。)

(2) 懸羊頭 売狗肉。(羊頭を懸けて 狗肉を売る。)  
(見掛けのりっぱな 羊の頭を見本にぶら下げて、(実際には粗末な 犬の肉を売る。)

(3) 得天下英才、教育之。(天下の英才を得て、之を教育す。)

—— (3)の「教育」のように、返って読む字が熟語の場合、その二字のあいだに「―」を入れて、返り点はその間につけます。

④ ( ) 中の読み方にしたがって、次の漢文に「送りがない」と「レ点」「二点」をつけなさい。

(1) 低頭思故郷。(頭を低れて 故郷を思ふ。)

(2) 百聞不如一見。(百聞は一見に如かず。)

(3) 不入虎穴、不得虎子。(虎穴に入らざれば、虎子を得ず。)  
▼この文では、「二点」を二度用いる。次の(4)(5)も同じ。

(4) 寧為鷄口、勿為牛後。(寧ろ鷄口と為るも、牛後と為る勿かれ。)

いっそ鶏のくちばしになってもよいが、牛のしりにはなるな。(小さくともその長になったほうが、大きいものあとにつくよりもまだ。)

▼「寧……勿く」は、「いっそ……してもよいが、くするな」の句形。

(5) 先即制人、後則為人所制。(先んずれば即ち人を制し、後るれば則ち人の制する所と為る。)

▼この文では、「レ点」と「二点」の組み合わせだった「ㄷ」の形が用いられる。「ㄷ」は、まず「レ点」で返り、次に「一」から「二」に返ることを示す。なお「為……所く」は、「……にくされる」の受身の句形。

—— ここで答えを合わせましょう。「訓点」だけでなく、いくつか重要な句形も出てきますが、これも合わせて復習しておきましょう。

—— 次は、「上下点」です。

### トレーニング

解答は巻末にあります

⑤ ( ) 中の読み方にしたがって、次の漢文に「送りがない」と「返り点」をつけなさい。

(1) 悪称人之恶者。(人の悪を称する者を悪む。)

(2) 客有能為鷄鳴者。(客に能く鷄鳴を為す者有り。)

▼「能」は、「よく……(す)」と読んで、「(能力上)……できる」の意味を表す。「鷄鳴」は、にわたりの鳴きまね。

(3) 勿以惡小為之。(惡の小なるを以て之を為すこと勿かれ。)

▼この文では、「レ点」と「上下点」の組み合わせだった「上」の形が用いられる。「上」は、まず「レ点」で返り、次に「上」から「下」に返ることを示す。「勿」は、「……(すること) なかれ」と読んで、禁止を表す。

(4) 不為兒孫買美田。(兒孫の為に美田を買はず。)

▼この文では、「上・中・下」が用いられる。次の(5)も同じ。

(5) 如揮快刀断乱麻。(快刀を揮って乱麻を断つが如し。)

鋭い刀で、もつれた麻を断ち切るようだ。(難問を明快に解決するたとえ。)

「上下点」は、必ずその間に「二点」をはさみ込んでいることに注意しよう。

ここで答えを合わせ、「訓点」(送りがな・返り点)についての知識を確実にものにしておきましょう。次は、再読文字を含んだ漢文で、「訓点」の学習を進めましょう。

### 6 ( ) ( ) の中の読み方にしたがって、次の漢文に「訓点」をつけなさい。

(1) 未聞好学者也。(未だ学を好む者を聞かざるなり。)

▼「未」は、「いまだ……ず」と読み、「まだ……しない」の意味を表す再読文字。なお再読文字は、書き下し文にするとき、一度めの読みは漢字のままで、二度めの読みをひらがなに改める。

(2) 孺子将入於井。(孺子 将に井に入らんとす。)

▼「将」は、「まさに……す」と読み、「今にも……しようとする」の意味を表す再読文字。「孺子」は、幼児。「井」は、井戸。

(3) 及时当勉励。歲月不待人。(時に及んでは 当に 勉励すべし。歲月 人を待たず。)

▼「当」は、「まさに……べし」と読み、「当然……すべきである」の意味の再読文字。「及时」は、機会をとらえる。「勉励」は、努力する。

(4) 仁之勝不仁者、猶水勝火。(仁の不仁に勝つは、 猶ほ水の火に勝つがごとし。)

▼「猶」は、「なお……ごとし」と読み、「ちょうど……のようだ」の意味を表す再読文字。「仁」は、仁徳ある人。「者」は、「は」と読む。

再読文字には、ほかに「応」(まさに……べし・推測)・「須」(すべからく……べし・必要)・「宜」(よろしく……べし・適当)・「盍」(なんぞ……ざる・勧誘) などがあります。

では、次に「書き下し文」の学習に進みましょう。

### 書き下し文

漢文を「書き下し文」に書き改めるときには、次の原則に従う。

▼送りがなは歴史的かなづかいを用い、すべてひらがなで書く。

例 有<sup>レ</sup>備<sup>ヘ</sup>無<sup>レ</sup>憂<sup>ヒ</sup>。↓備<sup>ヘ</sup>有<sup>レ</sup>れば 憂<sup>ヒ</sup>無<sup>シ</sup>。



▼日本語の付属語(助詞・助動詞)にあたる漢字は、ひらがなで書く。

例 玉 不<sub>レ</sub>琢<sub>カ</sub> 不<sub>レ</sub>成<sub>ヲ</sub>器<sub>ヲ</sub>。↓玉 琢<sub>カ</sub>ざれば 器<sub>ヲ</sub>を成<sub>ナ</sub>さず。

▼置き字(訓読しない漢字)は、書かない。

例 折<sub>リ</sub>頸<sub>ヲ</sub> 而<sub>シテ</sub> 死<sub>ス</sub>。↓頸<sub>ヲ</sub>を折<sub>リ</sub>て死<sub>ス</sub>。

▼再読文字は、最初の読みを漢字で書き、二度めの読みはひらがなで書く。

例 沁<sub>ニ</sub>知<sub>ル</sub> 故郷<sub>ノ</sub>事<sub>ヲ</sub>。↓沁<sub>ニ</sub>に故郷<sub>ノ</sub>事<sub>ヲ</sub>を知るべし。

○ 日本語の助詞や助動詞にあたる漢字には、耳(……のみ)・之(……の)・不(……ず)・可(……べし)・如(……ごとし)・也(……なり)などがあり、これらは書き下し文ではひらがなに改めます。

○ 置き字には、而・於・于・乎・矣・焉などがあります。これらの漢字は、書き下し文には書きません。

では、トレーニングをとおして、書き下し文の作り方を確認しましょう。

### トレーニング

解答は巻末にあります

7 次の漢文を、書き下し文に改めなさい。

(1) 君子之交淡若水。

▼「之」は、日本語では助詞、「若」は助動詞にあたる。

(2) 教化者、国家之急務也。

(3) 一寸光陰不可輕。

之・若・者・也・不・可などの付属語(助詞や助動詞)は、漢字をひらがなに改めます。

8 次の漢文を、書き下し文に改めなさい。

(1) 青出於藍而青於藍。

▼「於」「而」は置き字。「藍」は、青の染料を取る草。

(2) 良藥苦於口而利於病。

(3) 聞者皆感嘆焉。

▼この「者」は、「もの」と名詞に読んでいるので、漢字のままにする。

於・而・焉が置き字であることに注意しましょう。ところで置き字は、たとえば「焉」が断定の語気を表すように、いずれも意味をもった漢字です。しかし訓読では、「感嘆せり」という送りがないの中に、十分に断定の語気が表されているために、「焉」は、読む必要のない置き字となったのです。ほかの置き字の場合でも、事情は同じです。置き字は、読まないから無意味な字だと早合点してはいけません。なお、漢文を訓読法によらず、中国語として読むときには、置き字もちろん発音されます。

次は、再読文字です。再読文字を書き下し文に改めるときには、最初の読みは漢字のまま、二度めの読みはひらがなに改めます。

### トレーニング

解答は巻末にあります

9 次の漢文を、書き下し文に改めなさい。

(1) 未<sup>レ</sup>来<sup>。ラ</sup>

(2) 将<sup>レ</sup>来<sup>。ラ</sup>

(3) 趙<sup>チウ</sup>且<sup>マキニ</sup>伐<sup>ウ</sup>燕<sup>ケン</sup>

▼「且」は、「将」と同じく「まさに……す」と読み、「今にも……しようとする」の意味。「趙」「燕」は、国名。「伐」は、征伐する。

(4) 過<sup>カ</sup>猶<sup>ユウ</sup>不<sup>レ</sup>及<sup>。バ</sup>

▼「過」は、やり過ぎ。「不及」は、やり足りない。

(5) 過<sup>カ</sup>則<sup>チ</sup>宜<sup>ヨウ</sup>改<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>

▼「宜」は、「よろしく……べし」と読み、「……するのがよい」という適当の意味を表す。「過」は、ここでは過失を犯すこと。

(6) 人<sup>ハ</sup>須<sup>スベカラク</sup>自<sup>チ</sup>省<sup>セ</sup>察<sup>ス</sup>

▼「須」は、「すべからく……べし」と読み、「ぜひ……する必要がある」の意味を表す。「省察」は、反省すること。

再読文字については⑤にも取り上げておきましたから、参照しましょう。

では、次に比較的長い漢文を用いて、書き下し文を作る練習をしてみましょう。

## トレーニング

解答は巻末にあります

⑩ 次の漢文を、書き下し文に改めなさい。

(1) 故雖有名馬、祇辱於奴隸人之手、駢死於槽枥之間、不以千里称也。

(2) 富貴則親戚畏懼之、貧賤則輕易之。

▼「畏懼」「輕易」のあいだにある「一」に注意すること。

(3) 使我有洛陽負郭田二頃、豈能佩六国相印乎。

(1)(2)(3)の解釈は、解答に示しておきます。

きょうのトレーニングは、これで終わりです。きちんと答え合わせをしておきましょう。よくがんばりましたね。お疲れさまでした。

確認テスト

今月は、古文では、「更級日記」「枕草子」「万葉集」を取り上げました。また、文法は、助動詞、漢文は、基礎的な読み方について学習しました。

きょうの確認テストでは、「更級日記」の「物語」の条から、「はしるはしる、わづかに見つつ」の部分を読み、今月学習したことから確認しておきましょう。

● 古文の語釈・通釈は、解答中で示してあります。

● 答え合わせをするときは、解説や採点をよく読んで確かめなさい。

● 始める時刻を確かめて、さあ、スタートです。

時 間	60分
得 点	120

解答は巻末にあります

1 例にならって、次の——線部の意味を書きなさい。

例 いとどゆかしきさまなれど、

〔興味深い〕

(各1点計15点)

(1) いかばかりかはあやしかりけむを、

〔 〕

(2) いみじく心もとなきままに、

〔 〕

(3) 人まにみそかに入りつつ、

〔 〕

(4) いとすごく霧りわたりたるに、

〔 〕

(5) かくのみ思ひくんじたるを、心も慰めむと、心苦しかりて

〔 〕

(6) 紫のゆかりを見て、続きの見まほしくおぼゆれど、

〔 〕

(7) いと口惜しく思ひ嘆かるるに、

〔 〕

(8) いとうつくしう、生ひなりにけり。

〔 〕

(9) 雨など降るもをかし。

〔 〕

(10) からのすの寝所へ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへ

あはれなり。〔 〕

(11) いと寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るもいとつきつきし。

(12) 火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

(13) いやつきつきに天の下知らしめししを、

(14) いかさまに思ほしめせか、

(15) あまざかるひなにはあれど、

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

はしるはしる、わづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、  
一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちのうち臥して引き出で  
つつ見る心地、後の位も何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目のさ  
めたる限り、火を近くともして、これを見るよりほかのことなけれ  
ば、おのづからなどは、そらにおぼえ浮かぶを、いみじきことに思  
ふに、夢にいと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華  
経五の巻をとく習へ。」と言ふと見れど、人にも語らず、習はむと  
も思ひかけず、物語のことをのみ心にしめて、「われはこのごろわる  
きぞかし。盛りにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじく  
長くなりなむ。光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうに

こそあらめ。」と思ひける心、まづいとはかなくあさまし。

● 語句注 (数字は行数を示す)

1 はしるはしる || 胸をわくわくさせながら。

2 几帳 || 台に丁字型の柱を立て、それに布を垂らして、身を隠したり

部屋をしきりにしたりした家具。

6 法華経五の巻 || 「法華経」の第五巻。女人の成仏のことが書かれて

いる。

10 夕顔 || 「源氏物語・夕顔」の女主人公。

10 宇治の大将 || 「源氏物語」後編の主人公である薫の大将のこと。

10 浮舟の女君 || 「源氏物語」後編の女主人公の一人。

(1) 次にあげた語句の読み方を、現代かなづかいで書きなさい。

(各1点、計4点)

(ア) 几帳 [ ]

(イ) 法華経 [ ]

(ウ) 夕顔 [ ]

(エ) 浮舟の女君 [ ]

(2) 次の各文の——線部を口語訳しなさい。(各2点、計8点)

(ア) わづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、(1行め)

(イ) 夢にいと清げなる僧の、黄なる地の袈裟けさ着たるが来て、(6行め)

(ウ) 盛りにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ。(9行め)

(エ) と思ひける心、まづいとはかなくあさまし。(11行め)

(3) 次の——線部の助動詞「む」は、後のA・Bの「む」のうち、どちらの意味で用いられていますか。記号で答えなさい。

(各1点、計3点)

(ア) 習はむとも思ひかけず、(7行め)

(イ) 髪もいみじく長くなりなむ。(9行め)

(ウ) 浮舟うきふねの女君おんなぎみのやうにこそあらめ。(10行め)

A つれづれわぶる人は、いかなる心ならむ。(徒然草・七五段)

B 月の都の人まうで来こば捕らへさせむ。(竹取物語)

(4) 「後の位も何にかはせむ。」(3行め)とありますが、どんなことに比べると、後の位も問題にならないというのですか。次の中から選びなさい。(2点)

(ア) 人にじゃまされない自由さ。

(イ) 几帳の中に横になる楽しさ。

(ウ) 「源氏物語」に読みふける喜び。

(5) 作者は、「源氏物語」の文章などが「そらにおほえ浮かぶ」(5行め)のを、どう思っていましたか。本文中の語句で答えなさい。(1点)

(6) 「われはこのごろわろきぞかし。」(8行め)の、「このごろ」はいつに對してのことですか。また、「わろき」は、何と何についていつているのですか。本文中の語句で答えなさい。(各1点、計3点)

(ア) このごろ

(イ) わろし

3 次の和歌を読んで、後の問いに答えなさい。

秋山のもみちを茂み惑ひぬる妹を求めむ山道知らずも

柿本人麻呂

惑ひぬる＝迷ってしまった。死者を山中に葬ったのを、死者みずから山中に迷い込んだものと表現したもの。

(1) 「秋山のもみちを茂み」の部分で口語訳しなさい。(2点)

(2) 「妹」の意味を書きなさい。(2点)

(3) この歌は、何を詠んだものですか。次の中から適切なものを選びなさい。(1点)

- (ア) 紅葉の美しさ。
- (イ) 死んでしまった妻への恋慕の情。
- (ウ) 妻が迷い込んだ山中の様子。

4 助動詞について、次の各問いに答えなさい。

(1) 次の各文中の助動詞「ず」に——線を引き、その意味と活用形を答えなさい。(各1点、計12点)

(ア) 幣ぬさには御心のいかねば、御船も行かぬなり。(土佐日記)

幣では(海神様の)こ満足がいかないので、(この)お船も進まないのである。

〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕

(イ) 老いぬと知らば、なんぞしづかに身を安くせざる。

老いぼれてしまったとわかったら、どうして隠居してからだを安らかにしようとしなのだろう。

(徒然草・一三四段)

〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕

(ウ) あぢきなの憂うれき世や夢さへ見果てざりけり。(閑吟集)

どうにもならない憂き世であることよ。夢さえ最後まで見られないのだなあ。

〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕

(2) 次の各文中の助動詞「る」「らる」に——線を引き、その意味と活用形を答えなさい。(各1点、計12点)

(ア) 変はりゆくかたちありさま、目もあてられぬこと多かり。

(死体が腐り、くずれて) 変わっていく様子など、目もあてられないことが多い。(方丈記)

〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕

(イ) ここちせむかた知らず苦しきままに、臥よしまろびてぞ泣かるる。  
(旅の疲れで) 気分がどうしようもなく苦しいので、寝返りをうちながらしんと涙がこぼれてくる。  
(蜻蛉日記)

(ウ) いつもお殿しげなだばらは、重忠しげなだがやうなる者にこそたすけられむずれ。  
いつも、お前たちは、重忠のような者に助けられるのだろう。(平家物語・宇治川先陣)

(エ) かの大納言、いづれの船にか乗らるべき。  
あの大納言は、どの船にお乗りになるのだろうか。(大鏡・頼忠)

(3) 次の各文中の助動詞「き」に――線を引き、その意味と活用形を答えなさい。(各1点、計12点)

(ア) はやう、まだいと下臈げらふに侍りしとき、あはれと思ふ人侍りき。  
昔(わたしが)まだほんとうに低い身分でありましたころ、いとしいと思う女がございました。  
(源氏物語・帯木)

(イ) 都をばかすみとともに立ちしかど秋風ぞふく白河の関  
都を(春の)かすみがたつときに旅だつてきたが(今は)秋風が吹く(陸奥の)白河の関であることよ。(古今著聞集・巻五)

(ウ) これをありし住まひにならぶるに、十分が一なり。  
この庵を以前の住まいと比べると、(大きさは)十分の一である。(方丈記)

(4) 次の各文中の助動詞「けり」に――線を引き、その意味と活用形を答えなさい。(各1点、計12点)

(ア) かかる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目を驚かし給ふ。  
(源氏物語・桐壺)  
このような(すばらしい)かたもこの世に生まれておいでになるものなのだあと、あきれほどにお驚きになる。

(イ) 二つのわざ、やうやう境まかひに入りければ、いよいよよくしたく覚えてたしなみけるほどに、  
(徒然草・一八八段)  
(乗馬と歌謡の)二つの技能が、ようやく上達の境に入ったので、いよいよつばにやりたいと思つて好んで熱心にやるうちに。

(ウ) 花の色は移りにけりないたづらにわが身よにふるながめせしま  
に(古今集・春下)  
花の色(とわたしの美しさ)は、むなく衰えてしまったなあ。わたしがこの世で生きていくうえで思いにふけりながら、降る長雨をぼんやりと眺めているうちに。

5 「更級日記」の作者名を書きなさい。(1点)

〔 〕



⑥ ( ) 中の読み方にしたがって、次の漢文に送りかなをつけなさい。

(各1点、計2点)

(1) 日暮途遠。

(日暮れて途遠し。)

(2) 国破山河在。城春草木深。

(国破れて山河在り。城春にして草木深し。)

⑦ ( ) 中の読み方にしたがって、次の漢文に送りかなと「レ点」

をつけなさい。

(各2点、計6点)

(1) 日月如流老将至。

(日月流るるがごとく老将に至らんとす。)

(2) 過則宜改之。

(過ちては則ち宜しく之を改むべし。)

(3) 過猶不及。

(過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし。)

⑧ ( ) 中の読み方にしたがって、次の漢文に送りかなと、「レ点」

「二点」をつけなさい。

(各2点、計6点)

(1) 惟仁者宜在高位。

(惟だ仁者のみ宜しく高位に在るべし。)

(2) 先即制人、後則為人所制。

(先んずれば即ち人を制し、後るれば則ち人の制する所と為る。)

(3) 仁之勝不仁者、猶水勝火。

(仁の不仁に勝つは、猶ほ水の火に勝つがごとし。)

⑨ ( ) 中の読み方にしたがって、次の漢文に送りかなと、「レ点」

「二点」「上下点」をつけなさい。

(各2点、計6点)

(1) 勿以恶小為之。

(悪の小なるを以て之を為すこと勿かれ。)

(2) 如揮快刀断乱麻。

(快刀を揮つて乱麻を断つがごとし。)

(3) 不為兒孫買美田。

(兒孫の為に美田を買はず。)

⑩ 次の漢文を、書き下し文に改めなさい。

(各1点、計3点)

(1) 一挙兩得。

(2) 低<sup>た</sup>頭<sup>こ</sup>思<sup>し</sup>故<sup>こ</sup>郷<sup>きやう</sup>。

(3) 客<sup>きやく</sup>有<sup>あ</sup>能<sup>よ</sup>為<sup>な</sup>鷄<sup>けい</sup>鳴<sup>めい</sup>者<sup>しや</sup>。

11 次の漢文を、書き下し文に改めなさい。

(各1点、計4点)

(1) 惡<sup>あく</sup>稱<sup>せう</sup>人<sup>にん</sup>之<sup>の</sup>惡<sup>あく</sup>者<sup>しや</sup>。

(2) 百<sup>ひやく</sup>聞<sup>もん</sup>不<sup>ふ</sup>如<sup>じゆ</sup>一<sup>いつ</sup>見<sup>けん</sup>。

(3) 聞<sup>もん</sup>者<sup>しや</sup>皆<sup>みな</sup>感<sup>かん</sup>嘆<sup>たん</sup>焉<sup>やん</sup>。

(4) 青<sup>せい</sup>出<sup>しゅつ</sup>於<sup>お</sup>藍<sup>らん</sup>而<sup>して</sup>青<sup>せい</sup>於<sup>お</sup>藍<sup>らん</sup>。

12 次の漢文を、書き下し文に改めなさい。

(各1点、計3点)

(1) 未<sup>ま</sup>聞<sup>もん</sup>好<sup>かう</sup>学<sup>がく</sup>者<sup>しや</sup>也<sup>や</sup>。

(2) 及<sup>及び</sup>時<sup>とき</sup>当<sup>たう</sup>勉<sup>めん</sup>勵<sup>りき</sup>。

(3) 人<sup>にん</sup>須<sup>す</sup>自<sup>じ</sup>省<sup>せい</sup>察<sup>さつ</sup>。

# memo

---

教育社

TRAINING PAPER

**DAILY PROGRAM**

高校2年／国語

Printed in Japan